互は「衆生無邊誓願度」の決心を以て、世の爲め人の爲め、禽獸虫魚草木國土に至るまでもその慈悲を蒙らせねばならぬことは、皆様最早能く御心得のことでありませう、處が衆生の機根即ち世の人の性情に人々各々その趣きの異なつて居るので、性急な人もあれば、悠長な者もあり、正直の人狡猾な人、小心な人大膽な人、種々様々なもので、口に食べる物でも、甘好きな人もあれば、辛好きな人もあり妊娠すれば酸ばい物を好み、胃が痛めば苦味で押へるといふやうに、人々の性情慾望は實に無量無邊であります、この無量無邊の衆生を濟度するには、隨つて種々なる方法に從らなければなりませぬ併し如何に無量の慾望はありましても、これ等を濟度して行くには要するに苦を離れて樂を得、迷を轉じて悟りを開き、惡を止めて善を修せしむるに外ならぬのであります、佛陀の御眼には、この多くの衆生の罪惡と迷執と苦痛とが映じたので、その苦痛を離れ、迷執を轉じ、罪惡を止めしめんが爲めに萬乘の王位を棄て、難行苦行の結果、妙覺果滿の地位に御登りなされて、横

說竪說遊ばされたのであります、その御說法の方法は、前に申したやうに衆生の性情に無量無邊の異りがありますから、四悉檀の方法に依りて應病與藥の濟度を遊ばされたのです、この悉檀といふことは華梵兼稱と申して、華は中華といふことで支那のこと、梵とは天竺のことで即ち今の印度のこと、悉檀とは支那の語、檀は檀那の畧で天竺の語、支那の語の悉は徧、梵語の檀那は施、即ち徧施の義でアマネクホドコスといふことであります、義を以て言はば悉檀とは、「情ヲ離レテ物ニ應ズ」とも解釋をつけるのです、兎に角衆生を濟度し徧く法益を施すのに、四通りの手段方法に依られたのを佛教の四悉檀と申すのであります、その四悉檀とは、第一が世界悉檀、第二が爲人悉檀、第三が對治悉檀、第四が第一義悉檀と申します、この四悉檀に對する法益を擧げますと、世界悉檀は歡喜の益あり、爲人悉檀は生善の益あり、對治悉檀は破惡の益あり、第一義悉檀は入理の益あり、これが一應の釋でありますが、この信仰箇條の上では四悉檀の名が少しく違つて、第一の世界悉檀

を社會悉檀といひ、第二の爲人悉檀を傳道悉檀といひ、第四の第一義悉檀を入理悉檀といふてありますけれども、その意味に於ては少しも違ひはありませぬ、たゞ當時の解り易い語で顯した丈けのことてす、これを強ひて固執して舊の名を用ゐて、今の世の一般に解り難いやうにしては、それこそ却て佛陀の悉檀の御意に背くと申すものではありませぬか、それゆゑこの信仰箇條では、その意を害せぬやうに文字だけを解り易く替へてありますから、社會悉檀とは世界悉檀のこと、傳道悉檀とは爲人悉檀のこと、入理悉檀とは第一義悉檀のことゝ心得て御聞きを願ます四悉檀の最初てすから非常になが〳〵と前置きを演べましたが、これからイヨ〳〵始めの社會悉檀の箇條に就いて御話申すことゝ致しませう

人の機根は千差萬別

この世界は前に申しました通り、その國々てイヤ國々どころてはない、その郡その村その部落て、人情も風俗も同じやうには行きませぬ、村や部落て異なるばかりてはない、一軒の家の內で親子夫婦兄弟等の間柄でも、皆各々その性情も欲望も異なつて居ります、この千萬無量に性情の違ふ人々を濟度して悉く歡喜の益を被らしめるには、矢張千萬無量の手段方法を以て社會の爲めに盡さなければなりませぬ、古から高僧碩德の御方々が、布敎傳道は申すまでもなく、或は山を開き橋を架し、或は殖產に興業に、政治にも經濟にも乃至文學技藝等、社會萬般の事に渉つて大いに力を盡されたのは、皆社會悉檀の法則に順じて行はれたのてあります、佛敎を信奉する御互は此世に處して居る上は、是非共社會悉檀の法則に順じて、社會公共の爲めに勵んで善事を行はねばなりませぬ、全體我々人間といふ者は、惡い事をせぬといふだけでは、人としての行ひを圓滿に仕遂げて居るとは言へないてせう、皆樣能く考へて御覽なさい、惡い事をせぬといふことはそれは當然のことて、別段に褒めるほどの價値はありますまい、「おれは生れてから今日まで他人の物を盜んだことはないがドーダ感心てはないか」と言つたところが何にも感心する程のことはない、他人の所有物を盜まないのは當然て褒める價値はないてせ

積極的の制欲のみは爲すに足らず

う、「おれは生れてからまだ一度も人を殺したことはないが感心ではないか」と言つても別に感心ではないそれは當然のことです、悪い事をせぬだけでは人としては賞讃するほどの價値は何もありませぬ、併しその悪い事をせぬといふことだけでも、實際は容易なことでないものと見えて、御互自分の一身を修めるだけのことですら、當然の行ひをしないで、兎角分限不相應な不正な行爲があつて、他人にまで迷惑をかけるやうなことがありますが、實に恥づべき淺間しいことではありませぬか、ガそれは兎も角御互は、學者の語を借りて申しますと消極的に悪事を制したゞけではならぬ、是非共積極的に善事を行はなければなりませぬ、動物の生命をといふばかりではならぬ、更にその上に慈悲を加へて生ある者を救はねばならぬ、他人の所有物を盜まないといふのみでなく、慈善心を以て施しをして行かねばならぬ、總て自分に悪い事をせぬといふばかりでなく、更に進んで善い事をして社會一般の爲めを計らねばなりませぬ、それが人たる者の爲すべき當然の義務と申すものです

斯様に申しますと、或は疑難を起される方があるかも知れませぬ、自分のことを捨て置いて他人の爲めを計つて居たのでは、商賣することも何も出來ないではないか、商賣するには是非共自分の爲めに利益のあるやうにせねば勘定は立たぬではないか、なぞと言はれるかは知りませぬが、そは御間違ひです、商賣して利益を得るのは勞に酬いる當然の理てあつて、何も私慾で不正な利益を壟斷する譯ではありませぬ、併しその商賣をなさるにも、實際は他人の爲め社會の爲めを計らぬ人はない筈です、大工が家を建築ても自分の便利がよきやうにするのではない、必ず主人の爲めに都合のよいやうにと心を籠るでせう、呉服屋が呉服物を賣るにも那樣品物が買つて用ゐる人の爲にいか、如何な模樣が客の好みに合ふかといふことを先きに思ふてせう、陶器家が陶器を燒くにも、下駄屋が下駄を造るにも、皆客の用ゐるのに便利のよいやうに工夫を凝らすのてす、理髪師が斬髪をするにも、醫師が病人を診察するにも、悉く他人の爲めを計るのではありませぬか、誠の心を以て他人の爲

に盡して、その利益を得るのは、それは勞に對する當然の報酬であつて、何もそれが社會悉檀の法則に背くといふ譯ではありませぬ、背くのは他人の爲めを計らないで、自分の爲めのみを計るやうな商人です、衆人の爲めでなくて自分の爲めのみを計る商人は外國へ輸出する商品に不正の物を混じて、我國商業界全般の信用を地に落すやうなことをするのです、外國輸出どころではない現に我が忠勇なる軍人が異域の土にあつて慘風沐雨の艱苦を嘗めつゝ戰鬪して居る處へ、石や砂を罐詰にして送つたやうな賊商人が居つたてはありませぬか、これ等は皆社會の爲めも衆人の爲めも思はないで、自分の腹のみを肥やさうとする我利々々賊商です、實際の商人たる者は決して己れの爲めのみを思はないで、先づ社會の爲め衆人の爲めを計つて、國利民福を增進して行きますから、隨つて社會の信用を得て、永久に商賣が繁昌して自他平等にその利益を蒙ることになるのであります、これは商賣の一方に就いての話でありましたが、農業でも、官吏でも、教職員でも、悉く社會の爲めに盡さない者はない筈です、然うなつて來れば立派に社會悉檀か行はれて居るので、世の中の人が惡い事を爲ないのみならず、更に進んで善いことをするやうになつたのです、此處が善事を爲すといふことが、實に容易なことではないので、自分の爲には善い事と思つても、他人の爲には惡いこともあり、我家の爲めには善くても隣家の爲めに惡るいこともある、善いとか惡いとかいふことさへも、なか〳〵容易に分らぬくらゐのものですから、善事を爲すと一口に申しましても、先づ善を爲すといふことの手始めから御話申さねばなりませぬ、その善を爲すの手始めといふのは、これが大切なところです能く御聞き下さい、善い事をする手始めとは、他人の善を認めることでありまず、他人の善事を認めるといふことは何でもないことのやうですが、これが實に難いのです、皆樣如何です、他人の善事を認めることが出來ますか、これさへ出來たならば慥かに自分で善い事が出來ます、今も昔も同じこと、これが容易に出來なかつたのでせう、皆樣御存じでせうが◎彼の韓文公が原毀

善を爲すの手始めは他人の善を認するにあり

といふ文章を書いて其中の語に、「嘗テ試ニ衆ニ語ゲテ曰ク某ハ良士ナリ某ハ良士ナリ云々」とあるあの言です、分り易く言へば斯うてす、あの人は良士ものぢやと誰かを賞めると、如何にも良士ものぢやと賛成する者は、必ずその賞められた人の黨派の者であるそれてなければ、疎遠にして利害を同じうしない人か、又はその人を畏れて居る者かこの三人である、其外の者は必ず他人を賞めると、強き者は言に怒り、弱き者は色に現して怒るものであるといふことですが、他人の善を認めることは何時の世にも難しかつたのてありませう

社會惡檀（下）

皆様那様です、他人の善事を快く誠認することが出來ますか、古も今も同じことてこれは造作もないやうなことてすが、その實誠に難行しいことてあります、自分と並んだ位地に居る人のことを、他が賞讃ると何だか妙に不快の感じが起りはしませぬか、前に申した通り「強者ハ必ズ詘ニ怒リ懦者ハ必ズ色ニ怒ル」と韓文公が言はれたのは實に能く人々が他人の善事を誠認することの出來ない弱點を穿つた語てあると申さねばなりますまい、他人の善い事を認めることが出來ないのは、男子ばかりてはない御婦人方でも、イヤてもてはないお氣の毒てすが他人の惡事をいろ〳〵と評判せられるのは却つて御婦人方の方が甚しうはないてせうか、元より貴顯の御夫人淑德高き御令孃方が他人の惡口なぞおつきになる筈はありませぬけれども、下賤の者には兎角ありがちのことてす、婦人方がお出逢になつて、開口の挨拶だけは聲を大けに、お寒うとかお暑うとか言はれますが、聲が細くなつたが何の話をして居られるのかと思へば、鼻と鼻を近寄けて小さな聲てベチヤクチヤ〳〵と饒舌つて居るのは大抵他人の惡評てす、何家の嫁は縹致がよいとか惡いとか心行きが面白くないとか、彼家の娘はツンとして居るの、此處の婆さんは吝嗇なとか、何とか彼とか御婦人方が寄つてコソ々々話をするといへば屹度他

人の悪評に極つて居るとも言つてもよいくらゐではありませぬか、をり〳〵井戸端でお三どん連が會議を開いて居るのを傍聽しましても、甲論乙駁いひやつて容易に討論が終結しないのは矢張他人の評判のやうてす、楨那は惡くはないが夫人がケチだとか、令嬢が我儘てよく怒るとか、際限なく惡口ばかり並べるやうてす、誰れても那邊から何處までも、他人の弱點短處は堀り出し摘み出して並べ立てゝも、他人の善い事は容易に認めないやうてすが、それが非常な不心得てす自分て他人を賞めないばかりてなく、他の人が他人を賞めるのを聞いてさへも癪に障るやうな嫉妬心があるやうては、すなはち他の善を認めることが出來ないのてすから、自分の善事を行ふことなぞが出來るものではありませぬ、自分の過ちを他から忠告れると直に怒り、他人を賞めるのを聞いては怒るやうな心ては實に淺間しいものてす、他から自分の過を忠告して呉れるのを喜び、また他人の善事を認めて、他人に何か善い行ひがあれば大いにそれを賞めて、自分もその善い行ひを眞似るくらゐにしたならば他人は益々〳〵喜び勇んて善事を勵むやうになるのてす、世に善い事をするといへば他人の善を認めるほどよいことはありませぬ、そのことは孟子も言つて居られます、少し難解しいやうてすが孟子の文を讀みますから、能く御聞き下さい○「孟子曰ク子路ハ人之ニ告グルニ過アルヲ以テスレバ則チ喜ブ禹ハ善言ヲ聞ケバ則チ拜ス。大舜ハ焉ヨリ大ナル有リ、善人ト同ウス、己ヲ舍テ人ニ從ヒ、人ニ取リ以テ善ヲ爲スヲ樂ム、耕稼陶漁ヨリ以テ帝ト爲ルニ至ルマデ、人ニ取ルニ非ル者ナシ、諸ヲ人ニ取リ以テ善ヲ爲スヲ與ス（即ち人の善を許し認めることてす）者ナリ、故ニ君子ハ人ノ善ヲ爲スヲ與スヨリ大ナルハ莫シ」とあります、私は常にこの語を服膺して自ら精神修養の資といたして居りますから御預りとして置きますけれども、この語を一々講釋して居ては長くなるから、皆樣如何てす「諸ヲ人ニ取リ以テ善ヲ爲スハ是レ人ノ善ヲ爲スヲ與ス者ナリ」とは何と麗はしいではありませぬか、「己ヲ舍テ人ニ從ヒ、人ニ取リ以テ善ヲ爲スヲ樂ム」このやうな美事な

他人の善事を認むるは恕の一字にあり

心を以て人と交つて御覽なさい、世に惡人といふ者はないでせう、人の善事を快く見て取ることが出來さへすれば、自然と自分の善い事を行ふやうになるのです、「諸ヲ人ニ取リ以テ善ヲ爲ス」で他人の善いことを認めて、それを賞讃して自分もそれを眞似るやうにして御覽なさい、他人も自分の行ひを認めて而かもそれを眞似てまで呉れるかと思へば、肝に銘じ魂に銘じて喜び勇んで善事を勵むやうになる、何とこれほど喜ばしいことはありますまい、皆樣が小兒を御育てになつてもさうでせう、小兒に何か善い行ひがあつた時それを賞めて他の兄弟にまでそれを言ひ聞かせて眞似させるやうにしたならば、その小兒は益々喜び勵んで善いことをするやうになるでせう、總ての人がその通りですから他の善事を認めるほど善いことはありませぬ、他の善事を認めるのが全く自分に善い事を爲る手始めとなるといふことは、實に拔くべからざる眞理であります、さうすればその他人の善事を認めるには、自分に如何樣なる心を持てば他人の善事が認められるかと申せば、こゝが大切で

鞭之報の話

す能く御聞き下さい、他人の爲ることが善く見るのは、自分の心に「恕」すなはちオモヒヤリといふ心があれば他人の善い事が認められます、若しこのオモヒヤリの心がなかつたならば、他人の爲ること作すことは悉く惡く見えるものです、その證據は私が韓非子を讀んだ時非常に感じたことがあります、韓非子の中の說難の文に引いてある話に◎昔衞の靈公が彌之瑕といふ人を寵愛して、この人の言ふことなれば如何なることても皆聞き入れるといふ程でありました、この衞の國の法律には若し君の車に駕る者があれば誰れても刑罪というて足を斬り棄てるといふことが定めてある、處がこゝに妙な事が出來たのは、或時君の寵愛して居れる彌之瑕の母が急病に懸つたので夜分飛脚がそのことを報知て來た處が、彌之瑕は急いで君にも申し上げず其夜直に君の車に駕つて、母の病氣を見舞に行つてしまひました、サー殿中では多くの人々が區々に評議をして居る、君の車に乘れば足を斬り棄てる法律であるが今度駕つたのは君の一番に寵愛して居られる彌之瑕であるから、刑罪を免れ

るであらうと一人が言へば、他の一人は反對してサウは行くまいそれでは國の法律を無視する譯ではないかなぞと、様々に評して居る其中に靈公の耳に入つた、サー大變靈公は何と仰せになることかと互に顔を見合はせて聞いて居ると、靈公は可愛い彌之瑕ですから、オモヒヤリが胸一杯にあるので、足を斬れよと言はれるかと思ひの外、却つて賞めて言はれるに、彌之瑕は賢明なものである、乃公の車に駕れば刑罪に處せられるといふことは覺悟しながら母の病氣と聞いて急いで己れの足を斬られることを忘れて、乃公の車に駕つたのは如何にも孝行な者である、感心な者であると賞められました、またその後、君と共に或果園に遊だことがある、其時彌之瑕が桃を食かけた處がその桃が丁度非常に美味かつたので、全個食はないで半分殘して、それを君に差し上げると君がその半分食ひ殘しの桃を啗つて、餘りに美味いからまた感心せられた、甘い桃だこれほど甘い桃を食ひかけて、自分で全個食はないで乃公に呉れたか、我を愛する哉、其口を忘れて以て寡人に啗はしむと言つて

賞められました、オモヒヤリがあると皆善く見えるのです、その後彌之瑕が年齒をとつて、寵愛が弛んで來た時、即ち君のオモヒヤリがなくなつた時、君の言はれるのが酷なではありませぬか、彌之瑕は憎くき奴である、昔て乃公の車に駕つたことがある、それのみならず、先年果園に遊んだ時、無禮にも食ひ懸けの桃を乃公に侑めたこともある、思へば重々不屆千萬な奴である處分してしまへと怒鳴られたといふ話が出て居りますが、皆様どうです、前に賞めたその同じ事で後にはそれが爲めに重罪に行はれるとは何たる矛盾であせう、これが前には寵愛してオモヒヤリがあつたから、彌之瑕の爲ること作すことが悉く善く見えたのです、即ち他の善を認められたのであります、それが後にはそのオモヒヤリがなくなつたので、前に賞めたことまでが惡く思はれたのではありませぬか、總て世の中の事は爲ることや作すことに善いとか惡いとかと極つて居るのではなくて、オモヒヤリがなくて作せば惡く惡くなるのです、早く申せば手を以て、若し親を擊つたならは如何でせう、親を

擊てばこの手は忽ち親不孝の手ではありませぬか、けれども設ひ手を以て親を擊つても、父上さん今日は御疲れて肩が凝りませうから、少し叩きませうと言つて擊てば、同じ親を擊つても擊てば擊つほどこの手は親孝行の手となるではありませぬか、親を擊つのは善いのでも惡るいのでもない、たゞ心にオモヒヤリがあつて擊てばその手が直に親孝行の手となり、オモヒヤリがなくて擊てばその手が直に親不孝の手となるのてす、オモヒヤリのあると無いとて善とも惡ともなるといふことは分りませう、他人の善事を認めるのもその通りでオモヒヤリがあれば、自然と他人の善事を見て取ることが出來るのであります

前に申しました通り、人間は惡い事をせぬといふことは當前のことで、それのみでは人間の本分を全く盡したとは申されませぬ、惡い事をせぬと定めたならば、更にその上に進んで善い事を爲ねばならぬ、善い事を行ふといふには、他人の善事を認めることが出來ねばならず、他人の善事を認めるには自分の心にオモヒヤリがなくてはならぬ、オモヒヤリがあれば自然と他人の善を見て取ることが出來るといふことを重ね〳〵申したのでありますが、そのオモヒヤリが即ち同情であつて、同情の眼を以て社會を見渡せば千萬無量の人々が、罪惡を犯して居ればその惡を止めて善を修せしめ、闇迷に陷つて居ればその迷を轉じて悟を開かしめ、若痛に沈んで居ればその苦を離れて樂を得せしめて行かなければなりますまい、この社會の多くの人々の爲めを計れば公共の事業を怠つてはなりませぬ、併し其公共の事業を起すにはなか〳〵容易なことではない、近來に目覺しい事業を成就した人でいへば蘇士の運河を開鑿して世界中の人に大利益を與へた佛國のレセップ氏の如きは、實に非常な困難をして、一意專心終始一貫、遂に千八百六十九年に至つて、彼の洪業を竣功したのですが、社會公共の事業は何事によらず困難の事には相違ありませぬけれども、已に佛弟子たる者は大慈悲佛心のオモヒヤリを以て、世の爲め人の爲め、一切衆生を救ふのを社會悉檀の佛意と申すものであります

第八座

傳道悉檀（上）

物質的救濟と精神的救濟

今席は、四悉檀の第二傳道悉檀の箇條について御話申します、前座で委しく申して置きました通り、通常佛教の四悉檀の上では、第二を爲人悉檀といふのですが、今この信仰箇條ではその意を害せないやうに、たゞ文字だけを當時の語にして傳道悉檀としてありますけれども、その意味は爲人悉檀といふても異なつたことはありませぬ、前座の社會悉檀の箇條では、佛陀の大慈大悲の御心に由りて、社會の爲めに公共事業慈善事業等を起して人生救濟の仕事をせねばならぬといふことを御話申しましたが、同じ利他と申す中にも強ひて分別していへば、第一の社會悉檀は形體を先きにして衆生を濟度する方ですから、學者らしい句調でいへば物質的救濟法とでも申しませうか、そして今席の傳道悉檀は精神の方を重にして、勸善懲惡の教をするのですから、

精神的救濟法とでも申せばよいでせう、この傳道悉檀のことも難解しうはありますが、一應法華文句と申す書物にある釋義を讀みますと◉「佛說法セント欲スルニ必ズ先ツ衆生機器ノ大小、宿種ノ深淺ヲ觀ジテ、然シテ後其機宜ニ稱ウテ而シテ爲メニ之ヲ說テ、正信ヲ生シ善根ヲ增長セシメ給フ、故ニ爲人悉檀と名ク」と申されてありますが、この文の意は、佛樣が說法を遊ばさるには、必ず一番先きに衆生の機根を觀じてそれに應じて法を御說きになるのです、衆生の機根といふのは前座にも申した通り、人々の性情と慾望は各々異なつて居るものですから、機根に稱ふやうに法を說くのであります、古からの藥種を服用にも、風邪をひけば葛根湯、腹が痛めば熊の膽といふやうに相應なものがあるので、豈夫脚氣の症に頭痛膏を用ゐもせず、耳の痛に目藥を注入もしないでせう、必ず其病に應じて藥を與へなければなりますまい、佛樣が法を御說き遊ばすにもその通り、衆生の心病を能く診られた上、その病に應じて藥を與へられたのです、御弟子方に修行の方法を示されましても

他の性情を辨へざれば往々失態を演す

一例を擧げますと、五停心といふやうなことがありますが、その箇條を並べると、一には多貪の衆生は不淨觀、これは男女の色相の上に互に染着して色を貪る者には、不淨の觀を作してその慾を去らしめ、二に多瞋の衆生は慈悲觀で、餘り物事に瞋り易い者には、慈悲の心を起し衆生を愍んで瞋を對治せしめ三には多散の衆生は數息觀、これ等は一々講釋は致しませぬが、序に皆申しますと、四には愚癡の衆生は因緣觀、五には多障の衆生は念佛觀といふやうに、各々その病弊に由つて觀念の仕方が異なつて居ります、總て衆生を濟度するには、その性情と慾望とを能く見て取つて、其機に稱ふやうに法を說かねば何の所詮もあるのではありませぬ、吾々御互が平生人と交際してもさうでせう、先方の性情を知らないで居ては、トンでもない誤解をせられることが間々あるものです、他人の機嫌をとる積りで行たことが、却つて機嫌を害ねることがないともいへませぬ◎百喩經に妙な話が出て居ります、或所に一人の金滿家があつて、誰も彼も此人の機嫌を取らうと思つて、種々樣々に苦心して居りました、或時此金滿家が庭に居て唾を吐いた、スルト其側に居た者が直に履物で蹈んで、其唾を痕跡のないやうに消して仕舞ひますと、非常に金滿家の氣に入つて賞められた、處が其處に一人の愚な人が己も金滿家の機嫌を取らうと待ち構へて居ると、その金滿家が唾を吐かうとして未だ吐かず、口に含んで今や吐き出さうとする時、右の愚物は此所ぞと思つて直に足を擧げて、その口を酷く蹴つたものですから、たまつたものではない唇は忽ち傷れ齒が折れるといふ騷ぎで、機嫌を取りどころではない却つて非常に機嫌を害ねたといふ話しがあります、これは人々の性情を明かに知らないで、何んても彼ても同じ法を以て濟度しやうと思つても、それは無効である のみならず塲合によりては却つて害になるといふことを示されたものであります、今この傳道悉檀の箇條の上で御話申すのは、たゞに佛樣が衆生の機根を觀じて說法遊ばされたことばかりを申すのではありませぬ、皆樣は最早三信の箇條で佛法の正道を御信仰になり、三行の箇條で懺悔も濟んで、佛法僧

世尊途中に阿難に教へ給ふ

の三寶に歸依し、戒法までも御受けになつて、立派に佛の位に御入り成されたのであるから、この傳道悉檀もたゞ佛陀の衆生濟度の方法であるとばかり見て置かないで、皆樣御自分に傳道悉檀を行はなければ佛教信者といふことは出來ますまい、皆樣が多くの人々に道を傳へて、多くの人々に正信を起さしめ善根を增長させるには、矢張皆樣も絕えず善知識に從うて說法を聽聞しながら、人々に向つて傳道なさらなければはなりませぬ、善知識に從うて善法を聞きますと、たとひ聞いた教を一旦忘れることがあつても、矢張その聞法の功德は失ふものではありませぬ、そのことは佛本行集經の中に出て居りまず◎御釋迦樣が或時難陀といふ御弟子を連れて、伽毘羅城を御通行遊ばされて居られましたが有る魚屋の前にて難陀に魚ー魚と申しても大方肥料に用ゐるやうな腐つた物でせうーを買はしめ、それを草に包み難陀に持たせて八九町も步かれた後、その魚を棄てさせて奇麗に手を洗はし、暫くして佛が難陀に向つて其手を嗅いで見よ未だ嗅いかと仰せになると、難陀はその手を嗅い

て、如何にも惡しき臭ひが致しますと答へました、ソコデ佛が示されますに惡知識に從うて邪教を聞くもその通りであるぞ、一旦聞けばその教を棄てた後も折り〳〵は惡しき思ひが浮び出すものである、必ず惡知識に親近いてはならぬぞと御示しになり、また暫く行き給ふ中に沈香を商ふ店の前に出て、難陀に名香を買はしめそれを手に持たされました、そして前のやうに暫く行つてその香を棄てさせ、手を洗つた後、難陀よ其手は那樣香ひがするかと仰せられますと、難陀はその手を嗅いで如何にも善い香ひが致しますと答へました、スルト佛はまた御示しになるに、善知識に從ふも其理である、一度善き教へを受けたならば、たとひ其後忘却れることがあつても、時に觸れ緣に逢うては矢張善い思ひが浮び出るものであるぞ、朱に交れば赤くなるの理で親近する者を擇ばねばならぬと御示しになつたことがあります、皆樣は最早佛法僧の三寶に歸依なされた御方々ですから、邪道に蹈み入られるやうなことのないのは申すまでもありませぬけれども、佛敎を御聽聞になるのも善い

香氣の去らぬ中に、切々善知識に親近いて御聞きなさらなければなりませぬ御自分に御信仰せられた上は多くの人々にその道を傳へて、善根の心を生させるやうにつとめて行かねばなりませぬ、人々をして善心を生さしめると申しましても、恒の産なければ恒の心なしで、淺間しい凡夫は日用の衣食に不充を感じて來ますと、窮すれば濫すの語のやうに、どうかすると不心得のことをするやうになるものですから、前に社會悉檀の箇條で申した通り、多くの人々に善根の心を起さすには、是非共形體の救濟から懸らねばならぬ順序です、それゆゑ、古から佛法を傳へられた御方々は山を開き、橋を架しまた處處に病院等を設けて、病人を助け貧民を救うて一切衆生を濟度せられたのであります、人は衣食が足らぬ處から困しまぎれに惡事を働く、イヤ衣食は足りても足ることを知らぬ者はまた惡事を働いて、種々な苦を招き起すものです、ソコデその苦を拔いて樂を與へるが爲めに、勸善懲惡の事業を起されねばならぬことは物の順序でせう、その惡を懲らすというても無暗に他人を慘

酷に取扱つて、擊たり蹴つたりして懲らすのてはありませぬ、それは懲らすのではない力を以て壓制するといふものです、力が足らないから止むなく背かぬといふだけのことで、決して心服したのではありませぬ、今此處て言ふ所の懲らすとは、相手の者が心服して自然と善心を生ずるやうにすることです、その一例を申しますと◎昔、盤溪禪師といふ高僧が、播磨國で江湖會に數百人の僧侶を伴れて出て居られました、江湖會と申しても御存じない方もありませうが、これは禪宗の寺で九十日間を期して、多くの僧侶が制規を結んで修行することがあるのです、處がその會中に一人の賊僧が居るものと見えて、をり〳〵衣服や金錢等を盜まれるので、互に心を配り詮索して居ると一人の犯罪者が出ました、ソコデ衆僧が殘らず禪師の許に詰めかけて、賊僧を追ひ出されよとせまりますと禪師は一應これを聞き届けられても、矢張追放もせずそのまゝに棄て置かれるので、衆僧は再三再四禪師に迫り、彼の賊僧を追放せられぬならば、我々は殘らず今日限り下參致しますと嚴しく申出

ると、禪師は笑ひながら仰せられるには、各々方退散したくば何時なりとも御勝手に退散致されよ悟道善行の僧侶達には別段に教ふるにも及ぶまい、この江湖會も畢竟左樣なる惡僧を教へ諭して善心に移らしめんが爲めの修行であるに、會中にさる惡心の僧があるのは拙僧の德の及ばぬ所以てあれば、妄りに追放すべき道理はないと諄々に示されますと、衆僧も禪師の德量の廣大なるに感じて猛しい勢で詰めかけた者が悉く頭を低れて一言の答へもなく、その輕卒なることを謝して立ち去りました、賊僧もこれを傳へ聞き大いに悔悟して、自ら衆僧の前に出て、今まで盜み居つたることを殘らず懺悔して前非を悔い、禪師の面前で難有涙に咽び、佛祖に對して衷心懺悔して、其後は德行堅固なる僧となられたといふことが北窓瑣談に出て居ります、君子の德は風、小人の德は草、草、之に風を加ふれば必ず偃すと聖人が言はれましたが、盤溪禪師の如きは實に君子の德を具へて居られると申すべきではありませぬか、「慈悲の目に憎しと思ふものぞなき、罪ある身こそなほあはれなれ」

とある通り、御互が慈悲哀愍の眼を開いて世の中を見渡せば、憎むべき人は居るものではありませぬ、私はさう思ひます、世に惡人が居るやうては未だ自分が善人でないのである、自分が果して眞實の善人であるならば、決して世間に惡人といふ者はない筈です、惡人といふ者が目に見えるやうては、自分の心に惡があるからです、善人の目には善人の外には見えず、惡人の目には惡人より外には見えるものではありませぬ、自分が慈悲の眼を開いて、世に憎しと思ふもの丶居る筈はありませぬ

傳道悉檀（下）

善人の眼には善人より外には見えず、惡人の眼には世の人が皆惡人となつて映ると申しますと、無理に押し附けた理屈のやうに聞えるかは知りませぬが決して押し附け理屈ではありませぬ、眞箇の善人であるならば、その人の眼に惡人の姿が映るやうでは未だその人は善

佛の眼中には唯佛のみ映現す

人ではありませぬ、青色の眼鏡をかけて見れば山川草木は皆青く見えます、墨色の眼鏡をかけて見れば森羅萬象は悉く黑く見えます、祖師樣方の慈悲の御眼鏡には「憎しと思ふ者」は映りは致しませぬ、ましてや佛樣の悲智圓滿の大圓鏡に、何で憎惡の衆生が映りませうぞ●法華經には「今此三界ハ皆是レ我有ナリ、其中ノ衆生ハ實ニ是レ吾子ナリ」と宣ひ●涅槃經には「佛性等キヲ以テノ故ニ衆生ヲ視ルコト差別アルコト無シ」と仰せ出されてあります、佛樣の御眼には、決して私共は惡人となつて映たのではありませぬ、佛樣の眼には世に惡人はないのです、惡魔も外道も皆同一佛性を具へたる善人と見えたのです、たゞに生ある者ばかりではない、草木國土悉皆成佛とまで宣はれたではありませぬか、これは佛樣に限る譯ではありませぬ、誰でも自分が眞箇の善人となり切つたならば、世に惡人の居る筈はない、若し惡人が眼に見えるやうなれば、まだ自分の心は惡が蟠つて居ると思はねばなりませぬ、孔子も「苟志於仁矣無惡也」と言うて居られます、人の心の之く所が

誠に仁の凝固であるならば、自ら惡を爲さないのみならず、世の惡といふものはなくなつて仕舞ふのであります、それゆゑ、佛樣は●「菩薩餘事ヲ覺ヲズ但自心ヲ覺ル、何ヲ以テノ故ニ、自心ヲ覺ル者ハ即チ一切衆生ノ心ヲ覺ルガ故ナリ、若シ自心清淨ナレバ即チ是レ一切衆生ノ心淸淨ナルガ故ナリ」と御示しになつてあります、自分の心が清淨であるならば、一切衆生の心は悉く淸淨潔白なものであるのです、皆樣が多くの人々と交られるにも、自分の心を淸淨にして置いて、少しも權謀や術數を用ゐないで、他人に接するやうになさるならば、相手の人が立派に自分の心鏡に映じて、聊も邪念は浮ばず相手は善人となつて顯れるに相違はありませぬ、他人に接する時に自分の心を淸淨にせねばならぬといふことについては、私は彼の勝海舟翁が外交の局に當つて談判する時の心得として談されたことに非常に感服して居ります、◎その海舟翁の話は「おれは是迄隨分外交の難局に當つたが、併し幸ひ一度も失敗はしなかつたよ、外交については一つの秘訣があるのだ、心は明鏡止

水の如しといふ事は、若い時に習つた劍術の極意だが、外交にもこの極意を應用して少しも誤らなかつた、斯ういふ風に應接して斯ういふ風に切り拔けやうなぞと、豫め見込を立てゝ置くのが世間の風だけれども、これが一番惡いよ、己れなぞは、何も考へたり目論見たりすることはせぬ、たゞ〳〵一切の思慮を捨てゝしまつて妄想や邪念が靈智を曇らすことのないやうにしておくばかりだ、即ち所謂明鏡止水のやうに心を磨き澄まして置くばかりだ、かうして置くと機に臨み變に應じて、事を處する方策の浮び出ることは、恰も影の形に從ひ響の聲に應ずるが如くなるものだ」と話されたことがありますが、何とありがたい教訓ではありませぬか、人に接して談話するにも、自分の心に種々の惡分別を廻らして居ると、相手の人の惡い處ばかり見えて、自分も何時の間にか惡人となつて居るのです、私が申して如何なものですが、皆樣が說教を御聽きなさるにも、自分の妄想や邪念を以て何も說教師の行爲を質すにも及ばず、その容貌を批評すべき道理のものではありませぬ、佛樣も◉「無上菩提ヲ演說スル師ニ値ハンニハ種姓ヲ觀ズルコト莫レ、容顏ヲ見ルコト莫レ、非ヲ嫌フコト莫レ、行ヲ考フルコト莫レ」と御示しになつてあります通り、說教師の氏や素性を質したり、容貌や行を論ずることは不要ぬことです、說教を御聽きなさるにも、海舟翁の話のやうに心を明鏡止水の如く淸淨にして信受なさらねばなりませぬ、自分の心を淸淨にして教を聞けば、先方には設ひ卑近なる道を說いて居ても、また先方には虛僞を言うても自分では眞實に受け込むこともあります、◎雜寶藏經に面白い話が出て居ります、昔、智慧の勝れた一人の婦人があつて、深く佛法に歸依して時々僧侶を吾家に請待して供養しては說法を聽聞して居りました、或日至つて愚な老僧が招かれて其家に參りましたが、元より愚な者で佛法の道理も知らぬと申してよい位の者でありました、その婦人はお齋食を供養して後、老僧に法話を願つて、自分は獨り靜に坐り目を塞いで今に法話が始まるかと一心に待つて居ります、處が老僧は元より無學であつ

て說法が出來ないものですから、婦人が日を塞いで居るのを幸ひに、足音も立てないやうにソット其場を逃げて還つてしまひました、婦人は一心に待つて居ても何の說法もないから、不思議に思つて頭を上げ目を開けて見ると、老僧の影も形も見えませぬから、婦人は熱心に考へて「成程有ると思ふ物は無常で何時の間にかなくなつて居る、全く空なものである、有爲轉變が姿婆の有樣である、と一心に念じましたので、初果といふ證を得ました、ソコデ婦人はこれは全く老僧の御陰であるから、御寺へ參つてお禮を申さうと、直にお寺へ參りました、老僧はこのことを聞いて自分の智慧のないのを恥ぢ、寺にも居堪らず又候逃げ出しました、けれども婦人の方では苦に探し尋ねるものですから止むなく面會致しました、スルト婦人は此までの證を得たことを言つてお禮を陳べ、其上に特別の供養を設けて大恩を報いました、老僧は恥ぢ入つて深く自分の不甲斐なきを責め、修行を致したのでこれもまた證を得たと申すことです、これは說法を聽聞する時には說敎師の氏や素性を質すには及ばない、先づ自分の心を淸淨にして居れば、自分で自分を救濟することが出來るといふことを示されたのであります、皆樣も他人の善惡は暫く措いて一番に御自分の心を淸淨にして、佛の敎法を聽聞し、自らその身に行ひつゝ多くの人々に傳道なさらなければなりませぬ、人に傳道するのに自分の心に惡の蟠りがあつては、人に感化を與へることは出來ますまい、歪んだ尺度では丈を測ることは出來ませぬ、毀れた升では量を計ることは出來ませぬ、己れが曲つて居て人を正しくせやうとは以て外のこと、自ら心を欺いて居ながら人に信用せられる筈はありませぬ◎優婆塞戒經の中に「先ヅ自ラ惡ヲ除キ後人ヲ敎ヘテ除カシム、若シ自ラ能ク他ヲ敎ヘテ除カシム、是處リアルコトナシ、是故ニ菩薩先ヅ應ニ自ラ施シ、自ラ戒ヲ持チ足ルコトヲ知リ、勤行精進シテ然ル後ニ人ヲ化スベシ」と御示しになつてあるはそのことです、自分が戒を持ち足ることを知り、惡心邪念を取り去つて、誠心誠意を以て人に接したならば、自然と人をして善心を生さしめることの出來るものです、伊

妻の貞操能く夫を改心せむし

勢物語に難有い話が出て居ります◎河內國の龍田山の麓の高安といふ村に、若い夫婦がありましたが、その夫が心得の善くない人と見えて、自分の妻が居るのに、龍田山の向ふの里に增す花を拵へて、毎夜のやうに龍田山を越えてその女の許へ通つて居りました、通常の妻ならば我夫が毎夜外へ出て獨り空閨を守つて居るやうでは、嫉妬を起さねばならぬ筈であるのに、この妻は少しも嫉妬を起しませぬ、起さぬばかりではない却つて快く夫の出るのを見送つて、嫌な顏色も顯さない、それで夫は妙に氣を廻して、女の情として嫉妬を起さねばならぬ筈であるのに、快く見送るとは合點が行かぬ、これは何でもおれが居らぬ方がよいのではないか知れぬ、夜中誰か來るのであらう、と自分の拵つた心で妻を疑ひ、或夜のこと、妻の不行狀をつきとめて呉やうと思ひ、何に食はぬ顏で毎度のやうに家を出て八九町を行くとソロ〳〵自分の家へ逆戻りをして、庭の樹蔭に身を隱し、妻が誰かを家へ引き入れるであらう今夜こそ見屆けて成敗してくれうと、ジッと樹蔭で待ち構へて居りました、

夜は次第に更けて最早三更の頃になりまして、雨戸がガラリと開いたので、樹蔭の夫はサー今ぢやと丁度猫が鼠を見附けた時のやうに、息を殺して見て居ると、妻は靜に椽端に立つて、涙を流しながら龍田山の方を見遣り、我夫を思ひやつて、自分が夫に事へる道を知らずして、何彼のことが行き屆かぬから、夫があのやうに毎夜外へお出ましになるのであらう、今頃は丁度良人が彼の龍田山を越えて居られるであらうが、彼の山には猛惡い獸が棲んで居るさうなが何卒良人の身に怪我のないやうに、明日は御機嫌よく御歸宅なさればよいがと獨語を言うて、ジッと椽に立ちながら、龍田山の方を見て居ると、折りしも風がソヨ〳〵と吹いて梢が鳴り、如何にも物凄くなつて來た時、妻は一入良人のことを思うて

風吹かばをきつ白浪たつたやま、夜半には君の獨り越ゆらん

と一首の歌を咏みました、今まで樹蔭に隱れて居た夫は、妻のこの誠心を見て、アー惡かつたこれほどまでに我を思つて呉れる妻を外に見て、今までは

道ならぬ不心得の行ひをして居たと、始めて改心してソロ〳〵と樹蔭から這ひ出て、妻に向つて自分の不心得を謝し、それからは全く行ひを改めて、夫婦睦まじく子孫相續して居るといふ話が出てあります、これはその妻が自分の惡心邪念を取り去つて、全く善人となり切り、誠心誠意を以て夫に對したので、その夫が自然と惡を棄てゝ善根の心を生したのであります、今この傳道悉檀の上の話もその通り、皆樣が已に佛法正傳の儀式に依り無量の罪過を懺悔して、佛法僧の三寶に歸依し、自ら五戒を御持ちなさる上は、世の中の多くの人々の性情と慾望を能く觀じて、それに應ずるやうに傳道しながら、勸善懲惡の事業を行はねばなりませぬ、その心得は◉『正信無常觀』に「諸の惡事は露塵ほども作らじと誓ひ、衆の善事は海嶽ほども行ふべしと願ふべきなり」と申されてある通り、誓願を立て、日々夜々惡事を制し善事を勵み前に申した如く、世の中に一人の惡人も眼に見えぬやうに、自分が善人となり切らねばなりませぬ

第九座

對治悉檀（上）

今席は、對治悉檀の箇條について御話申しますが、この對治といふことは普通に能く用ゐる語ですから、別に解釋をするほどのこともありますまい故手に對してそれを擊ち退けて、治め夷げるといふやうな意味になりませうさうして今この對治悉檀の上では、何を對治するのであるかと申せば吾等御互の心內の賊なる貪瞋癡の三毒を美事に對治して、能く善根の心を生ぜしめるやうにするのを對治悉檀と申すのであります、處がこの三毒を對治する爲めに佛陀の正法を弘通めるにも、若し世の中に邪道が盛に行はれて居るならば、その邪道から對治してかゝらなければならぬ順序でありませう、田や畑に穀物を蒔くのに、その地に草漫々と生ひ茂つて居ては、そのまゝに種を蒔く譯にはまゐりますまい、設し蒔いたにしても草が盛に茂つて居たのでは、種が

美事に生育する筈はないでせう、御互の心田地にもその通り貪瞋癡の毒草が蔓延つて居ては、佛性の種は發育するものではありませぬ、これを廣く言へば、世の中に邪法の草が生い茂つて居たならば、正法の種の下し處はありますまい、それゆゑ、佛陀の正法を世に弘通めやうとすれば、是非共邪道を對治するのが當然の理でありませう、近來は怪しげなる教會に淫祠とか邪教とかいふ名を附けて余程擯斥するやうですが、成程隨分不思議千萬な邪法も行はれて居るやうです、病氣をしても御醫者にも診て貰はないで、たゞ御水や金米糖を食はして置いて、枕元で怪しげのステヽコ舞ひをしたり、またオヌクモリとか何とか言つて奇妙不思議なことをしたりするやうな教會は無論淫祠邪教に相違はありませぬ、世間には非常な心得違ひをして實に、お話にならないやうな對象物を信仰して、物笑ひの種となることも少くありませぬ、

◎先年、私が東海道の一部を巡教しました時、神奈川縣の戸塚の驛を通りかゝると、驛の入口の小高い丘に祠があつて、その廻りには數百本の旗を立つ

て、人の參詣が絶え間なく、その爲めに祠の側に茶屋や菓子屋が出來て、非常に盛なものですから、私は何の神樣の名が「辨當箱大明神」としてあるのかと思つて參詣して見ますと、その神樣の名が「辨當箱大明神」とは如何言が行きませぬから、其所に參詣して居る老爺に「辨當箱大明神」としてあるので、如何にも合點ふ緣起の神樣かと尋ねると、その爺さんは得意になつてなが〳〵と緣起を說き出しましたその大要は『この辨當箱大明神といふ神樣は驗驗のあらたかな神樣だよ、その緣起といふのは斯うだ、先年或る樵人が向ふの山へ木を伐りに行く時辨當箱を此處の樹の枝に繩吊つて置いて、山で仕事を濟ませてさあ辨當を食ふべしと思つて樹の枝から卸して蓋を開つて見れば、不思議にも容れて置いた飯は一粒もなくて中には一杯に鮒が滿んで居るので、その樵夫は驚いたの驚かないぢや無い、ぶッ魂消ちやッただよ、これやあ平凡の辨當箱ぢやない、飯を容れたのが鮒に化るとは神變不思議だ、狐だ狸だ妖怪ぢや變化ぢやと區々に評して居たが、とうと神樣に違ひ無いといふことになつて、

その辨當箱を「辨當箱大明神」として祭り上げ、たゝ飯を鰯に化るくらゐの通力のある神樣が病人を本復させることの出來ぬ筈は無い、慾望を叶はせて呉れぬ理は無い、何ても彼ても祈禱れ〳〵て以て祈願を籠めると何を願つても成就しないことはない、隣家の權兵衞の痼癪も平癒れば向の嫁の寸白も快くなり、貧乏人は運が善くなる、不縹緻な者は容貌がよくなるといつたやうな騷ぎで、毎日毎夜參詣の絶え間は無いだ、惡老は過日から日參して腰の痛みが餘程快くなつたが、御前樣も何か慾望があれば願を籠めたらよかんべい』といふやうなことを長々と談しかけられて、私も妙に思ひました、辨當箱の飯が鰯に化けるとは奇態なことをいふものぢや兎に角それがあれまでに盛になつて茶店や料理店までも出來ことは辨當箱も豪氣なものぢやと思つて居りました、處が今年、私が教務を帶びて矢張東海道の神奈川縣を巡教して、戸塚の驛を過ぎます時に、例の辨當箱大明神が相變らず盛なかと思つて、能く氣を附けて見ると、今は茶店や料理店どころか、旅一本もないのみならず、

その祠さへも見當らないものですから、餘りに不審に思ひ、土地の人にその樣子を尋ねますとその人の申しますには、あの「辨當箱大明神」のことてすが、あれは實に馬鹿氣たことであつたので、昨年限り後は絶えてしまいました、といふのは斯うです、昨年の今頃でした隣部の或る農夫が通りかゝつて大明神の前の茶店に休息んで、辨當箱大明神とは妙な神樣の名ではないかその緣起は如何かと尋ねたので、茶店の女が辨當箱の飯が鰯に化けた次第を悉しく談しますと、その農夫が大笑ひをして、さうかそれは妙だ實はその辨當箱へ鰯を入れ替へたのは拙者なんだ、先年拙者が車に鰯を載せてこの驛を通る時、この坂道で非常に空腹になつて、息も絶れさうになつたが、折惡く辨當を持ち合はさないので、眩暈がするまでに空腹じくなつて立往生をして居ると、側の樹の枝に辨當箱のぶらさがつて居るのが目に附いたから、最うそれが食いたくて是も非も思うて居る間もなく、誰れの辨當だが知らないが、まゝよ見附けられたらその時のことゝ覺悟をして、苦しまぎれにとうとその

辨當を食つてしまつたが後で、これは濟まないことをしたと思つて、まあ飯の代りに鯖なりと容れて置かうと思つて、中にギッシリと鯖をつめ籠んで置いたのぢやが、その辨當箱が大明神になるとは奇妙だと農夫が物語をしたので、さうか馬鹿〳〵しいと次ぎから次ぎへと傳はつて、性體が判明ては馬鹿らしくて誰れも參詣する者がなくなり、それッきり辨當箱大明神は迹形もないやうになりました」と聞いたので私も實に驚きました皆樣如何です、世間には隨分これに似寄つた迷信は澤山にあるでせう、このやうな愚にもつかない迷信は、前に申した淫祠邪教と同じやうに、對治してしまはなければなりますまい、山の神ぢやの木の神ぢやのといつて、矢鱈無性に祭り上げた神には怪しい神樣が限りなくあるでせう、宗教學なぞといふ學問の上からこれを分類して御話し申せばなか〳〵難解しいのですが、兎に角そのやうな馬鹿げた神に歸依しても御互は、到底三毒を對治して善根の心を生ずなぞといふことの出來るものではありませぬ、歸依する對象は佛法僧の三寶でなくてはな

らぬことは今更申すまでもないことですそれゆゑ、祖師樣は、徒ヲ ニ所遁ヲ怖レテ山神鬼神等ニ歸依シ、或ハ外道ノ制多ニ歸依スルコト勿レ、彼ハ其歸依ニ因ヨリテ衆苦ヲ解脫スルコトナシ早ク佛法僧ノ三寶ニ歸依シ奉リテ、衆苦ヲ解脫スルノミニアラズ菩提ヲ成就スベシ」と御示しになつて居られます、何か非常に失望するとか、又は大病にでもかゝつて希望少くなつて來ると、苦しまぎれに心の迷ひから何にでも歸依るものですが、さういふ時こそ大切なのです、徒らに苦しまぎれに山神や鬼神に歸依したからとて、その歸依に因りて苦惱を解脫することの出來るものではありませぬ、煩悶苦惱に陷つたならば、早く心を清く正しくして三寶に歸依せねばならぬ、尤も心が清く正しくすることが出來るくらゐならば、煩悶苦惱はしないなぞと理屈をつける者もありますが、理屈も何もありませぬ、早く三寶に歸依して苦惱を解脫するのみならず、菩提の善根心を起さなければなりませぬ、邪道を對治すると申しても無性に攻擊することではない、正法に眞實歸依し奉つた時には邪

道は自ら對治せられて居るのです、これ等は廣く佛法を弘める上に就いての對治法でありますが、今この對治悉檀の本精神は心内の賊なる貪瞋癡の三毒を對治するのです、そのことは法華文句の中に◎「三ニ謂ク衆生ノ貪欲多キ者ノ如キハ不淨ヲ觀ゼシメ、瞋恚多キ者ニハ慈心ヲ修セシメ、愚癡多キ者ニハ因緣ヲ觀セシム、此等ノ諸病ニ對スル爲メニ此法藥ヲ說ヲ偏ク衆生ニ施シ玉フ、故ニ對治悉檀ト名ク」と釋義を施してありますから、この貪瞋癡の三毒を對治する方法について御話することゝ致しませう

對治悉檀（下）

私共御互が日々夜々に、身と口と意の三業に由つて罪を造つて居るとは實に夥しい者でありますまいが、如何に自惚の強い者でも、靜に胸に手を置いて起し方の我が行爲を顧みたならは、よもや人の前で言へぬやうな行爲をした覺えはないとは言へますまい、身では罪なき動物を殺したり、擊つたり蹈むだりしたこともありませう、口では惡口雜言罵詈讒謗も時に因つては覺えがないとも言へますまい、意では罪もない人を憎むだり怨むだり、また種々な道ならぬ思ひを起したこともありませう、この身口意の三業に由つて限りなき罪を造つて居る、それを一口に八萬四千の煩惱と申すのですが、その八萬四千の病氣の根原は何物であるかと、これを能く〳〵質して見ると、御互の心の奥底にたゞ三ッの微菌が棲んで居るのです、その微菌とは何であるかと言へば即ち貪瞋癡の三毒でありまず、この三毒が身と口と意の三業に因つて八萬四千といふやうに數限りのない罪を造り出すのであります、それゆゑ、その病原なる微菌の貪瞋癡の三毒を對治さへしたならば、總ての心病は自然に平癒して、心内は安全に四肢五官悉く太平無事に治まる道理なのです、ソレデ今その貪瞋癡を對治する方法を示して「衆生ノ貪欲多キ者ノ如キハ不淨ヲ觀セシメ、瞋恚ノ多キ者ニハ慈心ヲ觀セシメ、愚癡多キ者ニハ因緣ヲ觀セシム」といふやうに各々その藥法まで說いてあるのであります、この貪欲多キ者ノ

如キハ不淨ヲ觀ゼシム」と申すのは、一應は男女間の色相に貪着執念する者の爲めに示されましたので、男は女を愛し、互に貪欲を起して執着し、間違つたことを仕出來すやうな者には、不淨觀と申して、人間の身體の不淨なることを觀念させるのです、男女が互に縹緻がよいの姿が意氣なのなぞと言つて想つたり想はれたり、美女ぢやとか好男子ぢやとか言つて居てもその皮膚を一つ隔てば血やら膿やらで、目も當てられぬ不淨の凝り、革の嚢に臭穢を包んだものである、その不淨の凝りに何で戀愛執着すべきものがあるか、と觀念してその執着を去るのを不淨觀と申すのであります、が併しこれはたゞ一應男女間の色相に貪着するのを對治するだけの一法ですが、この貪瞋癡の貪はたゞにその一法のみではありませぬ、一切の順境と申して自分の氣に適る物に對しては、それを悉く自分の所有にしたいホシイ〳〵と思ふのは皆貪欲と申さなければなりませぬ、世には貪欲の爲めに自分で自分の身を苦しめて居る者は實に多いことでせう、有るが上にもまだホシイ〳〵で、金滿家と

吐月峰は溜るほどきたないといふ諺がありますが、足ることを知らない者は幾等有つても限りはない、佛樣が「不知足ノ者ハ天堂ニ處ルトイヘドモ亦タ意ニ稱ハズ」と仰せられましたが實にその通りです、貪欲度を超えると貪つたが爲はに却つて損をして、それで自分の利益のやうに思つて居るものもあります、無住法師がそのことを戒めて示された話に◎昔、南都に唐人て齒拔の名人がありました、慾に目のない或る人が、一本の齲齒が痛んで迚も耐へ難いので、この唐人の許に來て、齒を一本抜くについて價は幾何かと尋ねると、二文であると答へました、スルト慾に目のない人であるから、一文て抜いて呉れぬかと値切り出した、唐人に一本の齒のことなれば無代て抜いてもよいとは思つたけれども、先方の言ひ分が心惡いから一文では抜かぬと言ひ張ると、互に減價ろ減價ないと言ひ爭つて居ましたが、とうと三文で二本の齒を抜くことに相談が纏りまして、痛みもしない健康の齒と併せて、二本を三文で抜かして置いて、それて一文の得をしたと思つて喜んで居たさうで

あるが、成程この男の考へては、通常なれば二本の齒を拔けば四文拂はねばならぬ所を三文で拔かしたならば、一文の得なりと思つたであらうけれども畢竟するに眼前の慾に迷つて結局の利害を知らぬ者と申さねばなりませぬ、痛みもせぬ健康の齒を拔けば、その拔く時の痛みは言ふに及ばず、その上將來に害を及ぼすといふことにも考へが至らないのであります、慳貪邪慾にしてたゞ目前の利ばかりを得やうとする者は大抵これに類する行爲をして居るのです、佛法の教へは自未得度先度他と申しまして、設ひ自分に渡ることが出來ないでも、多くの人々を濟度せねばならぬと心得て、徒に我利々々主義に傾かないやうに社會の爲めに、慈善公共の事業を勵んで行かねばなりませぬ、それには自他平等の無我觀に入つて、平等一味の利益を施してこの貪欲を對治して行かなければなりませぬ、イカリ腹立つといふことを對治して行かねばなりませぬ●佛陀が「瞋恚ノ害ハ則チ諸ノ善法チ破リ好名聞チ壞ス今世後世ノ人見ント喜バズ」と御示しになつてありますが、如何にも瞋りの爲めに名譽を壞り信用を落して、衆人から忌み嫌はれるやうなことは多くあるでせう、誰でも怒つた時の顏は見たくもないものです、日外も御話申しましたが誰でも怒つた時は人間の心はありませぬ、必ず鬼になつて居るのです、ムヲ〳〵と怒つて眞ッ赤になつた時は赤鬼になつたのです、眞ッ青になつた時は青鬼になつたのです、そのやうな赤鬼や青鬼を誰が見たく思ふものですか、今世後世の人見ることを喜ばずと御示しになつたのは、如何にも能く分りまず、また諸の善法を破ると御示しになつたのも、皆樣御自身に覺えがあることでせう、十年の交際も一朝の怒りの爲めに不和になることは珍しくはありますまい、夫婦の間で極々秘密に閨物語をしたことでも、若し夫婦の間に口論でも始めて御覽なさい、それこそ大變です、他人に知れぬやうに內證話をしたことを、近所隣家へも聞えるやうに大聲を揚げて怒鳴り出すてせう前に秘密にして話し合たことは何の役にも立たなくなつてしまいます、全體

公憤と私情の別

怒るといふものは修養が足らないで胸が淺いからです、皆樣、這邊の溝河を御覽なさい、底が淺くて瓦礫が凹凸になつて居るものですから、上から水が流れてその石に衝突るとバシヤ〳〵と怒つて居ります、その怒るのは矢張底が淺いからでせう水が次第に流れて大海に注いだならば、大海ではバシヤ〳〵怒りはしませぬ、怒るならば家の如く山の如き大いなる波を起して、一度怒つて天下の民を安んずと言つたやうな怒り方をするでせう、これは公憤と申すので、大君の爲めとか國家の爲めに怒るのですから、怒ると申しても平和を求める爲めの大活動をするのです、今私が申して居る怒るとは、孟子の言はれた所謂小勇で、愚にもつかぬ小事にベラボウ呼はりをして目玉をむいたり、摺つたの剝いたの酢の午蒡のと譯もないことを言ひ立てゝ、血眼になつて額に筋を浮べるやうな、罪を造る瞋恚のことを言ふのです、我慢の強い者は、敵手が怒らせやうとしてかゝつた時、直に怒つてそれて自分が勝つた積りで居るから可笑しいではありませぬか、敵手が怒らせる考へでかゝつ

たのを、自分で怒つては敵手の謀計に落ちたのであるから、自分が勝つたのではない全く敗けたのです、敵手が怒らせる考への時、自分が怒らないで笑つて居れば敵手が敗けたのです、この道理を間違へて勝つた積りで却つて敗けて居る者が多くあるやうです、併し佛陀は敵手が怒つた時に笑へとも仰せられてはありませぬ、「瞋恚多キ者ニハ慈心ヲ觀ゼシム」と御示しになつてある通り、慈悲心を起して一切の境に對しますれば、怒り腹立つ譯はありませぬ、それについて難有い話がありますぬ◎昔、支那の歷史の上で有名な劉寬饒といふ人です、彼の人は一生涯にたゞの一度も怒らなかつたといふ人ですが、その妻君は好奇な方と見えて、夫の怒つた顏を見たくなつたので、或時下婢に命令て汝は明朝は早く起きて味噌汁を澤山に熱く煮て置けよと言ふたので下婢は不審に思つて、それは如何致すのですかと問ひ返すと「イヤ外ではない汝も知つて居る通り、當家の檀那は少しも怒らないから怒らせるのぢや、檀那は綿密な人で毎朝折目の正しい着物を着て、朝廷へお出懸けになるから

明朝は早く起きて澤山に煮た味噌汁を汁桶に盛つて檀那の座敷の出口で待つて居て、檀那が座敷から襖を開けて出懸ると過つた體でその味噌汁を、檀那の肩先きから浴せかけるのぢや」「それは奥樣私には迚ても」何に出來ぬことはない、怒られまいと思ふことなれば難行しいけれども、怒らせる積りてするのに何が出來ないか」と壓制で命令られたものですから、下婢はその翌朝例の味噌汁を持つて、檀那の座敷の出口で待ち設けて居ると、主人はさう言ふことゝは少しも知らず、官服を着て今襖を開けて出ると、下婢は檀那の肩からその味噌汁の熱いのをバッサリと浴せ掛けました、たまつたものではない主人はビショ濡れになつた、妻君は側で最う怒るであらうと思つて見て居ると、主人は苦い顏もしないで、言葉優しく下婢に向つて「オー汝は手を燃傷でもしはしなかつたか」と言はれたので、妻君は夫の寛洪の大量に感じて泣いてその罪を謝したといふことですが、何と皆樣「オー汝は手を燃傷でもしなかつたか」とは何たる有り難い教訓でありませうか、怒らせる積りて無

法の仕向をする者がありましても、慈悲の心を以てこれに對したならば瞋恚は起るものではありませぬ、それゆゑ、瞋恚多き者には慈心を觀ぜしむと御示しになつたのであります、

次には、愚癡を對治しなければなりません、この愚癡といふとは無始已來の無明煩惱で、因果の道理を辨へないのを愚癡と申すのであります、世の中に罪を造るといふその本源を質して見ると、皆因果の道理を知らないから起るのです、善因善果惡因惡果の理を眞實に深く信じて居たならば、惡業を作ることの出來るものではありませぬ、食物でも食べ過せば胃病になる、飲酒も量を過せば過失を招くといふくらゐの見易い因果は、誰にでも能く判明ることであるのに、兎角食ひ過す人や飲み過す者が多く居るのですから、今世に於て造つた罪が、來世に報いるとか、來々世に報いるとかといふやうな順次業や順後業の道理は、たゞ道理を說明したくらゐでは、通常の人には容易に合點が行かないてせう、因果の道理はこれを信ぜない者には、如何に詳かに

解釋しても分るものではありませぬ、この因果の理を信ぜない者等が、惡業を造つて直に順現業の道理で自らその身を害した事實が「迪吉錄」に出て居ります◎唐の眞宗皇帝の天禧年中に、三人の盜賊が共謀して一つの古塚を堀りかへしまして、多く財寶を取り出し、それを三人で分配することゝして勘定して居たが、餘りに空腹になつたので、その中の一人が市へ餅を買ひに行きました處が後の二人が相談致しますのに、この財寶を三人に配けるよりは我等二人で兩分しやうではないか、さうするには彼が餅を持つて歸るや否や不意擊ちに殺して仕舞ふに如くはないと申合はして、待ち設けて居るとは知ないで、一人はイソ〳〵と餅を持つて歸つて來ると、唐突に殺害してしまひました、さうしてその死骸を谷の底へ埋めて置いて、二人は空腹てたまらないから直にその餅を食ひかけました、處がこゝが恐ろしいところで、前に餅を買ひに行つた男は餅を持つて歸り乍ら考へるのに、ァノ財寶を三人に分配するよりは己れが一人で占有るに如くはない、それにはこの餅に毒を容れて

持ち歸り、知らぬ顏して二人に食はせば難なく占有ることが出來ると考へて毒を容れた餅を持つて歸つたのであつた、それとも知らず例の二人の男は空腹じまきれに大急ぎで、たらふく食ひ込んだものですからたまりません、毒に中てられて、悶き苦しみ血を吐きながら七顚八倒して死んでしまつたといふことがあります、何と恐ろしいものではありませぬか、因果應報の道理を信ぜないものに、このやうな淺間しいことをして居るものは少くありますまい能く思つて見ますれば今日の社會に、たゞ目前の利を追うて順繰り順繰りにて他を陷して、己れのみが掻き登らうとして居る有樣は、丁度この三人の盜賊が他を殺さうとして、諸共に死地に趣いたと同じてありませう、それゆゑ「愚癡多キ者ニハ因緣ヲ觀セシム」と申されて、因果を信ずることの出來ぬ愚癡の者には、因緣果報の理を觀ぜしめて愚癡迷曚を對治するのであります、この貪瞋癡の三毒を美事に對治して、善根の心を起しさへすれば、佛陀の對治悉檀の御意に稱ふのであります、

第十座

入理悉檀

皆様、信仰箇條の御話もおひ〳〵座を累ねまして、今席は四悉檀の第四入理悉檀の箇條について御話申す順序となりました、安心門十箇條、起行門十箇條、この二十箇條の中で入理悉檀は安心門の最終の箇條になるのですから、この座が濟めば次の席からイヨ〳〵起行門に移つて、佛教の倫理道徳の上から四恩六度の箇條について御話申すのであります

この入理悉檀は、前に爲人悉檀の箇條で委して申して置きました通り、普通の佛教の四悉檀の名義では、第一義悉檀と申すのですが、こゝには義に因つて入理悉檀としたのであります、その意義は些しく難解しいやうですが、例に因り法華文句の釋義を一應讀みますから御聞き下さい、その文は◎「四ニ第一義ハ即チ理也、謂ク佛衆生ノ善根已ニ熟スト知テ、即チ爲メニ說法シ、

其チシテ聖道ヲ得悟セシメ玉フ、是ヲ第一義悉檀ト名ク」とあります、この「第一義ハ即チ理也」といふその理と申すのは、即ち眞如法性の妙理のことでこの妙理に隨順して行くのを悟りといひ、この妙理に違背するのを迷ひと申すので、一切の煩惱塵勞は皆一念の迷ひから起り、一切の功德善根は悉く一念の悟りから現れるのであります、それゆゑ、佛陀はこの四悉檀の方法に依つて、偏く一切の衆生を濟度遊ばされ、第三の對治悉檀の法て、美事に衆生心內の賊なる貪嗔癡の三毒を對治して、皆善根の心が起り、機緣が已に熟したと知ろしめした處で、即ち爲めに說法遊ばされ、衆生をして眞如法性の妙理に悟入せしめられるのであります、御互はこの眞理歸入の一大事を暫くも忘れてはなりませぬ、この一大事を忘れてたゞウカ〳〵と口にばかり、三寶の御名を稱へて居りましても、それはホンの口眞似て、迚も三世に渡り十方を貫いて、千古萬古變りなき大安心を得るといふことは出來ませぬ、恰似小僧が豆腐を買ひに行く噺と同じです◎或寺の小僧が、和尙の言付けて毎晩豆

極樂へ豆腐買ひに行く

腐を買ひに行かねばならぬ、處が門前に、小僧が門を出る毎に、「小僧さん何處へ行くか」と必ず聞き質す爺が居る、小僧は門を出る毎に聞かれるのがうるさくてならぬ、いつも〳〵「豆腐を買ひに行くことを白狀せねばならぬのが忌ま〳〵しくてたまらないから、何とか甘く答へる語はあるまいかと思ひ和尚にそのことを相談すると、流石の和尚は頓智よく考へ付いて小僧に教へるのに、『それてはその爺が「小僧さん何處へ行く」と問ふたならば、「極樂へ行く」と答へて不意に爺奴を驚ろかしてやれ』と申しますと、小僧は心得たりと打ち喜び今日こそ爺奴を困らせて呉れうと、何喰はぬ顏で例の通り容器を提げて門を出ると、爺さんは相變らず「小僧さん何處へ行く」と問ふたから、小僧はこゝぞとその問ひの語が切れるか切れない間に、「極樂へ行く」と即答へると、爺もなか〳〵ぬからぬ者、直に、極樂へ何をしに行くと問ひ返へすと、小僧はそれから先きの答へは出來ない、「極樂へ何をしに行く」とやられて「豆腐を買ひに行く」と答へたといふ話がありますが、世間にはこれ

に似寄つた佛教信者は隨分多くあることてせう、たゞ極樂へ行くといふまでのことだけを習つて、その先きは「豆腐を買ひに行く」ては何の所詮もありませぬ佛教の眞理に歸入するには、三寶の御名を稱へさへすればよいとばかり知つて眞實に眞如法性の妙理に悟入して、大寂不動の境界に安住して居なければ、イザ一大事といふ時に至ると、「豆腐を買ひに行く」と答へるやうなことになるのです、我々が無始の昔一念の迷ひから、眞如の都を迷ひ出て三界六道に輪轉し、生死の海原に浮きつ沈みつして居りながら、速にこの一大事を決定して大安心を得なければ、苦より苦に入り冥きより冥きに入つて、浮ぶ瀨のない淵に沈まなければなりませぬ、「河ノ駛キ流レノ往キテ反ラザルガ如ク、人ノ命モ是ノ如シ逝ク者ハ還ラズ」とある通り、人生の旅路は念々刹々須臾も止まらず、是の日が已に過ぐれば命も亦隨つて滅じ、實に思へば悲慘なものであります◎佛陀がその悲慘なる狀態を波斯匿大王に向つて御示遊ばされた譬喩があります、こゝに一人の旅人が、際涯の知れぬひろい〳〵

野原を歩いて居りました、處がその人不圖氣が附いて後の方を見返ると、一頭の惡象が猛り狂うて恐しい牙をむきて自分を遂ひ駈けて居る、命からく〳〵一生懸命に逃げ走つても依る處はない、惡象は最早追々近づいて今にも牙に掛けられさうになつて來た、傍々傍に一の空井があつて、井側の老木に一條の葛が纏綿つて、それが井の眞中に垂れて居るので、これこそ生命の蔓と喜び急いでその蔓に把りつき、兩手で懸命に蔓にすがつて井の眞中にブラ下つて、先づ〳〵これで惡象の難は免がれたと、ホッと一息ついて四邊を見れば四面には四つの毒蛇が毒舌を出して螫さうとして居る、下を見下せば下には恐ろしげなる毒龍が紅の口を開けて呑まうとして居る、餘りのことに手も足もガタ〳〵と震ひ出し、葛を握りたる手は今にも離れさうになつた、仰いで上を見れば惡象は井の口から下を睨みて、牙を鳴らして居る、そして自分の生命の蔓と恃む葛の根を見れば今黑と白の二疋の鼠が來て、頻りにその根を噛んで早やその根は斷えさうである、また樹の根に蜂の巢があつて、樹の搖

る毎に蜂が飛び出して頭を螫す、其内に何處ともなく野火が起つて、曠野は追々に燒けて最早井までも燒け及んだ、實に慘憺たる光景である、この悲慘極まる苦境に居りながら、樹上の方から蜜蜂が時〳〵蜜を落すのが、その人の口中に這入つて來るのを、甜めるともなく甜めて見ると、妙に甘いので、その人は一切の苦を忘れてたゞその蜜を甜めて樂んで居る、今にも自分が生命の緒と賴む蔓は黑白の鼠に噛み切られて、井の底に口を開けて居る毒龍に呑まれるのも氣がつかないで居るのは、憐むべきことではないかといふ譬喩を說かせられたことがあります、これは何も遠方のことをいふのではない、皆御互が世間の果敢なき歡樂に耽つて、大いなる苦患を忘れて居ることを譬へられたのであります、そのひろい〳〵野原を旅人が歩いて居るといふのは無明長夜の廣く長いことに喩へ、後から惡象に追ひ駈けられるとは、惡象は無常のことで無常に追はれて、空井とは生死のことその生死の穴に入り嶮岸の葛は生命で、黑と白の鼠は晝と夜のこと、夜と晝との時間に壽命の根を噛み

縮められ、四邊を見れば四つの蛇とは、御互の身が地水火風の四大で出來て居ること、底に三つの毒龍とは、地獄餓鬼畜生の三惡道を喩へたもの、吾々が無命長夜の曠野て無常の惡象に追はれ、生死の井に入つてやつと萬の壽命を持つて居るのを、晝夜の鼠に噛まれて、四大所造のこの身は今にも三惡道に墮ちかゝつて居る、その時蜂が、蜂とは邪念のこと、蜜といふのは五欲のこと、この財色食名睡の五欲の歡樂に耽つて、一切の苦患を忘れて居るが、野火とは老病て、おひ〳〵壽命は縮つて來て居るといふことを譬喩を以て御示し遊されたのてあります、那樣てす皆樣、如何にも人生の悲慘なる狀態が能く顯はされてあるではありませぬか、御互はこの悲慘極まる無常變遷の世に處して、たゞウロ〳〵と生死の海原に浮きつ沈みつして居つてはなりますまい、早く般若の法船に乘りて苦海の險浪を渡り、菩提涅槃の彼岸に到達して、眞如法性の明月を眺めなければなりませぬ、かく申したからとて、何も此世を見限つて他界へ轉ずるのではありませぬ、千生萬却の間に人間の身を

受けて生れくるといふことは容易なことてはない、一たび人身を失へば萬却にも復らずの御示しの如くてありまして、この受け難い人身を受けながら、徒に世を厭へ身を踈ぜよと教へるのではない、この相對世界の無常なる理を眞實に覺りさいすれば、その無常を貫いた常住不變の大寂靜に安住することが出來るのです、さうすれば生死の中に輪轉して居つても、その輪轉がそのまゝ菩提の行願となる、それは承陽大師が◉「コノ生死ハスナハチ佛ノ御イノチナリ、コレナイトヒステントスレバ、スナハチ佛ノ御イノチヲウシナハントスルナリ」と御示しになつてある通り、吾々の日々の生命が即ち佛の御イノチを相續して居るのてあつて、御互が眞實に三寶に歸依したる當所は、そのまゝ直に大圓覺の境界で、地獄も天堂も皆我が身心安居の遊戲場となるのてあります、我と佛とは畢竟無二無別のもので、諸佛如來は悉く我が心想の中より生ずるのです◉觀無量壽經に「諸佛如來ハ是レ法界身ナリ、一切衆生ノ心想ニ入ル、是ノ故ニ汝等心に佛ヲ想フ時、是ノ心則チ是レ三十二相八

十隨形好ナリ、是ノ心佛ト作リ、是ノ心是レ佛ナリ、諸佛正徧知海ハ心想ヨリ生ズ」と御說きになつてありますから、私共の心に眞實に佛に歸依し佛を想ふ時には、その心が直に三十二相八十隨形好の佛である◉實積經にも「衆生の如ハ即チ如來ノ如ナリ、如來ノ如は即チ衆生ノ如ナリ、衆生ト如來ト二ナク別ナシ」とありまして、眞如法性の妙理に至つては、衆生に在つても減ぜず、佛にあつても增さず、生佛不二、三世に渡り、十方を貫き法界に充滿といひ、禪宗では見性成佛とも卽心是佛ともいひ、眞言宗や、日蓮宗では卽心成佛といひ、淨土門では一念歸命入正定聚とも申すので、眞理歸入の一大事因緣であります、今御互は幸ひに受け難き人身を受け、値ひ難き佛法に遇ひ奉ることを得たのでありますから、生死無常を觀念して、三世因果の道理を信じ、自ら造り作したる業に因りて、十界依正の果報があるといふことが判明つたならば、朝夕佛前に燒香禮拜し、合掌恭敬して、至心正念に「我昔

所造諸惡業、皆由無始貪瞋癡、從身口意之所生、一切我今皆懺悔」と懺悔の文を唱へ、無量劫來の罪過を除滅して、身口意の三業を清淨にし、次ぎには「南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧」と三寶の御名を唱へ、眞實三寶歸依の身となりましたならば、長へに惡趣の輪廻を出でゝ、遙に菩提涅槃の妙果を獲得し、今世安穩後生善處の身となることは千佛萬祖の正しく證明ます所であります、斯りなれば◉「正信無常觀」の最終に申された通り、我身は生死無常の浮世に在りといへども、心は高く眞如の都に遊びて煩惱の塵垢に汚されず、氣は卑く世間の儞に交るも本覺の靈光を味まさず、顯には世人の爲めに愛護せられて諸願速に成就し、幽には佛神の爲めに冥助せられて諸難漸く除き、自利利他圓滿具足して、芽出度二世安樂の素懷を遂るものぞ」

此座は入理悉檀の箇條でありますから、自然と語調も專門語が多くなつて

非常に話が難解しく聞えたでありませうが、能く入念して御考へ下されまするれば眞理歸入の一大事は決定が出來ることゝ信じます

イヨ々々これで信仰箇條の安心門だけは說き終りました、丁度半分濟んだので、後半分の起行門十箇條は、私共が信心決定した上で行ふべき、佛敎道德の標準でありますから、最も大切な箇條です、皆樣御缺席なく安心門を御聽聞になりましたが、今からも御退席なく起行門十箇條を順を逐うて御聽聞下さるやうに御願ひ申して置きます

第十一座

父母生養（上）

今席からはイヨ〳〵起行門の箇條に移つて御話申す順序となつてまゐりました、前に申した通りこの起行門は、四恩と六德の十箇條でありますが、只今は四恩の初めの父母生養の恩に就いて御話申すのであります、私は今皆樣に向つて、父母生養の宏恩を說かうとしますれば、恥かしいことですが先立つものは涙です、私は生みの父母に對しては孝順の道を盡すの暇なく、宏恩の萬分一をも報ることの出來なかつたのであります、佛陀が心地觀經に●「諸ノ世間ニ於テ何者カ最モ富ミ何者カ最モ貧キ、悲母堂ニ在ス之ヲ名ケテ富トナシ、悲母在サヾル之ヲ名ケテ貧シトス、悲母在ス時ヲ名ケテ日中トシ、悲母死スル時ヲ名ケテ日沒トス、悲母在ス時ヲ名ケテ月明トシ、悲母亡キ時ヲ名ケテ闇夜トス、是故ニ汝等勤加修習メテ父母ニ孝養セヨ、」と御說き遊ばされてありますから、世間で一番の富者といへば兩親が此世に揃つて居られる人、一番の貧乏人とは不幸にして兩親を喪うた者のことです、この御敎によりますと、私ほど世にも貧乏な者はありませぬ皆樣の前で身の上談をするのは餘計なことで甚だ恐れ入つた次第でありますが、今孝順のことを御話申さうとすれば、意氣地なく亡き父母の俤が偲ばれて胸も一杯になりますから、先づ自分の身の上から說き始めねば居られませぬ、私は備後の一孤島に產聲

を上げた者でありますが、十歳の時父は大阪へ航海中不幸にしてその船が沈沒し、乘組員數名と共に、果敢なくも高砂の沖の藻屑と消えたのです、私は何時も攝播の間を往來する毎に車窓遙かに西南の十八灘上を眺めると、無限の感慨が起つてせき來る涙を禁ずることが出來ませぬ、父が亡くなつた後、十七歳の兄を頭に我等五人の小兒を女の手一つに育養ひつゝ細き煙を立てゝ居る母から、「この村（中ノ庄）からは古來をり〳〵高僧が出られ、近世では大乘寺の無底和尚、現在は鴻雪爪翁の如き傑僧が出られたが、翁の實家は丁度我家の前隣、無底和尚の實家は我家の左隣ぢやが、吾子も出家して父の菩提を吊ふ心はないか」と勸められ、また其頃菩提所の長福寺て大本山派出の或る高僧が說敎せられたのを聽いて直に發心したのであります、その後私は鈍才ながら辨道修業いたしまして、今から十年許前に我宗門の學校に入校する時に、母が急病に懸つて沒しました、前に引いた心地觀經に「悲母在ス時ヲ名ケテ日中トシ、悲母死スル時ヲ名ケテ日沒トス、悲母在ス時ヲ名ケテ月

明トシ、悲母亡キ時ヲ名ケテ闇夜トス」と仰せられましたが、私はこの時全く日沒闇夜に入つたのです、その時はまだ俗情に搦められて居る乳臭い時のことですから猶更のこと、母の訃報に接した時は實に悶絶して地に倒れました、私はその時に學校に入ることを止めて學問なんぞは癈してしまふといふ心になりました、この世の中に眞實心の奥の奥底から自分を愛して呉れる者は、母より外には一人もないのである、この慈悲深き母上が今はこの世にましまさぬからは、自分が如何に千辛萬苦の功を積み若大學は成り名一世に顯はれるに至つても、それを心の奥底から眞實に喜んで呉れる者は最早この廣き世の中には誰一人も居らぬかと思へば、現在世が如何にもあじきなく感ぜられ、森羅萬象悉く意味なきものとなつて現はれ、日も輝きを失ひ月も光を滅し、世は全く日歿闇夜となつたのです、かうなれば學問も瓜糸もあるものかと、殆ど自棄を起さうとした一刹那、私の心の奥底から鳴悲を揚げて何物か叫びました、「この不孝の子よ、汝は母を冤道に導かんとするか、汝は母に

永遠に壽命を與ふること能はざるか」と、私はこの時豁然として省悟しました、世に亡き母を佛の道に入らしむるも、また魔道に陷らしむるも、皆私の今後の行ひに因つて定まるのである、自分がこのまゝ自暴自棄してしまへば母をして一人の墮落坊主を生んだといふ汚名を蒙らしむるのである、若しも自分がます〳〵勵んで辨道修行の功が現れたならば、母に一人の善知識を生んだといふ名譽を奉ることが出來るのである、設し自分は善知識となることは出來ないでも、責めては多くの人々に孝行の道を說き示して、自分の志を遂げたいものと思ひ、天下の男子は皆我が父、天下の女子は皆我が母といふつもりで、大いなる孝行をしたいものと決心は致しましたけれども、不德非才の上に薄志弱行の自分でありますから、豫て期したる百分の一も功を積むことの出來ないのは慚愧千萬に存じます、なが〳〵と自分の身の上談をして甚だ失禮をいたしましたが、私はこの通り早く父母を喪うて無念の涙を呑んで居りますから、父母の恩を說かうとすれば自然我が身の上のことが思ひ

だされて話さずには居られないのてす、愚痴であるかは知りませぬが、私はをり〳〵老年の御夫婦が揃つて居らつしやるのを見ると、言ひ知れぬ妙な感じが起つて敬意を拂ひます、自分は到底このやうな老父母に孝養を盡すことは出來ぬかと思へば、他人の親ながら何となく慕はしく思はれます、これは決して私ばかりさうてはありますまい、誰れても兩親に早く離れた方は屹度私と同じ感じが起るてありませう、親のない者が他の親を見て我が親を思ふやうに、最愛なる我が子を喪うた親は他の子を見ても我が子のことを思ひ起すのは當然てす、男子でも女子でも、勇者でも怯者でも、今も昔も變らぬは親が我が子を思ふの情てせう、皆樣も能く御承知の通り、驍名の世界に轟き渡つた乃木大將は、日露戰役の爲めに御子息が二人までも、陸軍將校として深く敵地に入り、はな〴〵しく名譽の戰死を遂げられた、その時大將は我が子の戰死を聞かれて、怜等はよくも美事に軍人の本分を盡した、この弔ひは暫く待つて乃公が戰死したる後、三人の棺を並べて弔へよと言はれたので、聞く者

は悉く感涙に咽んだといふことは皆様も御聞きでせう、その身は第三軍の司令官として出征せられ、敵の金城鐵壁と頼みし旅順を包圍攻撃して、流石に頑強不屈のステッセル將軍をして、降を軍門に乞うて開城するに至らしめ、續いて奉天の大會戰に參加して、クロパトキンを退却せしめられたほどの勇將であるけれども、二人の愛兒を戰場の露と消えしめたのであるから、親子の情としては必ず枕席の涙はあるに相違ありません、大將は凱旋せられましても、その途中で兄弟らしき少年を見られると何時も深き感慨に沈まれたやうです、皆様も御聞きでせう、大將が一月の十三日午後零時四十分に名古屋の停車場に着き、田部少將以下文武官市民等の歡迎を受け、給養室で日本料理の饗應を受け終つて將に乘車しやうとせられた時、兄弟らしき二人の少年が小さな旗を振り擧げて勇ましく乃木大將萬歳と叫ぶと、大將は戰場の露と消えたる我が二愛兒を思ひ出されたものか、武骨な手を展べて二少年の頭を撫でながら、其齢を問ひ「善く勉強をせなけりやいかん」と言いつゝ、握手して

二少年を見詰め兩眼に暗涙を浮べられた、これを見た一同は端なくも大將が二愛兒を失はれたことを思ひ出し、孰れも粛然として襟を正し等しくハンカチーフで目を蔽ふたといふことであります、かくてその翌十四日、イヨ〳〵東京に凱旋せられた時、その歡迎の盛なことは迚も演べることは出來ませぬ紅紫の旗は幾百旒となく靡へつて、浪打つ人の面は光榮の色輝きて、火の如き熱情を動作に現はし抃舞して迎へる市民は、新橋から宮城前に至る道筋に人壘を築き、往來も爲めに杜絶したほどでありました、私もその中に加はつて歡迎いたしましたが、定刻に及ぶと大將は佩劍勳章光眩しき多くの軍人と共に迎への馬車に乘つて、一々會釋しながら勇しく宮城へ入られました、私はこの時の大將の心中を推し測れば潜として紅涙の下るを禁じ得られませぬ私はさう思ひます、大將はこの盛なる歡迎を受けられた時、必ず戰場の露と消え果てたる二人の愛兒を思ひ出さないでは居られなかつたであらう、大將の心の中では、「自分は死んでもよかつた、この年老ひたる己れは死んでも、

アノ二人の兒を生かして置きたかつたと、アレ等二人にこの盛な歡迎を受けさしてやりたかつた、アー已れは死んでしまつてもアレ等二人を生かしておきたかつた」とは幾度か將軍の胸に叫んだ繰言であらうと思ひます、また大將の夫人が、大將を我が宅に迎へられた時、二人の我が子が凱旋の數に入らぬことを思はれたならば、定めし腸も斷つばかりに感ぜられたてありませう、子を思ふことは親に超える者はありませぬ、慈父の恩高きこと山王の如く、悲母の恩深きこと大海の如しとありますが、子を持つて知らる親の恩です、誰れても自分に愛兒のある方ば、私が喋々と申さないでも分るてせう、親はその子を愛するのに決して、名譽も利益も考へるものではありませぬ、その子が生長して後に親に利益を與へて呉れるの呉れぬのとか、我が子に養はれて樂隱居をしたいのしたくないのといふやうな、そんな利害問題から打算してその子を可愛がるのではありますまい、親は一旦姙娠したならば、何も彼も打ち忘れてたゝ胎內の兒のことより外には思ふものではありませぬ、母が

胎內の兒を念ふことを佛陀は心地觀經に御說き遊ばされてありますが、この御文は拜讀した丈でも涙がこぼれます、別に講釋はしないでも能く分る御文ですから、今こゝで私がその一節を拜讀しますから皆樣靜かに御聽き下さい初めに悲母のその子を念ふことの深い慈悲を御示しになつて次に●「入胎ヨリ十月ノ間、行住坐臥ニ諸〳〵ノ苦惱ヲ受クルコト口ニ宣フルコト能ハザルナリ欲スル所ノ飮食衣服ヲ得ルトモ之ヲ喜バズ、憂ヒノ心常ニ休息ム時ナク、但ダ將ニ好兒ヲ生産ント思惟フ、若シ產難キ時ハ百千ノ刃競ヒ來リテ割クガ如ク、若シ產安ケレバ諸〳〵眷屬ト供ニ喜ビ樂ム、貧人ノ如意珠ヲ得タルガ如シ十月ノ苦痛ハ生兒ノ一聲ヲ以テ忘レ、音樂ヲ聽クガ如ク樂キナリ、子ハ母ノ胸臆ニ寢リ、左右ノ膝ヲ以テ遊履ノ所トナス、母ノ胸臆ヨリ甘露ノ泉ヲ出シテ長養フ、其恩澤ハ山岳モ及バズ、大海モ尙ホ淺シ云々〳〵」とありますが、皆樣如何です、この御文を拜讀しては父母の宏恩を念はずには居られますまい

父母生養（下）

前に引きましたる心地觀經の御文を拜聽して、感泣ぬ者は人でないと申してもよいでせう、御文言は別に講釋しないでも能く分つて居るではありませぬか、「入胎ヨリ十月ノ間、行住坐臥ニ諸ノ苦惱ヲ受クルコト口ニ宣ブルコト能ハザルナリ」とは兒を持たれた御方々には能く合點が行くことでせう、御婦人方が一旦姙娠になられたならば、胎内の兒のことが寢ても覺めても忘れられるものではありますまい、何かの時機にツイ物に魂消てもすると、おやッ胎内の兒に障つては居るまいかと直に自分獨りて心配し、また何事か急ぐことでもあつて、覺えず高い處から飛び降りでもすると、あッ胎内の兒に障りはなかつたかと、また直に氣を使ひ、火事を見れば胎兒に痣が出來るとか、死人を見ると胎兒の生命がなくなるとか、何につけ彼につけ、他に言はれぬ心配し、「欲スル所ノ飲食衣服ヲ得ルトモ之ヲ善バズ、憂ノ心恒ニ休息ム時ナク、但タ將ニ好兒ヲ生産ント思惟フ」て、懷姙して三四箇月も經つと、惡阻と言つて、何を食べてもムク〳〵と兎角吐氣を催うして、口から水が出て酸氣の物ばかり欲しくなり、神經は無闇に昂進まつて些細のことが氣に障り、矢鱈に可笑しかつたり、無性に腹が立つたり、たゞもう譯もないことを非常に苦にして心配し、時流の着物があつても珍な柄が出來ても、それを着て晴れの場處へ出やうとも思はず、起つても坐つてもたゞ胎内の兒のことばかりが氣になつて、今度產れる兒が啞者や耳聾でなければよいが、手足目鼻が揃へばよいがと、そのことのみを思惟ひつめ、「若シ產難キ時ハ百千ノ刃競ヒ來リテ割クガ如ク」とある通り、若しも難產とでもいふ時の母の苦しみは如何てせう、疊の綾目が見分けがつかぬくらゐてはない、障子の桟でさへ分らず青竹でも握り割るほどの苦みをして產み落すのであります、「若シ產安クレバ諸〳〵眷屬ト共ニ喜ビ樂ミ、貧人ノ如意珠ヲ得タルガ如シ」若しヤス〳〵と兒が生產れたならばそれこそ一家親類の者共が、寄り集まつて大喜悅び、オヤ

マー奇麗な坊ぢやこと、卵に目鼻、鼻筋も口元も、親父にソックリ、産衣は何れを着せやう、幼名は何とつけやう、それは〳〵一通りの喜びではない、母もまた「十月ノ苦痛ハ生兒ノ一聲ヲ以テ忘レ、音樂ヲ聽クガ如ク樂キナリ」て、姙娠十月の間は、寢ても覺めても忘れる暇なく、啞者ではあるまいか耳聾ではあるまいかと、心配しぬいて居たのが、今ヤス〳〵と產れ出でオギヤッと啼く一聲が耳に入ると、アー嬉しやと始めて安心して、張り切つて居た氣がガッカリと弛んで、その生兒の啼き聲を音樂を聞くよりも樂しく聞こえるさうです、「子ハ母ノ胸臆ニ寢リ、左右ノ膝ヲ以テ遊覆ノ所トナス、母ノ胸臆ヨリ甘露ノ泉ヲ出シテ養生フ」眞にさうではありませぬか、母の胸臆を遊戲場にして、乳房を咽へて紅葉のやうな手でいぢりながら、小さな足をバタ〳〵動かして惡戲をし、やがて纖指を以て母の鼻の孔に突込むやら、目をつまむやら髮を引張るやら、嬉しければ膝上でピン〳〵飛ぶ、悲しければ脊中で藻掻く、それを育つのに、おしめテン〳〵とか、マクリマクリとか、他から

見れば狂氣かと思はれるやうなことをしながら物言を教へねばならぬ、父子一枚と言ふことがありますが、全く親と子は同一體にならねば育たれるものではありませぬ、能く人の言ふ話がある●誰かゝ母が兒に食物を食べさせて居る繪を書いたのが、非常に立派に出來たので、誰も彼も皆それを賞めぬ者はなかつた、處が一人それを賞めないで批難するのにこの繪は能く出來てはゐるが、母が膝の兒に食物を喫べさせるのに、母の口が開いて居らぬから過りぢやと申したことがあるさうですが、如何にもさうです、皆樣も能く合點が行くでせう、幼い兒に何か喫べさせるには、食物を持つて兒の口に當てゝ坊やこれを食べ、アンせアーンせと言ひながら、母は自分の口を開けないでは居りますまい、自分の口を開けてこれを食べよアーシと言ひつゝ、喫ませる時は、自分が食ふのか兒が食ふのか分らぬ、全く親子一枚です、私が申すまでもなく皆樣が夙くに御存じの通り、二歲になる兒を育つには親が三歲兒になつてしまはねばならず、三歲になる兒を育つには親が三歲兒になつてしま

母その子に食を與ふるの繪

親子一枚

はねばなりませぬ親はその兒に同化してこれを教養てなければ、兒童は生長するものではありますまい、小兒が千鳥足で覺束なく歩いて居ると、親はその可愛らしい小兒の顏を見て、世の中の憂サ苦サは皆打ち忘れて愛兒に見とれてしまつて居るものです、をり〳〵下賤の貧乏人の女房達が話して居るのを聞きますと、この世智辛い社會に碌な儲けはなし、自分の口さへ過ごされぬ世帶に、また厄介なことには身が姙娠なつた、今度は產れたら直に死んでしまへばよいなぞと、貧苦さまぎれにはトンでもない考へを起して居るが、イヨ〳〵今生產れ落ちて、ヂギヤーと一聲產聲が耳に入ると、俄かにその生兒が可愛いくなつて、自分の足が當りでもしないかなぞと早や心配して、ソロッと身をかはして生兒を抱き上げる氣になるが、我か子といふものは可愛いものぢやなぞと、話して居るのを聞きますが、それに相違はありません、少蟲畜類に至るまで親子の關係は同じです、私共が日頃親しく見慣れて居る狗や猫が兒を育てる樣子を見ても分るでせう、簷に巢ふた雀でさへその子を

育つには如何ばかり苦勞をして居りますか、惡戲童等には竹でつゝかれ、猫には狙はれ犬には吠えられ、自分の生命を賭してまでもその子を育つて居るではありませぬか、鳥や獸ですらその通りですが、御互の兩親が我々を愛育して下された宏恩は如何程でせう、とてもその恩を口舌で言ひ顯すことの出來るものではありませぬ●「其恩德ハ天ニ聳ユル山岳モ及バス、大海モ尙ホ淺シ」とありますが、私はこの心地觀經の御文を拜讀する每に、常に淚の滂沱たるを禁ずることが出來ませぬ、佛陀はこの父母の恩を御說き遊ばされることは實に無量無邊でありますす●本事經には「假令人アリテ、一肩ニ父ヲ荷ヒ一肩ニ母ヲ擔ギ、其壽量ヲ盡クシテ暫クモ捨ツルコトナク、衣食醫藥種種ノ所須ヲ供給フルモ、猶未ダ父母ノ深恩ヲ報スルコト能ハズ」とか●增一阿含經には「父母ニ孝順シ供養スル、功德ノ果報ハ、一生補處ノ菩薩ノ功德ト一等ナリ」とか●末羅末經には「地ヨリ珍寶ヲ積ミテ上三十三天ニ至リ、悉ク以テ人ニ施ストモ父母ニ供養スルニ如カズ」とあり、その外に長阿含經、

六方禮經、不思議光經、善生子經、孝子經等、御經の名だけでもなか〳〵擧げることは出來ませぬ◉雜寶藏經には「但今日慈孝を讃歎スルノミニ非ズ、無量却ニ於テ常ニ亦讃歎スル」とありますから、佛陀が孝行の道を御說き遊ばされたのは、御在世の說法ばかりではなく、無量却の間慈悲孝順を讃歎遊されぬのでありますこれを普通道德の上から申しますれば◉忍辱經には「善ノ極ハ孝ヨリ大ナルハナク、惡ノ極ハ不孝ナリ」とありますが實にさうでせう、私はさう思ひますこの大恩ある親に不孝をするやうな者が、社會事業であるとか、慈善とか公共とかと言ふのは皆虛僞である、親不孝の者には決して眞實の慈善心や公共心のあるべき道理はありませぬ、父母の恩といふものは不孝な者には如何に千萬言を費やして說き立てゝも分かるものでありませぬ、學問があつても理屈を並らべても、それで孝道が盡くせる譯のものでもないです◉現に先年或る大學の講師を勤めて居た博士先生ですが、此の人は西洋人を妻にして居られますが、西洋の流義とか何とかで、自分の父

母を離れ座敷へ押し込め隱居を命じて、着る物も食ふ物も、食はれも着られもせぬやうな物を當てがひ、實に不孝千萬な仕向けをして居りますが、老父母はをり〳〵我が子を呼んで快よく談でもして見たいと思つては、御茶なぞを煎じて、博士を呼びにやると、博士は額に筋を立てゝ怒り出し、親が子を呼びつける權利はありませぬ、用事があれば此處へ御出なさいと彈ねつけるので、老父母は無念の涙を呑み、アー實に情ない世の中になつた、我が子を學問させて博士にまでして置いて、現に大學の講師ともある者がかゝる無情なことをいふやうでは、これを他に話の出來るものではない、自分の子にまで見捨てられて、此世にをめ〳〵と生存へて居るのが惡いのぢや、早く此の世の乞暇をした方がよいと覺悟を極め、別に病氣がないから御飯を喫べないで居れば死ぬるであらうと、博士の弟に僅かばかり月給を取つて居る方が、久しぶりに老父母の許へ見舞に行くと、御夫婦は骨と皮ばかりに窶れ果てゝ寢て居られるので、弟

孝子錬田祐吉氏

は驚いてその譯を聞くと、老父母は涙ながらに一部始終を物語り、最早此世の乞暇をする覺悟で今日で丁度一週間絕食して居ると答へられると、弟は老父母の手を握り餘りのことに辭も出ず、親子三人が愁嘆に暮れて居ましたがとうと老父母を弟の宅に引き取つて孝養を盡して居られるのが現に東京にあります、皆樣何と驚くではありませぬか、學問のない人ではない博士である道理の分らぬ者でもあるまい大學の講師である、幾等學問はあつても理窟は並べても、不孝の者には父母の恩は分りませぬ●八正道經に「父母ヲ信ゼバ孝順ナリ」とありますが、父母を信ぜない者に向つて幾等孝道を說いても畢竟無益なことです、これまで私が經說を引いてクド〳〵しく御話申したことも、皆樣が能くこれを信じて御聞き下さらなければ何の所詮もありませぬ、皆樣も御讀みになりましたでせうが、過日國民新聞に「孝子錬田祐吉氏」と見出しを置いた記事がありますこれは同新聞の記者が一日下村房次郎氏を訪ふた時、下村氏の語られた事なのです、この錬田祐吉氏は幼少の時その父が不孝にして家產を破り突然出奔して更に所在が知れなくなつたので、氏は如何にもして家を興し父の破產を恢復して再たび父を探し出して、老後を安穩に送らせたいもので、蹶然身を擲て浦港に渡り、更に進んで莫斯科に入りこの在留同胞の絕無なる萬里の異域に在つて、新聞配達の勞に服して千辛萬苦の功を積み、日夜孜々として學に務めて居たのを、同地に事業を營まれて居た夏秋法學士が、事務に使つて學資の補助をして居る時、去る三十五年に下村房次郎氏が萬國服裝大博覽會本邦出品人代表者を囑托せられて、聖彼多堡に行かれて、錬田氏を招いて博覽會の事業を執らしめ、翌三十六年に下村氏が歸朝せられる時、感心にも錬田氏は下村氏に若干の金を托して言はれるには、僕は不幸にして幼少にして父と別れ、その父を安心させたいのみに萬里異域の此の土に渡り、千辛萬苦を嘗め居りたるに、今は足下に依りて身を安んじ、節儉貯蓄してこの金を殘したれば、足下歸朝せらたならば、親戚の某に交付し父の所在が分明になれば、養老の資に供せらるゝやうにと、懇

懇依頼を受けたので、下村氏は歸朝するや直に横濱の親戚某氏にその金を渡されたさうである、處が三十七年に日露の戰役が起ると、祐吉氏は直ちに徵されて陸軍の通譯官に擢任せられ、第三軍司令官附を命ぜられて精勤の聞えがあつたが、本年一月に乃木大將に隨うて目出度凱旋せられ、直に下村氏を訪うて戰歷勤務の次第を物語られたさうであるが、其後杳として音信がなかつたのに、二月十一日突然大阪から下村氏に宛て郵書を送られた、その郵書です、これが國民新聞に紹介せられて多くの讀者を泣かしめた孝子の手紙です、皆樣暫く辛抱してこの手紙の文句を能く御聞き下さい

（前略）過來父の所在捜索の爲め京阪間に罷越し、夜を日に繼ぎ奔走罷在候處不思議なる事より端緒を得、昨夜十一時當地意外の所にて發見致し、本日無事小生寓所に引取り多年の一心遂に徹底致候、速に親子對面の大慶に遭逢せし事神佛の加護に外ならず、小生の想像よりも元氣にして、又決して不善の人にあらず佛の如き好隱居に有之、是れは小生昨夜初對面最初の觀

念に有之候、頗る事理に明かにして心底清く善根の老人に候、唯運拙くして家産を破り、其恢復に熱中し其手段を誤りたるより、今回親戚知人にも身の起居を知られざる逆境に陷りしものに有之、十三年振りの歸朝と凱旋に親子の對面目出度事相重り一門の慶事不過之候、是にて小生も世間に肩身も廣く、今日まで他人の知らぬ心勞と罪なき遠慮もする必要なく、雲霧晴れて日月を望むが如き感致候、胸中御推察被下度候、父の發心も此慶事に依りて健固となるの動機となり候間此機を外さず東京に連れ歸り、細くとも淸き一家を安置して、百歲の壽を得せしむる樣孝養を可盡候、尊慮には特に御心慮を煩はし居候に付、此段不取敢及御報告候云々

下村氏はこの手紙を再讀して、感極まつて泣かれたさうであります、それから妻子學生等を集めてこれを讀みながら共々に感涙に咽ばれて、

たらち男にめぐりあひしは淺からぬ
こゝろを神の汲めはなりけり

と國風一首を贈られたといふことであります、何と皆様今の世にも珍らしい孝子ではありませぬか、祐吉氏のやうな心懸けのある人こそ、公共事業とか慈善事業とかに従事するの資格があると申すのです、佛陀が涅槃の雲に御隱れ遊ばさる時に◉、「我滅後ニ於テ、當ニ波羅提木叉ヲ尊重シ珍敬スベシ乃至此ハ則チ是レ汝等ガ大師ナリ、若シ我レ世ニ住スルトモ此ニ異ナルコト無ケン」と御示しになりました、その波羅提木叉とは戒法といふことですから、佛御一代の說法は一言に申せば戒法であります、然るにその戒法の根本は何かと申せば◉梵網經ニ「孝順ハ至道ノ法ナリ、孝ヲ名ケテ戒トナス」と示されてありますから、佛の御心に副ふやうな行ひと申せば、父母に孝順の道を盡すの外はないのです、この父母に孝行をする誠心があれば、君に忠義を盡されます、即ちこの孝行の眞心を以て君に對すれは直に忠となり、兄弟の間では友となり、朋友には信となるのです、この眞心を以て、神を敬まへば神も受け、佛を禮すれば佛も納受し給ふ、左之右之造次顚沛悉く佛の御意に違はぬやうになつてまゐるのであります、即ちこの孝道が佛教倫理の根本主義と申してよいのであります

第十二座

衆人共存（上）

前座では四恩の中の父母生養の恩について御話申して置きましたが、今席は第二の衆人共存の箇條について御話申します、衆人共存とは信仰箇條の文の上で四文字に熟してあるのですが、申すまでもなく御經の中の衆生の恩のことであります、衆生とは諸の生類といふことですから、生きとし生けるものは如何なる小蟲畜類でも皆悉く引ッくるめていふのであります、併し今こゝに衆生の恩と申すその衆生とは、たゞに生きて居る動物を指すばかりではなく、有情の一切萬物、即ち木でも草でも石でも土でもありとあらゆる物は皆互に大恩のあることを申されたのであります、けれども佛様は一應有情の上

に就いて心地觀經の中に「有情輪廻シテ六道ニ生ズ、猶車輪ノ如ク始終ナシ或ハ父母ト爲リ男女ト爲リ、世々生々互に恩有り、父母ヲ見ルガ如ク等ウシテ差無シ、聖智ヲ證セザレバ識ルニ由無シ、一切ノ男子ハ皆是レ父、一切ノ女人ハ皆是レ母、如何ゾ未ダ前世ノ恩ヲ報ゼズ、却テ異念ヲ生ジテ怨嫉ヲ成ゼン、常ニ須ク恩ヲ報ジテ互ニ饒益スベシ、打罵シテ怨嫌ヲ致スベカラズ」と御示し遊ばされてあります、御互生きとし生ける者が六道に生を受け、六道とは前に十界依正の箇條で申した通り、天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄のことです、この六道をグル〳〵輪廻して、互に父となることもあり母となることもあり、世々生々互に恩のあるもので、古人が「山鳥のほろ〳〵と啼く聲聞けば、父かとぞ思ひ母かぞと思ふ」と詠まれた通り、一切の生物を見るには、常に恩愛の眼を以て、一切の男子は皆是れ父、一切の女人は皆母といふやうな廣く溫かき感謝の念に住してこれに接し、決して怨み嫉むといふやうな、淺間しい心を起してはならぬといふ御文言であります、皆

様能く考へて御覽なさい、御互は生きた者同士に恩があるばかりではありますまい、私共の平素食べて居る物から着て居る物、頂く物、穿く物に至るまで、一々これを吟味したならば實に無量無邊の衆生恩を感ぜられます、先づ着て居る衣服から考へて見ても、或る先生が言はれた通り、この着物は老嫗や少女が紡ぎ出したる絲を婦人が織り立て、それを染物屋が染め上げたるものなれば、それ等の人に恩のあるのは申すまでもなく、第一綿に大恩がある、その綿木は春雨のうるほふ頃には濡れしたされつゝ草を採り、炎天の烈しき日には頭から燬られながら水を灌ぎつゝ育てたものなれば、太陽にも大地にも、水にも人にも大恩あり、それのみならず、肥料に用ゐたる鰊は、北海道の蝦夷人が舟をあやつりつゝ漁りたるものなれば、蝦夷人にも舟にも恩があり、して見れば蝦夷が千島の荒山に生ひ立ちたる樹木や、東蘆加や樺太島の荒磯に泳ぎ廻つて居る魚にまでも恩を受けて居るではありませぬか、さう言へば爰に理窟を並べる人は、おれの着物は相當の代價を以て買ひたるものな

れば恩のある筈はないといふかも知れぬが、然らばその代價には何を出したか、必ず貨幣ならん、その貨幣は誰れが造つたといへば、造幣局である、して見れば差當り政府に恩があるのみならず、その貨幣を造る器械が英國から買ひ入れしものなれば英國の器械師にも恩がある、またその器械は重に銅や鐵を材料として造つたもの、その銅鐵は銅山や鐵山の鑛中にて、黒奴や白奴の鑛夫等が汗膏を流して堀り出せし鑛石を多くの人の手にかけて、始めて製銅鐵となるものである、その銅や鐵を製する器械と器械を運轉させる革は象の皮である、その象は印度の熱帶地方に、四時生ひ茂りたる木の根、草の葉を食として生長する動物である、して見れば思ひもよらぬ天竺の草の葉や阿米利加の眞砂や歐羅巴の巖石にまでも恩があると申さぬばならぬ着物一つについて考へてもその通りであるが、頭に頂くパナマの帽、胸に輝く瑞西時計どのくらゐ遠方の人に恩があるかも知れぬ、食ふ米には農夫の恩、棲ひの家には大工の恩、何につけても自分の自由勝手になるものはありますまい、川合翁が言はれた通り、先づ頭の上の青い處は日本の天なりと思へども、日月星辰は勝手次第に通行し、風も通れば雲も行き、電も走れば雷も荒れまはりて日本人の勝手にはならぬ足の下の塊は日本國なりと思へどもこれは本來地球の背の上なれば、時々動いて人の膽玉を潰し、これも日本人の自由にはならず、されば自分の屋敷だけは己が自由になるかと言へば、溝の端には草が茂り、草の中には蟲が棲み、庭の松には烏が泊り、軒の竹では雀の酒盛、櫻の前で蝶が舞へば、檜の枝では蟬が啼き、石の下に蛙が歩めば樹の蔭では蛇が覗ひ、なか〳〵自由になるものでない、然ら ば家の内だけはと言へば、蠅や蚊は遠慮會釋をすればこそ、蚊厨の内では蚤があさり、襯衣の下では虱が子を産み、天井の上で鼠が婚禮すれば椽の下では蟻が徙移する、何から何まで自分勝手に、己れの自由になるものはないでしやう、この社會といふものは共同生活であつて、何一つとして孤立して成り立つものではありませぬ、伊勢は津て持つ津は伊勢て持つ、持ちつ持た

千差萬別の現象は平等の本體を離れず

共命鳥の話

れつして行かねばならぬものです、人間世界だけでいふても、一人といふその文字見よや兩方より、持ち合ひなるぞ人の世の中」で御互に感謝の念を以て交際せねばなりませぬ、一切衆生は元來同一法性より顯はれたるもので必竟我他彼此の差別はない、千差萬別の現象界は、平等の本體を離れず即ち平等を離れぬ差別の相であるものを、それに執着して互に相嫉視して我見を逞うするのは、自滅を計る者と申さなければなりませぬ、そのことを佛樣は●雜寶藏經の中に共命鳥のことを引いて御示し遊ばされてあります、雪山の麓に共命鳥といふ頭が二つて、身體が一つの鳥が居た――間々このやうな奇妙な動物が居るものです、現に淺草の珍世界には兩頭の龜が居ります、皆樣の中には御覽になつた方もあるでせう、私は過日行つて見ましたが、餘程妙ですその兩頭が二樣の意志を持つて居つて食物を爭うて衝突を起すことがあります、そして右の頭は進まうとして右の二足を頻りに動かしても、左の頭が頑としてこれに應ぜず、また左の頭が進まうとして右の頭が容易に動かず、

實に奇態な龜が居りますが、この共命鳥といふのもこの龜と同じやうに、兩頭が二樣の意志を持つて居る鳥と見えます――若し甲の頭が睡るならば甲の頭が覺めて居るといふやうに睡らないで居る、また乙の頭が睡るならば甲の頭が覺めて居るといふやうに雙方が交代に休息して居たさうです、或時甲の頭が睡つて、乙の頭が起き居る時、其近くにマトーカと云ふ奇異な木があつて華が咲いてをる、そこで乙が念ふには、今己れが獨りでこの樹の華を食つた所で、腹へ入りさへすれば二頭が同時に色も好くなり力もつくからと、甲を起さずに默つて食ひました後になつて甲が醒めて見ると、腹は滿ちて居り、口からはブン〳〵と好い氣が出るから乙に向つて「お前は何處かで匂ひの好い食物を食つたのてはないか」と尋ぬると乙の頭は「實はお前が睡て居る時に、マトーカの華が丁度目の前に落ちて來たから、お前を起して共に食ふかとも思つたが、腹へ這入りさへすれ諸共に飢を除くのだからと思つて、つい獨りて食つてしまつた」と答へると、甲の頭はこれを聞いて非常に立腹して念ひました、「食物を得ても

己にいはず、默つて食ふなんて、全體己れを馬鹿にしていやがるよし〳〵己れも後々食物を得たつて起さないで默つて食つてやる」と、其後遊び廻つて居た所が、忽ち一つの毒藥の華に出逢ひました、スルト甲の頭が念ふには「おのれこの華を食うて殺してやらう」と、それから乙の頭に向つて、己れが起きて居るからお前は睡り給へ」と言つたものですから、乙の頭は何も知らないで甲の謂ふまゝに睡りました、スルト甲は直にその毒藥の華を食ひました乙の頭が醒めて見ると、氣分が餘りによくないから甲に向つて、「お前は先程起きて居て何か惡い物を食ふたのではないか、どうも身體がだるくて、眩暈がして死にさうだ」と言ふと、甲は「お前が己れの睡つてる間に默つて甘い物を食つたから、己れもお前の睡つてる間に毒藥の華を食つてお前を殺す積りだ」これを聞いた乙の頭は「さて〳〵馬鹿な奴は仕方のないものだ、善いことをしてやつても、さうは思はないで反つて恩を仇で復し居る」と大いに嘆息したといふ話を以て示されてあります、この通り共同生活をして居る社會は、他を推し落して己れ一人が利を占めやうとすれば、互に自滅するに至るのです、相互に己れの分限本職を守つて、相愛の精神を以て、社會に貢獻する所がなくてはなりますまい

衆人共存（下）

行誠上人がこの衆生の恩のことを說かれる時、面白い昔話をせられたことがあります、何處かに極々貧乏な獨身者があつて、或日御飯を食べやうと思つて、飯櫃を取り出して見るは見たもの、澤庵漬ばかりで何も副食物がないせめては煮豆なりと、思つてもそれもない、ツマラヌことだ何か御馳走が食べたいなあと思ひながら、側にかけた藥灌の湯が沸く間飯櫃に凭てトロ〳〵と居睡り仕始めると、何處からか人が來て「おれの家へ來ないか大いに御馳走をするから」と言はれて當人大喜び、開いた口に牡丹餅とはこのこと、願つたり叶つたりヨシさらばで早速出懸け、その人に連れられて行つて見ると

御馳走どころか米一粒もない、これはつまらぬと直に籾を種いて苗代を作り挿秧もする草抜りもする、大根も作つて澤庵も漬ける、漸く秋の末に米が出來たので飯を炊かうとすれば水がない、それから井を掘つて水は出たが釣瓶がない手桶もない拘もない、サア木を削り竹を割り、桶を作つて水を釣つたが釜がない、薪がない土瓶がない、山へ行つて木も伐らねばならぬ、鑛山へ金を掘りに行かねば釜が作れない茶がないから宇治まで行け豆腐がないからと豆を種け、それは〳〵大騒ぎをして漸く食物が調うてサア御上れと言はれてヒヨッと醒めたら、矢張飯櫃にもたれて居つた、盧生が邯鄲の枕と同じ一場の夢であつたといふことである、ソコデ右の先生はポーッとして、ナールホドこれでは一椀の米の飯も、一片の澤庵漬も容易に食べられるものではない、御馳走が食ひたいなどとは勿躰ないことを思つたと悔悟して、有難い〳〵と感謝の念を以つて、湯づけに澤庵で食べると實に得も言はれぬ甘味であつたといふ話がありますが、皆様、實に能く分るではありませぬか、御互が孤立し

て何でも彼でも他の、世話にはならない、恩は受けないと言つて澄まして居つたならば、イヤ決して實際に孤立して居るものは何一つとしてある筈はありませぬ、各々その關係を考へたならば、ただに人と人との關係ばかりではない、誰かが言つたやうに、我々御互と此所にあるこの花瓶や茶碗とても、如何な親しい關係があるかも知れぬ、我々は何を食つて活きて居るかと言へば、無論米を食つて居る、米は何に寄り何に寄り何を食つたのか、言ふまでもなく土に寄り土の一部分を食つたのである、そしてこの花瓶は何を以て作つてるか土である、シテ見れば土から生れた米の爲めには花瓶は親である、その子の米を食つて生きて居る我々は花瓶の孫に當る理窟になる、豈夫我々が花瓶や茶碗の孫とも言へないけれども、それからそれへと關係を考へたならば、あるとあらゆる物が自身一箇の孤立で存在して居るものは決してありませぬ、佛教ではこれを因緣和合といふのてす、設ひ草一本でも米一粒でも、因を假らず緣に依らずしては出來るものではない、如何なる大學者が何百人寄つて

何千年考へても因縁を假らなければ猫の子一疋でも拵へることは出來ない、自分が自分の力で拵へたと思つて居るけれども、それは畢竟因縁を和合させる世話をしたまでのことです、因と縁とは造ることも拵へることも出來るものではない、かく言うて居る我々も、また我々の住んで居るこの世界も、悉く因縁和合の現れて、ともく〳〵に衆生恩の凝固と申さぬばなりますまい、その因縁和合に種々様々の差別があるのは、それが即ち業力の所感で、御互の造り作したる善業惡業の力に依りて、この世界も建立したのです、極樂世界を感ずれば、さながら七寶莊嚴の淨土が現じて、松吹く風の響きも說法度生の聲となり、空啼き渡る鳥の音も迦陵頻伽の聲と聞え、また地獄を感ずれば、劍樹刀山が前に現じ黑鬼赤鬼が後を擁するので、各々己れの業力に因つてそれ〳〵の世界を感得するのであります、此の世の中に生きとし生ける者は、何でも彼でも皆自分々々の業力によりてその世界を感じて居るのです、處が人間はその中で一番に業力が強いから、感じて居る世界も從つて一番に廣い

世界が廣いから才智が勝れて居るから動もすると、我見邪慢を起して他の衆生を押し倒して、己れが獨り占領せやうとして、他の動物を苦めて果ては己れも共も惡業に捲き込まれて、未來永劫墮獄の苦惱を受けるやうになるのです、それゆゑ佛樣はこの苦惱を救ひたいと思召して、衆生の恩を御說き遊ばされたのであります◉梵網經にも「一切ノ男子ハ是レ我ガ父、一切の女人は是レ我ガ母、我レ生々ニ之ニ從ツテ生ヲ受ケズトイフコト無シ、故ニ六道ノ衆生ハ皆是レ我ガ父母ナリ、而ルヲ殺シ而ルヲ食スレバ則チ我ガ父母ヲ殺シ亦我ガ故ノ身ヲ殺スナリ、一切ノ火風ハ是レ我ガ本體、故ニ常ニ放生ヲ行スベシ、生々ニ生ヲ受ケシムルヲ常住ノ法トス、人ヲ敎ヘテ放生セシメヨ、若シ世人ノ畜生ヲ殺スヲ見シ時ニハ應ニ方便シテ救護シテ其ノ難ヲ解クベシ」と御示し遊ばされてありますこの御示しの如くに衆生の恩を感じて見れば、とても殺生なんぞする譯には行きますまい、「一切の地水は是れ我が先身、一切の火風は是れ我が本體」

一切の地水は是れ我が先身

とは何と佛の無邊廣大の御慈悲が有り難く感ぜられるではありませぬか、この世界は衆生恩の凝固と申すに、不思議はないでせう、非情の地水火風に對してすら、自分の先身とか自分の本體とかと感じて、その恩を知らねばならないとすれば、況んや生ある有情に對して同情慈愛の心を以て、その苦惱を除いて安樂を與へるやうに心懸けねばなりませぬ、◎法句經にも「一切皆死ヲ畏レ打痛ヲ畏レザルナシ、己レヲ怨シテ譬ヲ爲スベシ、殺スコト勿レ杖ヲ行フコト勿レ、常ニ群生ヲ安ンジ諸ノ楚毒ヲ加ヘザレバ、現世害ニ逢ハズ後世長ヘニ安穩ナリ」とも御示し遊ばされてある、この通り如何なる小蟲畜類でも皆己れが意志のまゝに動いて、自由に生活したいのである、鳥の高く飛ぶのも魚の深く沈むのも、皆悉く苦痛を免れて自由の安樂を得たいからではありませぬか、「己レヲ怨シテ譬ヲ爲スベシ」とはありがたい御文言である、我身をつみて他の痛さを知れの諺のやうに、何事でもこれを我身に引き當てゝ見さへすれば、物の哀れは知られるものです、それに就いてありがたい話があ

ります●昔、信州松代の城主眞田伊豆守信之公が、幼少の時から非常に學問を好まれて、日夜讀書にばかり耽つて居られるから、侍臣等は萬一幼君に御病氣でも起りはせぬかと心配し、或日一人の侍臣が罷り出て、御慰みの爲めに飼鳥を遊ばされては如何と勸めると、信之公は直にこれを採用して作事奉行に鳥籠の調製を命ぜられました、日ならずして、高さ七尺幅六尺の美麗なる鳥籠が出來たので、侍臣がそれを幼君の前に呈すると、信之は侍臣に向つて、「これで其方の氣に適ふたか」と問はれた、侍臣は奇妙な御問ひとは思つたが、「如何にも美事に出來上りました」と答へると「其方の氣にさへ適へば予も滿足致す」と言はれた、ソコで侍臣はその籠の中に飼ふ小鳥を買ひ取らうとすると、信之公は暫時小鳥を買ふことは見合ばせよとそれを止めて置いて、右の侍臣に向つて「其方の口に適する好物のみを以て、明日晝食の獻立を製して差出せよ」と言はれた、侍臣は益々妙な仰せとは思つたが、是非に及ばず料理の獻立を差出すと、「これで其方の意に適するか」「如何にも」「其方

の意に適するならば予も満足致す」侍臣はイヨ〳〵合點が行かぬ、かくてその翌日の午時になると、信之は侍臣の献立通りの膳を二人前料理させて、その侍臣を召して「其方の氣に適ひたる鳥籠であるから小鳥を入れるよりはその前に、其方先づ這入つて様子を見よ」と言はれるから、止むなく侍臣は鳥籠の中に這入ると、他の臣に命じて鳥籠の中へ煙草盆やら御茶やら、菓子や果物まで皆運び込ませて、二人前の御馳走を一人前は矢張鳥籠の中へ入れさせて、「其方の望み通りの籠の中で、其方の好みの料理を毎日差し入れて、何も不自由なく用度は辨じて使はすから、其方は一生涯その鳥籠の中で暮らすがよい、予は此處で相伴致す」と言つて外からピシリと錠を締めてしまはれた、侍臣は籠の中に居て、御馳走を食ひどころではない、青くなつて百方これを謝まるといへども更に聞き入れられぬ、侍臣は止むなく晝食だけは濟ましたが、とても籠の中には居たゝまれず、涙を流して謝するけれども、信之は「其方の望み通りの籠の中で好みの食物は何なりとも、差入れ使はすから

死ぬるまで其處に居れよ、余に使ふる以上はそれも奉公なり、籠の中にて余の慰み物となる忠義ではないか」と言ひ放されて、侍臣は泣き悲しみ悶絶して憐みを請ひますと、信之「其方苦しいか」「とても一命は覺束ないと存じまする」「然らば籠を出して使はす、其方を苦しめるは、余の欲せざる所である」と錠を開かれたので、侍臣は大いに喜び早速籠から這ひ出ました、スルト信之は普く家臣を集め、先きの侍臣を前に坐せしめ説諭して「汝等能く考へて見よ、汝等の平生棲む室は十疊敷か十五疊敷であらう、この鳥籠は狹しと雖も尚ほ三疊敷である、然るに其方は僅かに二三時間其内に居てすら、苦しいと言つて叫んで居るではないか、今夫れ鳥類は天地の間を家として、自由に虚空を飛び廻り、心のまゝに食を求めるものである、それを隘苦しい籠の中に閉ぢ込めたならば、その苦しみは其方の苦しみの比ではない、況んや閉ぢ込めたる鳥類には、飼主が心を盡して食物を與へても、それが彼等の心に適するか否かは知れぬ、然るに汝を閉ぢ込めても、常に好む所の食物を與へ、

且つ汝には何の苦勞もかけず、大小便の時は外に出ることを許して居る、それに汝は甚だ苦しいといふではないか、如何に鳥類とはいへども、それを苦めて己れの慰みとするのは心得違ひではないか、併しかく申しても決して余を怨みては相成らぬ、當時は上下推しなべて飼鳥の風が行はれて居るから、其方も飼鳥の惡事なるに氣附かずして、余に之を勸めたのであらう、余が若しそれを直に斥けたならば、將來の效能か薄いから、餘義なく其方を籠の中に入れて辱かしめた次第である、他の臣下の者共も、汝に憑りて余に飼鳥を勸める者もあるまい、去れば今日其方が余の命に從ひ籠の中に這入つたのはその忠義は百千萬言の諫めにも勝つて居る、且つまた上一人の心は即ち下萬民の心なれば、今余が飼鳥を好むと聞かば、松代領内の者共が皆飼鳥を好むであらう、その冗費は如何ばかりである、然るに今余が飼鳥を斥けたと領内に聞えたならば、領内の者共皆飼鳥の惡事なることを知つて、これまで飼鳥せし者も悉く其鳥を放つならん、然らば汝が鳥の中に入りたるは、一人て善

事を萬人に教へたのである、其方今後とても余に惡事があつたならば、常に余に諫言して呉れよ、決して今日のことの爲めに余を恨みてはならぬぞ、余は其方を以て非常の忠臣なりと思ふぞ」と言つて、賞與として金子若干を右の侍臣に賜はりました、侍臣は且つ恥ぢ且つ喜び、一同は皆其仁政に感じたと申すことてあります、この時信之公は歳が僅かに十五歳であつたといふが實に驚き入つた明君ではありませぬか、これ等は誠に小蟲畜類までも、慈愛の心を以て同情を寄せられたる好模範であります　海龍王經に「殺生セザル時ハ一切ノ寂法ヲ得、一切ノ有情ニ常ニ安穩ヲ與ヘ、常ニ慈悲ヲ樂ミ、瞋恨ノ心ヲ起サズ、此人ハ常ニ疾病ナク常ニ命長ク、臥シテハ安ク寢テハ歡バシク、又惡キ夢ヲ見ズ惡趣ヲ畏レズ」と御示しになつてありますが、御互が一切の有情に對して、平素それ等の苦惱を除き、安樂を與へるの心を持つて居れば、佛心とは大慈悲是れなりて、その心が直に御佛の心であるから、常に疾病もなく壽命も長くて、寢ても起きても體安然で、今世安穩後生善處の身

となるのであります、たゞに有情に對するばかりでなく、非情の草木瓦礫にまでも慈愛感謝の心を以て對するならば、皆悉く同一法性の現れて、前に申した通り、一切の地水は是れ我が先身一切の火風は是れ我が本體、我他彼此の差別なく、渾然たる天地間は殘らず衆生恩の塊となるのであります、さうなれば御互に我慢も邪見も更になく、諸共に感謝の念を以て、爲ること作すこと悉く社會に貢獻するやうになるのであります

第十三座

國王統治（上）

今席は國王統治の箇條について御話し申します、これは申すまでもなく四恩の中第三の國王恩のことです、この恩と申すものは、餘りに廣く深き大恩は隈なく行き渡つて、周天徧地その恩を蒙らざる物がないものですから、恩を受け恩に攝せられて居りながら、その恩を何とも感じないものです、恰似太陽

が全地球に熱と光とを供給して居ればこそ、有りとあらゆる物が剩さず殘さず生々發育することを得て居りながら、その施しが餘りに廣くて一切萬物が悉皆その恩を受けて居るものですから、別に太陽の難有味を感ぜないやうなものです、夜分なぞ提燈一張借りて闇路を安心して歩行くことが出來るとそれは非常に喜んで御禮を言うて返却しますけれども、月の夜には皎々と全世界を照らして、提燈どころではない、瓦斯燈も電氣燈も到底及ぶものでないそれでも誰も月に向つて御禮を一度も言ふものはないてせう、すべてその恩澤が普く及びますると、却つて別にその恩德を感じないやうになるものです今國王の恩もその通り、普天率土及ばぬ隈もなくその恩澤に沐浴して居るものですから、毎日その恩を說いて居りながら、或はその感じが別に深く起らぬ場合があるかも知れませぬ、併し、日出でて作し日入つて休ふ、田を耕して食ひ井を掘つて飮む、帝德何ぞ我にあらんやといふやうに、眞箇に鼓腹擊壤の民ならば、帝德何ぞ我にあらんやといふ處に、知らず識らず帝の則に從

ふといふやうに、無爲にして自ら國王の恩に攝せられて、太平無事の民となつて居るのであります、皆樣能く思うて御覽なさい、御互が我身の安全を得て、財產と權利の保護を成し下さるのは誰の御恩でありませうか、五分板單への戶を締めて、安心高枕で一生を無事安穩に渡ることの出來るのは、是れ全く上御一人の統治し給ふ大恩ではありませぬか◉心地觀經に「世間ハ王ヲ以テ根本ト爲ス一切人民ノ所依ト爲ルコト、猶世間諸ノ舍宅ノ柱ヲ根本ト爲シテ成立スルガ如シ」と御說き遊ばされてある通り、天皇は一國の根本、人民の所依となるのであります

◉自愛經にも「國ニ君ナキハ猶體ニ首ナキガ如ジ、以テ久シク立チ難シ」と御示しあらせられたやうに、一國の元首がなくては、その國の立ち行く道理はない、御互の身體に首がなくては一時一刻も生きて居ることが出來ぬと同じてす、元來國王と御生れ遊ばされるには、それだけの福德善因はあるので佛法ではこれについて引業滿業といふことを說くのてす、少しく難解しくな

りますけれども、この引滿二業のことをチヨット御說申しますが、引業とは人々の善業惡業に因り、その業に引かれて、或は人間とか畜生とか天上とか修羅とかと、業力のまに〳〵六道の中に生を受けること、滿業とは圓滿の業で、その業が別々になるのてす、それゆゑ、引業は總業、滿業は別業といふ譯、例へば人間に生れて來るだけの業があつて、それに引かれてこの人間界に生れ出たのは、上も下もなく齊しく人間といふことだけは違ひはない、これが引業といふのです、處が同じ人間といふ中でも、富んだ者貧しい者、强い者弱い者、貴い人賤い人、賢とか愚とか、美とか醜とかといふやうに、差別の無量なのは滿業に因るのです◉因果經に「端正ノ者ハ忍辱ノ中ヨリ來リ、醜陋ノ者ハ瞋恚ノ中ヨリ來リ、貧窮ノ者ハ慳貪ノ中ヨリ來リ、高位ノ者ハ禮拜ノ中ヨリ來リ、下賤ノ者ハ憍慢ノ中ヨリ來リ、長命ノ者ハ慈悲ノ中ヨリ來リ、短命ノ者ハ殺生ノ中ヨリ來リ、聰明ノ者ハ學問ノ中ヨリ來リ、闇鈍ノ者ハ不學ノ中ヨリ來ル、富有ノ者ハ施物ノ中ヨリ來ル」なぞと說いてある

のは、即ち滿業と申すとになるのであります、同じ人間といひましても、十善の天子と申して國王と御生れ遊ばさせられるには、この滿業の上からいへば、窮りなき善業を修せられたるものと申さなければなりませぬ●心地觀經に國王の恩を御說き遊ばされて「國王ノ恩トハ、國王タル者ハ福德最モ勝レタリ、人間ニ生ルト雖モ自在ヲ得ルガ故ニ、三十三天ノ諸ノ天子等恒ニ其力ヲ與ヘテ護ルガ故ニ、其國界ニ於ケル山河大地ハ大海ノ際ヲ盡シテ國王ニ屬シ、ソノ福德一切衆生ノ福ニ勝過ルヽガ故ニ是ノ大聖王ハ正法ヲ以テ治メ能ク衆生ヲシテ悉皆安樂ナラシム、譬ヘバ世間ノ一切ノ堂殿ニハ柱ヲ根本トスルガ如ク、人民ノ豐樂ハ王ヲ根本ト爲ス、王ノ有ナレバナリ、國王若シ正法ヲ以テ治メザルトキハ人民ハ依ル所ナシ、若シ正法ヲ以テ治ムルトキハ、他國ヨリ侵逼スルモノ、自界ノ中ヨリ叛逆セルモノ、惡臭疾病飢饉、不時ノ雨風等ノ恐ルベキモノハ國ニ入ラザルナリ、國王ハ他民ヲ見ルコト子ノ如ク晝夜擁護ノ心ヲ捨ツルコトナシ、擁護ノ恩ヤ大ナリトイフベキナリ」その次に國王の十德を列べて御示し遊ばされてあります、國の元首として統治權を總攬あらせられ、正法を以て萬民を御擁護遊ばされて、日夜捨てさせ給はざる其大恩は太陽の隈なく照らして偏く及ぶやうなものであります、併し、これまで演べましたのは國王の恩といふことについて、何れの國王といふことはなく、その廣大深厚なる恩德を說いたのですが、今私が御話申したいのは他の國の王樣のことではなく、即ち我が大日本國萬世一系の天皇の御恩德を、佛樣の御說き遊ばされたる教に照して御話申すのであります、我が日本國の國體は何かといへば、申すまでもなく君主國體である、政體は立憲政體であつて國體は君主國體であることは皆樣の夙に御存知の通りであります、君主國體であると申すのは、この日本國が天皇の御所有であるといふ事ではない、天皇は日本國を統治し給ふ所の統治權を持たせられるのであつて、決して日本國の所有權を持たせ給ふものではありませぬ、最も往古は天皇が所有權を持たせらるゝが如き考へを持つて居た時代もあつたやうですけ

三種の神器と天位の御璽と定めさせらる

れども、今日の如く憲法が明かに示して居る以上は、この理法も分らぬ者も居りますまい、畏れ多きことですけれども、若しこの日本國が、天皇陛下の私に御所有遊ばさるゝものであるならば、御意志の自由で大臣にでも誰れにでも、この國を御譲りなさることも出來る道理、または金錢を以て他國へ賣買することも出來る理窟でありますけれども、そのやうなことは假令皇室典範が出來ないでも、建國以來誰人も思ひに浮べたこともありますまい、抑も我が日本國は、伊弉諾、伊弉册の二神が始めて此國を建て遊ばされ數多の御子の御中から、最も聰明叡智にして、しかも寛裕溫柔に、謂はゆる慈悲忍辱の御德の、取分け優れさせたまふ天照大神を撰み、始めて天皇の位に進めて此の國を譲り渡したまはれ、其後天照大神は、皇孫瓊々杵尊を天位に御即け遊ばされ、三種の神器即ち八咫の鏡、叢雲の劍、八尺瓊の曲玉とを御手より御手に御授けに相成り、千代萬代の末かけて天位の御璽と定めさせられ、刺り宣ふには、この日本國は、吾が子孫の代々王位を踐むべき國なるぞ、爾

瓊々杵尊、吾が位を嗣いで天が下をば平かに安らかに始めよかし、天津日嗣の榮え行かんことは、天壤と共に彊りなからんものぞと仰せ出だされました、これが萬世一系の皇統の由つて出でたまふ所で、此の神勅は實に國體の腦髓、日本國の精神であります、御代々の天子樣はこの御神勅を御遵奉遊ばさせられ、殊に有り難いことには、今上天皇陛下は、親しくこの神勅を奉じさせられて、御先帝に對せられては孝となり、御歷代に對せられては大孝となり、天下またこれに双ぶの美事はありませぬ、御互臣民たる者は、力を協せ心を一にし、陛下の神勅を奉じさせらるゝ、御叡慮に副ひ奉ること、影の形に隨ふが如く、手足の頭目を助くるが如く、時宜と場合とによりては、死を鴻毛の輕きに比して御奉公申上ねばなりますまい、それが直に今上陛下に對し奉りては忠となり、御歷代に對し奉りては大忠となるのみならず、御互の祖先も、本より御歷代の大德大恩を戴いて恃み奉つて居たのであるから、この御奉公は直に親に對しては孝となり、祖先に對しては大孝となるのではあ

りませぬか、畏れ多くも御歴代天皇の玉體を廻る御血統も、また下吾々この身體を廻る血汐も同一て、御互はその大先祖を皇室と同じうして居るのでありますから、吾々は我陛下に對し奉りて、忠を盡すのが直に祖先に對するの孝となるのであつて、君民一體、忠孝一致と申すのはこの事であります、これが即ち世界萬國に比類のなき、宇宙第一の道德と申すべきでありましょう、君に忠を盡せば親に孝となり祖先に大孝を盡せば御歴代に大忠となり、大忠大孝を一身に行ふことの出來る國は世界に比類はありますまい◉勝軍王所問經に「王、慈心ヲ以テ諸ノ人民ヲ觀ルコト既ニ子ノ如シ彼ノ一切ノ人民モ亦タ復王ニ於テ其ノ父母ノ如シ」と御說き遊ばされたのは實に此處のことです、この君民一體忠孝一致の道理を能く〳〵體得することが出來たならば國王の大恩の萬分一に報答し奉ることが出來ます

國王統治（下）

◉華嚴經にも「國ニ君王アリテ一切安キコトヲ獲、是故ニ王ハ一切衆生安樂ノ本ナリ、在家出家ノ精心道ハ皆正國ニ依リテ住持レ、演化流布セラル、若シ王ノ力ナクンバ功行成ラス、法滅ビテ餘リナカラン、何ゾ能ク利濟スルヲ得ンヤ、是故ニ修スル所ノ一切功德ノ六分ノ一ハ常ニ國王ニ屬ス、願クバ王ノ福山ノ如ク崇ク、固ウシテ壞レ難キコトヲ」と御說き遊ばされてありますが、如何に佛法を弘めやうとしても、國王の力がなくては眞實に弘布ることは出來ませぬ同じ◉華嚴經に「人ハ王ヲ以テ命ト爲シ、王ハ政法ヲ以テ身ト爲ス、世道既ニ和平ナレバ佛法茲ヨリ始マル」とも御示し遊ばされてある、我日本國各宗ノ祖師樣方も、悉く佛陀の御教に從うて、王法と佛法との二致なきことを御說き明しになつて、各々その宗旨宗派を御宣布め遊ばされて居られます、中にも今引證した華嚴經の御文と能く似た語は◉承陽大師が「國家に眞實ノ佛法弘通スレバ、諸佛諸天ヒマナク衞護セルガユヱニ王化太平ナレバ佛法ソノチカラチウルモノナリ」と仰せ出だされたこともあります、傳

敎大師は、比叡山を開いて鎭護國家の道場とし、見眞大師は朝家の御爲めに念佛を申すと仰せられ、各宗の祖師樣方は一人として、國王統治の大德大恩を御說き遊ばさぬ方はありませぬ、また、御歷代の天皇も、佛法が日本に傳來してより以來は、悉く御信仰あらせられ、中にも法皇入道として御受戒遊ばされ、法名を唱へて何々法皇と仰せられたるが、三十八法皇も御出で遊ばさるのであります臣下の者共も亦その通り、佛法を信仰することの深いほど、國王の恩の廣大無邊なることを仰いで、誠心一意、大君の御爲め國家の爲めには身命を拋つても盡すやうになつたのであります、なるほど佛法が我國に傳來しない以前でも國民は天皇を神聖なるものとして仰ぎ奉り、義の爲めには一命を捨てるといふやうな大和魂は固有たものには相違ありませぬけれども、佛法が渡來してよりは生死透脫の大問題を解決して、佛陀の說かせられたる四恩の道理を信じて大君の爲めに盡すのですから、凝つて百鍊の鐵となり、發して萬朶の櫻となる底の大和魂には一段の光輝を放つて、國威を

四海に示すやうになつたのであります、それゆゑ、佛法傳來の當時から、聖德太子樣を始め、大臣公卿文武百官より下庶民に至るまで、皆佛法を尊信して、國王の大恩に報答し奉らればならぬことを知つて居るのであります、我邦で忠臣義士と言はれ、英雄豪傑と稱へられる位の人は、大抵皆佛法に深く皈依して國王の大恩大德に報答し奉ることを得て居られます、古で言はゞ藤原鎌足公と言はず、和氣淸麿公と言はず、君王に大忠を盡されたる方々は恐く佛法篤信の人ではありませぬか、三歲の童兒も知つて居るアノ京都北野の社に祭られてある贈正一位太政大臣菅原道眞公は、天滿大自在威德天神と申して居りますがこの道眞公も非常に佛法を御信仰なされた方で、手づから御經を寫されたものでも隨分澤山あることは皆樣御承知の方もあるでせう、道眞公は初め式部少輔文章博士から、宇多天皇に仕へて重く用ゐられ、天皇が位を退き給ふに及んでは、幼主醍醐天皇を輔け奉りて多くの績を立て右大臣に叙せられ、朝野の人望を一身に集めて、忠誠を盡して居られました昌泰三

年九月十日に大内の宴に侍つて、

君富春秋臣漸老　思無涯岸恨猶遅

といふ詩を作つて、仙洞御所に奉ると、叡感の餘りに御衣を賜はつたことがある、その翌年に左大臣藤原時平公が、己れは藤原氏の嫡子にして世々相門の家であるにも拘はらず、聲望が遙かに道眞公に及ばぬことを嫉ましく思ひ、謀を構へて惡しざまに讒言しまするとと天皇はそれを信じ給ひて、道眞公の位を取り上げ、九州の太宰府に流されました、その時公は一族廿三人の者と共に九州の配所に在りて、憂き月日を送られても、サラ〳〵天子を御恨み申さず、明け暮れ東の空を打ち拜み、玉體恙なくまし〳〵て聖壽萬歳ならんことを祈り、恩賜の御衣を身に離さずしてその年九月懷舊の情に堪へずして

去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷腸、恩賜御衣今在此、捧持日々拜餘香、

と詠ぜられた、この詩は凡そ文字を知る者で暗誦せぬ者はないくらゐでありますから、皆樣も能く御存じのことです、すべて忠臣義士の節操と申すものは

變ある時に至つて著はれるものです、讒言に遭うて罪なきに、配所の月を眺めながら、靜かに香を拈じ經を誦し、安心立命して大君を慕ふ心の深くして君臣の大義を忘れられざるは、實に國王の恩を知られた者と申さねばなりませぬ、また、平重盛公が、父の淸盛が君臣の大義を忘れて、將に事を擧げやうとする時、それを諫めて佛の說かせられたる四恩のことを引いて、四恩の中にて國王の恩の重いことを演べ、忠ならんと欲せば孝ならず、孝ならんと欲せば忠ならずと言つて、重盛が進退此に谷まると言つて、涙を揮つて父を諫めたことも皆樣御承知のことでせう、重盛公が忠孝兩全の士と後世までも賞讚せられるのは、佛法の教に依りて能く國王の恩を報答せられたからではありませぬか、御互が國王の恩を酬いると申すのは、誰も彼も皆君の馬前に討死することでもなく、無理に一命を捨てゝしまはねはならぬといふ譯でもありませぬ各々その職務〳〵により己れの本分を守つて、社會の利益を增進して行きさへすれば、それがすなはち君恩報謝となるのであります、併し誰でも眞實

の誠意といふものは自分の一命を終へる時には最も著るしく分るものです、日本の軍人が自分の一身を鴻毛より輕んじ、君王の大義を山嶽よりも重んじて、軍人たる者の本分を盡して、イヨ〳〵戰死するといふ一刹那に臨めば、從容自若として天皇陛下の萬歲を唱へ歸するが如くに死に就くのは、最も能く君恩報謝の行爲が分るのであります、一昨年來の日露の戰役でも、美事の戰死を遂げたる美談を擧げたならば、實に枚擧に遑なき程です、そして日露戰役中の出來事は餘りに近いことなので、皆樣が能く御存じのことばかりですが、少しく皆樣の記憶を去りかけて居る日清戰役當時の、壯烈なる美事を紹介しますると、黃海の戰に清國の海軍に打ち勝つて、收容した軍艦の廣丙號を、新領土臺灣近海の警備に充てゝあつた時、澎湖島に殘つて居た清國の一士官が、官金を竊んで八罩と云ふ島へ渡り、不義の榮華を極めて居ることが其筋へ聞えたので、澎湖島の司宮內盛高氏は憲兵巡査を率ゐて其島に渡りその士官を捕縛する積りて便乘を廣丙號に賴まれました、ソコデ廣丙號は是

等の人々を乘せて、明治二十八年十月の廿一日午前九時に澎湖島を出發したのですが、此日は風が非常に荒くて波が高いから、成るべく風浪を遮るやうに軍艦を進めて居る中、鰺て晝食の時刻となり、一同が食卓につき今や箸を把らうとする其一刹那に、得も言はれぬ物音がして、軍艦はそのまゝ進行が止つた、すなはち暗礁に乘り上げたのです、アナヤと言ふ間に潮は瀧の如くに破れ口から逆り入り、見る〳〵三四尺の深さに及びました、ソコデ軍艦は蒸汽機關の力の限りを盡して、後へ退かうとしても、船は大きな巖と巖との間に挾まれて少しも動かなくなつた、軍艦には總て防水扉と言つて第一第二第三第四といふやうに幾つにも仕切つて扉を閉ぢ、他の部分へ水の入らぬやうにしてあるのですが、今は其第一第二の扉を閉ぢ、一方へは多くのポンプを仕掛けて侵入の水を拔き、一方には兵士が一同必死となつて立働き、桶や盥を以て水を汲み出し、或は重い物を他に移しなぞして、船を浮べる工夫をしても、潮は凄じい勢で瀧の如くに奔り入り、とうと防ぎ切れず、第三の扉

を越して、最早第四の仕切りのみとなりました、こゝは蒸溜機關の在る處で最も大切な場處、丁度人間で言へば心臟のやうな處、此處を水に呑まれたならば、船の命は全く了るのです、それで便乘者宮內氏等を助けねば日本海軍末代の恥辱となるといふので、備へ付けの短艇を下して、宮內氏を始め便乘者一同、軍醫官、主計官、病人、雇人などを乘せて、一士官が之を指揮して荒波の中に乘り出しました、其內に浪は益々烈しく軍艦を撲ち、第四の仕切りも水に侵かされて、蒸溜機關も全く其用を失ひ、船の首も愈々傾き最早最後に近づいたから、天皇皇后兩陛下、皇太子殿下の御眞影及び大切なる書類と、機關部の士官兵卒とを次の小舟に乘せて送り出し殘るは艦長を始め士官水兵總數七十四人は、海軍々人の本分として、船の命のあらん限りは決して軍艦を離るゝことは出來ない、その內に今まで干潮であつた海は、忽ち滿潮となり、潮の流れも益々急に、風と一つになつて船の橫腹に衝き當つたから何かは以て堪るべき船は忽ちグルリと橫に廻り、九分通りは水中に陷り、僅

に水の上へ出て居る甲板も、潮が瀧の如くに奔り込み、愈々船の命も今一刻と迫つて來ました、さすがに熟練なる海軍々人も今は最早せんすべなく、ただ天を仰いで命を待つのみとなりました、かゝるところへ忽ち艦長の命があつて、一同甲板に集り足下を波に洗はれながら、肅然として列を正し、最早最後に臨みましたから、喇叭の聲と共に軍艦旗を下ろさうと、一同帽を脫して、大日本の帝都東京の天に向つて最敬禮を行ひ、次に艦長につれて一齊に天皇陛下萬歲、皇后陛下萬歲、大日本帝國萬歲を唱へました、その時はさすがに猛き海軍々人も、無量の感慨が胸に溢れ、紅涙の潸として落つるを禁ずることは出來なかつたでありませう、波は益々荒くなり、萬雷の吼ゆるが如き響きがして軍艦を衝き、船體は次第々々に傾き、一同は甲板に立つことも出來なくなつた時、船はグルリと右へ返りて左の橫腹をあらはすと、一同は其橫腹にガヂリ附いたが、それも一刻で忽ち寄せ來る山の如き巨浪と共に、茲に廣丙號は敢へなく海の底深く沈み入つてしまひました、生命と賴む軍艦

の最後に至るまで、充分に其職分を盡し今はの際に臨んでも、泰然として少しも亂れぬその樣は、海軍々人の本分とは申しながら、實に言語に絶したる勇壯義烈の極みといふべきではありませぬか、この通り日本の軍人は力盡き理極つて死に就くといふ場合でも、必ず天皇陛下萬歲を唱へて、國王の大恩に報答するの覺悟を以て死に就くのであります、處が國王の恩を報ずるのは前にも申しました通り、誰も彼も皆大君の爲戰死をせよといふ譯でないことは申すまでもない、農家は農業商家は賣買、工業家は工業、敎育者は敎育といふやうに、各々その職分を盡して行けば直にそれが君の爲め國の爲めとなるのです、それを◉破邪顯正鈔には「凡ソ當流ノ勸化ニ於テハ、强チニ捨家棄欲ノ相ヲ標セズ、出家發心ノ儀ヲ事トセザル間、農業ヲ勉ムル者ハ勉メナガラ、是ヲ行ジ、宮仕ヲ致ス者ハイタシナガラ是ヲ信ズ、然レバ勉ムベキ所役ハ怠ラズ、限アル公務ヲ忽ニスルコトナシ、國ニ於テ煩ナク、人ニ於テ費ナシ」と御示しになつてあります、御互がその職務を勉めて居りさへすれば

それが佛法であつて、また直に王法と申すものです、それを蓮如上人も◉「佛法王法ハ一雙ノ法ナリ、鳥ノ二ツノツバサノ如シ、車ノ二輪ノ如シ、ヒトツモカケテハカノフベカラザルナリ」と仰せられてあります、して見ますれば御互が、日々夜々深く三寶を信じて爲ることなれば、それが直に佛作佛行となつて王法と異ならず、國王の大恩を報答し奉ることゝなるのであります

第十四座

三寶敎養（上）

今席は、三寶敎養の箇條に就いて御話し申します、これも前席と同じく四恩の中の三寶の恩のことです、三寶のことは第五座の歸依三寶の箇條でも一應御話し申して置きましたが、その時は歸依する當處は凡聖同體であるといふ道理を申し述べて置いたのです、只今は三寶の恩を說いて恩德報謝の意を御話し申すのであります、三寶の恩は皆樣能く御承知の方もありませうが、一

十七箇條の憲法

太田錦城の三寶

千三百餘年前、推古天皇の十二年に、聖德太子が日本の憲法十七箇條を御制定遊ばされまして、その第二條に◉「篤ク三寶ヲ敬フベシ、三寶トハ佛法僧ナリ、則ち四生ノ終歸、萬國ノ極宗、何レノ世何レノ人カ是法ヲ貴バザラン人尤惡スクナシ能ク教フレバ之レニ從フ、其レ三寶ニ歸セズンバ何ヲ以テカ枉レルヲ直フセン」と御示しになつてある通り、實にこの佛法僧の三寶は、人生最終の歸着する處、佛教の根本思想とも申すべきもので、太田錦城先生は鐵砲と、女房と、佛法が三寶て、國を治めるには鐵砲、家を齊ふるには女房身を修めるには佛法であると言れたことがありますが、眞箇に御互の當てにならぬ顚倒心を正し一身を修めて、身心共に大安樂の境界に到ることの出來るのは、佛法僧の三寶の宏恩によるのであります、三寶の恩は◉心地觀經に三寶ノ恩トハ、衆生ヲ利樂スルコト不思議ニシテ休息アルコトナキヲ言フ諸佛身ハ眞善無漏ニシテ無數大劫ノ間因ヲ修メテ證ル所ナレバ、三有ノ業果永ク盡キテ餘スコトナク、功德ノ寶山巍々トシテ一切有情ノ知ル能ハザル所

彌蘭王と那先比丘の問答

福德甚深ニシテ大海ノ如ク、智慧無碍ニシテ虛空ニ等シク、光明遍ク十方三世ヲ照シテ、一切衆生煩惱業障都テ覺知セズ、苦海ニ沈淪シテ生死窮マリナキモ、三寶世に出デ、大船師トナリ、能ク愛流ヲ截チ彼岸ニ超昇ラシム、諸有智者悉ク皆瞻仰シ奉ル」と御示し遊ばされてある通り、鐵砲と女房は國家を治めるに必要であることは申すまでもありませぬが、智慧福德圓滿なる御佛の眞法身は、光明遍く十方三世を照して、煩惱業障極りなく苦海に沈淪して居る一切衆生の大船師となりて、迷ひの流を斷ち截つて悟りの彼岸に到らしめて下さるのであります、それに那先比丘經に譬喩を引いて御示になつてありますが◎或時に、彌蘭王といふ王樣が那先比丘に問うて「人がこの世にあつて、百歲まで惡を作つても、死に臨んだ時、眞實に佛を念すれば、死んだ後は天に生ずることが出來るとの佛說は、我はこれを信ずることは出來ぬ、また一衆生は殺すも死して地獄に墮つるとは、これも亦信ずることは出來ぬ」と申されますと、那先比丘は王に問うて「若し人が小石を持つてこれを水の上

に置かば、この石は水に浮ぶでせうか、はた沈むでせうか」と、すると王は「それは沈むに相違はあるまい」と答へられた、那先比丘は更に「若し百枚の大石を持つて、これを船の上に置かば、その石は沈むでせうか」と問ひますと、王は「それは沈む譯はあるまいと」答へられた、ソコデ那先比丘が「その通り百枚の大石が沈まないのは、船に依るからである、人がたとひ百歳に至るまで惡を造つても、一時眞實に佛を念ずれば、これを以て地獄に入らずして、天上に生を受けることの出來ると同じこと、まだ石は小さくとも船の上に置かなければ、水に沈むものである、これは一衆生を殺すといへども、若し三寶の力に依らなければ地獄に墮ちると同一の道理である」と申したので、王は忽ち三寶歸依の身となられたことがあります、三寶の光明は隈なく照鑑して、十方三世に其功德は充滿して居りましても、衆生の方でその功德を蒙ることの出來ないのは、眞實に三寶に歸依し奉らぬからであります、それは●心地觀經の中に、「時ニ五百ノ長者ハ佛ニ問ヒ奉リテ曰ク、佛寶ハ常ニ

衆生ヲ利益スルニ、何故ニ世間ノ衆生ノ多クハ佛ヲ見奉ラズシテ諸苦惱ヲ受ルヤ、佛ノ、五百ノ長者ニ告ゲ給ハク、譬ヘバ日光ハ普ク世界ヲ照スト雖モ、盲者ハ皆其光明ヲ見サルガ如シ、多クノ衆生ハ常ニ惡業ヲ造リテ覺知セズ、慙愧ノ心ナク佛法僧ニ親近マズ、若シ衆生アリテ三寶ヲ尊重せば、是人業障消除シテ福智增長シ、善根成就シテ永ク生死ヲ離レ菩提ヲ證セン」と御說き遊ばされてある通り日光が遍く世界を照しても盲者はこれを見るとは出來ませぬ、私共が眞實に三寶に歸依し奉りて、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧と唱へた時は、諸の業障は跡形もなく消え果てゝ、生死輪廻の苦を離れ菩提涅槃の境界に到ることが出來るのであります、さうしてこの佛法僧を三寶と稱へて、三つの寶といふのは、この寶に六義があるのです、それは寶性論の中に出て居りますから、その名目だけを列べると、一ニハ希有ノ義、世間の財寶でも貧窮の人は持つことの出來ないやうに、佛法僧の三寶は、薄福少德の者は百千萬劫にも値ふことが出來ぬから寶といふのです、二ニハ離垢ノ

義、世間の眞寶もその體は諸の瑕穢を離れたもの、三寶も亦その通り煩惱も妄想も離れ切つて無垢清淨のものであるから寶といふ、三ニハ勢力ノ義、世間の珍寶は貧を除き苦を去り、金是れ權て非常なる勢力のあるもの、佛法僧も不思議の六神通を具して、侵すことの出來ぬ大勢力を持つて居るから寶といふ、四ニハ莊嚴ノ義、世の珍寶は能く身首を飾り、一切の裝飾に用ゐて人をして美感を起さしめる、三寶も能く行人を嚴つて身を清淨にせしむるもので あるから寶といふ、五ニハ最勝ノ義、世の眞寶は一切世間の中に於て最も殊勝である、佛法僧は世間出世間にこれより勝れたるものはないから寶といふ、六ニハ不改ノ義、世の眞金は燒いても打つても、磨いても錬つても更に變らぬやうに、三寶も三世を窮め十方に通じて、火に入つても燒けず、水に入つても溺れず、從劫至劫少しも改變することがないから寶といふ、これを三寶の六義と申すのです、この尊とき三寶の御前には、畏くも御歴代の天皇様も禮拜御歸依遊ばされたのであります、天智天皇様の如きは

江州に崇福寺を御建立の折は、自ら御指を切らせられて、寺塔の地鎭を遊ばされ、聖武天皇様は朕は三寶の奴なりとまで仰せられ、桓武天皇様は只今の京都へ都を御移し遊ばされた時、傳教大師の奏上を御採用あらせられて、九條の袈裟にかたどりて町の區劃を定め、一條毎に法華經を地中に納められたと申すことであります、佛法が我日本國に傳はりてより今日までに、天皇様が御入道遊ばされて、法皇の身とならせられたのが三十七方もあり天皇の御子様で入道せられましたのが二百三十餘人、皇后様で御剃髮遊ばされて尼の御身分とならせられたのが七十餘人も居られます◎中にも聖武天皇の皇后様で、光明皇后と申し上げる御方は、淡海公の第二女と御生れ遊ばされ、御容貌が如何にも美麗にして、光り輝く程てあつたから光明皇后と申し上げるのであるさうです、天平六年の正月に御母橘氏の追善の爲めに、興福寺の西に金堂を建て釋迦十大弟子の像を安置せられ、また聖武天皇様は日本の國々に國分寺を御建て遊ばされたのも、また東大寺を御造りあらせられたのも皆この

光明皇后様の御勸めに由つたのです、その外に悲田院とか施藥院等を置いて天下の窮民を救ひ難病者を療養せられました、慢心といふものは恐ろしいもので、東大寺の慶讃法會を修するに及んで、皇后様が御獨り思はれますに、金銅十六丈の盧舍那佛の大像も、その大伽藍も皆成就し、天皇は外に御勗めあらせられ、自分は內に之を營んだのであるこの大功德は何事もこれに勝れたことはあるまいと、竊かに誇りの思ひを起された、スルト一夜宮中の天井に聲がありて、「皇后必らず誇ること勿れ、經文に妙觸宣明浴室澍灌と言へることあり、其功德廣大なり」との意味の語が聞えました、皇后はこれを聞こしめして直に浴室を御建て遊ばされ、貴賤を問はず貧富を論せず、悉くこれに入浴せしめられ、また自ら誓つて、我れ手づから一千人の垢を洗ひ去らんと仰せられまして畏くも九重の大奥におはします尊き御身を以て、自から湯殿に下らせ給ひ、御手に人の垢を掻き洗はせられた、既にして九百九十九人を終り、最後に一人の癩病者が來まして、偏身に膿血が流れて臭氣が室內に充ちて堪へられぬ程てあつたから、皇后は誰か餘人にこの垢を掻かせやうかとせられたが、又思はる〳〵やう今この一人にて千人に滿つるものを、この人を嫌は〳〵誓願は更に水の泡とならんと思召し、臭穢を忍びて背の垢を掻かれますとその癩病者の申すやう、下郎はこの惡疾を受けて、見かけの通り滿身の瘡か潰えまして難儀致しまするが、醫師の申すには、人にこの膿を吸ひ取らせば直に癒えるとのことなれど、世にはこの膿を口で吸ひ取つて吳れる程の慈悲深き者もなく、何時までも苦痛を受けて居りますが、今皇后様の無遮の大悲を行じ給はれますが願はくは慈悲心を以てこの膿血を吸ひ給はゞ大善功德になりまする、若し吸ひ給はずば無遮の悲濟とは申されまじと願ひますので皇后様はこれこそ眞の菩薩行なりと思召し、その臭き病人を頭から足の先きまで、瘡の膿を悉く吸ひ終り、ソコデ皇后様はその病人に向つて、我れ汝の瘡を吸取與へたりとは人に語るなよと仰せられますと、この時その病人が顧み告げて、皇后必ず阿閦佛の垢を掻きたりとは、愼みて人に語り給ふなよと言

うて、大光明を放ち金色妙相の形を現じて、虚空遥かに飛び去られた、その時臭穢は忽ち變じて香氣薫馥し、皇后は歡喜無量にして、後其地に就いて伽藍を建立せられて阿閦寺と號せられたとあります、これは光明皇后が眞實に三寶歸依の御身とならせられた時、無始以來の罪障を美事に消除して、その身そのまゝ三寶の露現となつて自己の光明蓋天蓋地、有情も非情も皆その光明に攝取せられ、その利益を蒙らぬものゝなき境界を申すのであります、

自己の光明蓋天蓋地

三寶教養（下）

佛法僧の三寶は、老病死海を渡る堅牢の船、無明長夜を照らす大燈明であるといふことを、經説を引いて如上までに縷々と御話申しましたが、皆様まあ能く沈思うて御覽なさい、私共御互は、平生起る自分の妄心が當てになりますか、昨日まで可愛いと思つた人が、今日は急に憎くなることもあり、今の今まで善いと思つて居ても、忽ちに悪くなることもあり、空行く雲か、遷流

れの水か實に當てにならぬものは御互の妄心てす、戀愛に煩悶し、生計に煩悶し、または人生問題に苦惱して、華嚴の瀧に身を沈めるとか、淺間山や阿蘇山の噴火口に飛び込むとか、それでも早や珍らしくないと見えて、那智山の瀑布までも足を運んで、可惜一命を一抹の水泡に歸せしめるやうな不心得の者もあります、これ等は煩悶苦惱の結果、失望落膽の餘りに身を棄てたのてすが、身を捨てないても、當てにならぬ自分の妄心のまゝに、竊盜、强盜詐僞、密通、聞くも忌はしき强姦とか鷄姦とか、喧嘩殺人、放火、誘拐、算へて見れば數限りもなき罪惡を犯して居ることは日々の新聞の三面を讀んでも知れるてせう、これ等の人々に就いて調べて御覽なさい、決して眞實の宗教とか、敬虔なる信仰心のある者はありませぬ、悉く皆、無明長夜の暗に入り、生死流轉の苦海に沈み、本心本性が、煩惱妄想の魔力の爲めに腐敗して居るのてあります、この腐敗を防ぐの鹽となり、この長夜を照らすの燈となり、この苦海を渡すの船となるものは何物てせう、これが即ち佛法僧の三寶

苦海を渡る船

てす、この三寶が私共を救ひ出す所の船となり、燈となり、鹽となればこそ御互は涅槃の安樂界にも到られ、菩提の佛果位にも上られ、眞如の寂光土にも住むことが出來るのであります、皆樣よく考へて御覽なさい、御互がこの當てにならぬ妄心を取り止めて、三世を貫き十方に涉り、悲喜苦樂を超絕したる大安樂の境界に住して、淸く正しき生活を送ることの出來るのは、何物に歸依ればよいでありませうか、爵位でも、金錢でも、名譽でも、健康でもとても吾々に大安心を與へることの出來るものではありませぬ、如何程身體が壯健でも、たゞ壯健なだけでは、食つて活きて居るといふだけのことで何の樂みもない、何とかして世間の人にも名を知られるくらゐになつて見たいと思ひ名を知られたばかりでも面白味がない、金錢がなくては安心が出來ぬ併し皆樣、金錢は幾等あれば安心が出來るものでせうか、恐く幾等あつても安心どころか、あればあるほどこれでも足らぬ、これでも足らぬ、吐月峰と金滿家は溜るほどきたないとかいふことがありますが、實際さうでせう、如

何程金錢があつても、これだけあれば最う澤山、この外には一厘も要らないと言つて、あるだけの金錢で安心をきめ込んで居る者はありますまい、却つて覺悟の持ちやうでは、安心といふだけなれば、金錢の有る者よりは、無い者の方が安心でありませう、金滿家は盜賊を怖れて、土藏の戶を二重にも三重にも締めた上に、周圍には高塀を築きそのうへ塀の上にまで釘を倒まに立てるやら、硝子の小片を戴せるやら夜分も微懼々々として、何か物音かすれば驚いて睡眼を醒まし、犬が吠ゆれば强盜が來たかと思ひ、七面鳥が鳴けば竊盜が這入つたかと疑ひ、夜の目も碌々眠られぬ始末、それでどうして安心が出來るものですか、そこになると貧乏人は氣樂なもので、盜まれる氣支ひもなければ、强請られる心配もない、サー火事とても言へばゴロリと刎ね起きて、心得たりと蒲團を一枚引ッ擔いで飛び出しさへすれば何の雜作もない、家の內にも居ないで、橋の下にても居る非人なんぞはまだ安心かも知れぬ、あつた事かない事か能く人の話すことがある◎歲の暮而かも大晦日の夜半過

ぎに何處かの橋の下に乞食の夫婦が、菰を着て寢て居ると、橋の上には借金取が財布を背負つて、提燈片手に忙がはしく、右と左と行きつ戻りつして居る、その有樣を見て例の乞食の女房が夫に向ひ、「何とまあ世間の資產家といふものは氣の毒なものではありませぬか、追ひつまつたこの歲の暮に夜半過ぎまであの通り眠ることも出來ないで、他人の家に行つて嚴談つけて居ると は笑止なもの、さうして見れば私等は氣樂なものではありませぬか」と言へば、その夫なる乞食の大將は、さも高慢な顏をして女房に對し、「コンナ氣樂な年送りをするのは、全體誰れの御蔭ぢやと思ふか、何の心配もなくかうして寢てさへ居れば、明日は早や目出度き新玉の春ぢや、乃公のやうな主人を持てばこそ汝までも、安心に眠られるのではないか、乃公の恩を忘れてはならぬぞ」と何れ劣らぬ氣樂な會話をして寢て居たといふことてありますが、別に褒めた話てもないけれども、心の持ちやうでは洗ふが如き赤貧に陷つても、眞箇の大安心は出來なくも、一分の安心は得られるものてす、足ることを知らない者は、食物が充分なれば衣服、衣服に不自由がなくなれば住家といふやうに、無限に望蜀欲の起るものてあります、平生大廈高樓に棲んて居る人は、をり〳〵は山間僻地の茅屋や、藻鹽たく海士の假家に足を入れたい氣の起るもの、美食ばかりして居れば時には淡白な粗食もして見たくなる、氣儘勝手をいへば限りもないものてす◎或人が何處かの宴會に行つて、非常に酒食を喫り過ごし、腹が張り出して苦しくてたまらず、便々たる飽腹をかかえて、息も絕え〳〵うめきながら歸りかゝると、途に痩せ痩れた乞食が飢えて、歩くことも出來ず、杖にすがつて漸く立つて居るのを、例の飽腹先生が見て非常に美しく思ひ、責めて自分もあの樣な乞食になつて、腹を減らして樂になりたいと言つたといふ話がありますが、足ることを知らないて、未だ〳〵と段々慾を起して行けば限りもないものてす、シテ見れば人は容易に金錢て安心の出來得るものではありませぬ、さうすれば爵位ても得たならば安心が出來るかと言へば、日外御話申したやうに、昔の大名が參覲交代の時

籠に乘つて東海道を通るのに、輿の內で起つことも寢ることもならず、行儀能く座つた切りで五十三驛を通過るので、世の中にこれ程難儀なことはないと思ひ込み、盜賊を處罰するに、籠に乘せて東海道を通して苦しめてやれと言はれたことがあるさうですが、位でも高ければ外から見ると此上なく安心てあらうと思はれますけれども、當人では安心どころではない、他人にも言はれぬ心配のあるものです、華族方の家庭のことは、成るべく新聞なぞには出さないやうにするのですけれどもよく〳〵包み切れないで折り〳〵新聞に出るだけの記事でも、皆樣隨分驚かれるでせう、なか〳〵安心どころではない、恐らくゴタ〳〵の絕える時はないでせう、シテ見れば爵位を以ても大安心を得ることの出來るものではありませぬ、さうすれば御互が大安心を得て淸く正しき生活をするには何物に歸依れはよいのでせうか、爵位も、金錢も名譽も、健康も、また食物も、衣服も、住家も、何も彼も吾々に眞箇の大安心を與へることが出來ぬとすれば、爵位はありながら、金錢は持ちながら、

名譽も健康も併せ得て、立派な家屋に綺羅を飾つて美味に飽きながら、日々夜々煩惱妄想に牽き舞はされて迷に迷を重ね、苦より苦に入つて居るのであります、それゆゑ佛法僧の三寶が、苦海の船となり、闇夜の燈となつて吾等を救ひ出だされるのでありますから、晝となく夜となくこの三寶に歸依し奉て、永世變らぬ不動の大安心を得るのであります、そのことを◎帝釋所問經に「人若シ一心ニ心ヲ誠ニシテ佛ニ歸依スレバ、彼人ハ必ス大ナル快樂ヲ得ヘシ、佛ノ心ハ晝トナク夜トナク衆生ヲ憶ヘハナリ、人若シ一心ニ心ヲ誠ニシテ達磨(法)ニ歸依スレハ、彼人ハ大ナル快樂ヲ得ヘシ、達磨(法)ノ力ハ晝トナク夜トナク衆生ヲ加持レバナリ人若シ一心ニ心ヲ誠ニシテ僧伽ニ歸依スレバ、彼人ハ大ナル安穩ヲ得ベシ、僧伽ノ威ハ晝トナク夜トナク衆生ヲ保護レバナリ」と御示し遊ばされてあります、この三寶は佛教の根本思想てあつて三寶に歸依せざる者は佛教信者とは申すことは出來ませぬそれゆゑ、何れの國にても世界中、佛法の行はれて居る處で、佛法僧の三寶に歸依せぬ者はないの

てす、小乘佛教の代表國ともいふべき暹羅などには、一國全體が佛法信者で國王を始め文武百官、苟も公職に在る者は必ず一旦得度の式を受けて、僧侶となるの例であつて、僧も俗も皆佛前に向つて、ブッタンサラナン、ガッチヤミ(南無歸依佛)ダンマン、サラナン、ガッチヤミ(南無歸依法)、サンカンサラナン、ガッチヤミ(南無歸依僧)と歸依三寶の禮讃文を唱へて、御拜を行ふと申すことであります、普通に支那や日本て唱へて居りまする禮讃文は、華嚴經に御示し遊ばされたる「自ラ佛ニ歸依シ奉ル當ニ願クハ衆生ト共ニ、大道チ解脫シテ佛種チ紹隆シ奉ラン、自ラ法ニ歸依シ奉ル、當ニ願クハ衆生ト共ニ深ク經藏ニ入リテ、智慧海ノ如クナラシメン、自ラ僧ニ歸依シ奉ル、願クハ衆生ト共ニ、大衆チ統理シテ、一切無礙ナラシメン、といふ御文を唱へて禮拜するのてありますが、少しく長いものてすから、普通は佛前に合掌低頭して、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧と唱へて禮拜するのてあります私共が煩惱妄想の總ての罪を解脫して、誠心に佛法僧の三寶に歸依し奉る時は、吾等が直に三寶の境界となつて、一擧手一投足がそのまゝ佛作佛行となり、眼には正しく色を見、耳には正しく聲を聞き、突兀として聳ゆる山は清淨身と現じ、漫々として流るゝ水は廣長舌と聞こえ、天地萬物は悉く佛法僧の三寶の露現れとなるのてありますこの時こそ眞實に三寶の恩を報謝し奉ることが出來たのてあります

第十五座

布施仁愛（上）

通佛教信仰箇條もおひ〳〵座を重ねて、起行門の中の四恩も前座までに濟みましたから、次の六德行に移つて御話申します、信仰箇條て六德行といふのは、普通佛教で六度とか六波羅密とか申すので、波羅密といふ語は申すまでもなく梵語てあつて、支那の語に譯せば到彼岸、到彼岸とは彼の岸に到るといふこと、煩惱妄想の迷の此岸より、生死流轉の河を度り、涅槃寂靜の悟の

彼岸に到るといふのが即ちこの波羅密で、その意味を約めて度の一字として通常は六度といふのであります、その六度を信仰箇條では六德行と申すのて順序は、一には布施、二には持戒、三には忍辱、四には精進、五には禪定六には智慧、これを語を替へて世間普通の語でいへば、慈善、修身、忍耐、勉强沈思、明辨とても言へば能く分るでせう、この六度は吾々の貪瞋癡の三毒から起る所の煩惱を取り除く爲めの修行で、六度には丁度これの反對になる煩惱を六蔽と申して、布施の反對には慳貪、持戒の反對には邪惡、忍辱には瞋恚、精進には懈怠、禪定には散亂、智慧には愚癡、これが六蔽です、この六蔽は三德が根本で、貪からは慳貪と邪惡、瞋からは瞋恚と懈怠、癡から散亂と愚癡といふやうな順になる、八萬四千の煩惱といふのも、その根原は貪瞋癡の三毒でありますから、その三毒を美事に對治さへすれば、即ち迷の此岸を離れて悟の彼岸に到ることが出來るのであります、その悟の彼岸に到るには、六度といふ乘物に乘つて度るのです、世間普通の事柄にしてもその通り

野蠻蒙昧の此岸から、文明開化の彼岸に到るには、この六度すなはち、慈善修身、忍耐勉强、沈思、明辨の六ッが揃はなければなりますまい、この六度に依つて、御互の精神狀態の智情意は圓滿に働くのです、慈善の精神を養ひ(布施)、規律を守る(持戒)のは美しき人情で、慳忍不拔(忍辱)と、刻苦勉勵(精進)とは强き意力がなくてはならず、不動の靜思と(禪定)、明辨修養(智慧)とは正しき智識が得られますこの智情意の三が圓滿に作用き、智識と道德との完全平均を得て、こゝに眞正文明の彼岸に到達することが出來るのであります、この大切な六ッの乘物なる六度を、只今から六座に分けて御話申すのてありますが、今席はその第一の布施仁愛の箇條に就いて御相談に及びます、布施といへば今日までの習慣として、和尚樣方から佛事法要に讀經して貰ふ時の御禮金のみのやうになつて居りますけれども、それはかりてはなく總て無緣の同情を以て施し惠むことて、慈善公共の事業は皆この布施の檀度といふことになるのであります、これも廣く布施の意味を解釋すれば、天地間のあり

とあらゆる物は、悉く施しあひ恵みあひならぬものはありませぬ、太陽は毎日休みなく全地球に熱と光とを施し、動物は酸素を吸うて炭素を吐き、植物はその炭素を吸うて酸素を吐き、宇宙の妙用は實に不思議なもので、施しあひ恵みあひでないものは一物もありますまい蘇東坡が言つたやうに、江上の清風と山間の明月は、耳之れに遇うて聲を爲し、目之れに遇うて色を成し、之れを取つて禁ずる無く、之れを用ゐて竭きず、實に造物者の無盡藏なりて、何を見ても何を聞いても、布施の姿ならぬものはない、柳は觀音微妙の相を現じ、松は說法度生の聲を吹き、黄鳥の啼くのまで法華實相の聲を弄して居るではありませぬか、シテ見れば御互が人々個々同情慈愛の精神を以て、相救ひ相助けるのは宇宙の眞理に隨順したるを行ひて、佛教信者たる者の爲さなければならぬことであります、況んや佛心とは大慈悲是なりの金言の如く慈悲を離れたならば佛教徒と申すことは出來ませぬ、皆様能く考へて御覽なさいこの慈悲ナサケの心がなかつたならば、人間世界は一日も成立つものでは

ありますまい、試に親と子の間からナサケの心を取り除けば如何てす親でも子でもなくなるてせう、兄と弟の間からナサケの心を取り除けば如何てせう兄でも弟でもなくなるてせう、人と人の間からこの同情を取り去つて、優勝劣敗に任せて置いたならば、それこそ世の中は弱肉强食て目も當てられぬ阿鼻叫喚の修羅場となつて仕舞ふてありませうてすからこの世の中は自然に同情仁愛の布施の姿がそのまゝに露現れて居るのてす、御互が若し慈善の心が薄くして、他の難儀を外に見るやうなれば、宇宙の眞理に背いて居ると申さなければなりませぬ、處がこの慈善といふことも、名聞や利養て報酬を求めるやうては佛教の精神に背くのてす、それゆゑ●華嚴經に「菩薩ハ大施主トナリテ一切ノ物ヲ等シク衆生ニ施シテ悔ユルコトナク、果報ヲ望マズ、名譽ヲ求メズ、勝處ニ生センコトヲ求メズ、利養ヲ求メズ但一切衆生ヲ救護センコトヲ欲シ、衆生ヲ攝取シ饒益センコトヲ欲シ、諸佛ノ本行ヲ學バントヲ欲シ諸佛ノ本行ヲ受持セントヲ欲シ、一切ヲシテ苦

チ離レ樂チ得セシメント欲ス」と御示し遊ばされてありますから、施しや惠みをする時には、名譽も利養も離れて、たゞ自分の本性なる慈悲心に催ふされ、一切の衆生を救ひ佛の本行を學ぶの精神を以て、布施の檀度を行はなければなりませぬ、そのことは◎臨濟宗の誠拙和尚、これは今から八十餘年前に遷化せられた大德で、鎌倉の圓覺寺に住職して居られる折のこと、山門を改築する時に、江戸深川の豪商白木屋某が、金百兩を懷にして圓覺寺に行きこれは聊か山門御改築費の中へ寄附致しますと言つて差出すと、誠拙和尚は一言の謝辭もなく受取つて、更に喜ぶ色もなく默つて納められた、すると白木屋主人はムッとして、これは和尚樣の御仕打とも存ぜぬ、不腹なりと雖も百兩の金は、私に於ては過分の寄附てある、それを受けて一言の御禮も申されぬは何事て御座ると言いますと、其時和尚は恰度爐の前て粥を煮て居られたが、その言葉を聞いて忽ち色を起し、鍋蓋を取つて白木屋主人の頭へ投げつけ聲を勵まして、何を申すか汝が慈善の心を以て汝の福田を植え、汝が善

根功德を積むのに、老衲の知つたことはない、老衲の禮を陳べぬが氣に入らぬなれば、この百兩の金を持ち歸れと言て金を投げ出されたので、主人は大いに自分の不心得を謝して、益々和尚に歸依したと申すことてすが、慈善は名譽や利養の爲めてなきことを能く示されたものではありませぬか、尤もこのやうなことは誠拙和尚にして出來たので、今時の凡暗和尚等が、寄附金なんぞ持つて來た人に向つて誠拙和尚の眞似などやつたならば、それこそ大變歸依するどころか檀家も何もバラ〳〵に離れて、寺の維持も立ち行かなくなつて仕舞ふかも知れませぬから、普通の人に出來ることてはないけれども、兎に角慈善を行ふ精神は能く示されたものてあります、元來自分に善事を行ふのは他が知らうが知るまいが、それに關係したものでない、自分の福德を積むのです◎昔、李之謙といふ賢人があつて、非常に陰德を積む人であつた處が或人が李之謙の許へ行つて私は先生が陰德を御積みになることを承つて常に敬服致して居りますと申すと、李之謙の答へに、陰德は耳の鳴るやうな

ものて自分には分るが他人に知れる筈はない、今貴殿が拙者の陰德を聞きつけたならば、最早他人に知れたのであるから陰德ではないと言はれたことがありますが、實に千古の名言ではありませぬか、皆樣の中にもをり〳〵耳の鳴る方もあるでせうが、カン〳〵〳〵と耳の中で鐘でも撞くやうに音がしますけれども、他には少しも聞こえないものです、御互が慈善を行ふにもその通り、自分で行ひさへすればよいので、名聞を求める必要はありませぬ、近い處で言へば、門先きに乞食が來たとしても、その乞食に物を與へて他に譽められたいと思う者はありますまい、尤も人によると乞食の素性までも質して、與ふべきか與へざるべきかと調べた上に與へる方もあるけれども、私はその時に自分の慈善心に催されて施しさへすればよいと思ひます、與へたが爲めに却つて乞食の怠惰心を起さしめるとか何とか言ふのは、それは利害損德の問題で、憐むべき乞食を前に控へて置いて彼是と講究する程のことはないでせう、この道理は曾て福澤諭吉先生が、福翁百話の中に陳べられたのが

實に能く分ると思ひます、文章は讀みさへすれば皆樣に分りますから讀んで見ませう、「路傍に難澁者を見て、之を助け之に錢を惠與するは、我一時の慈善心に慰むる方便なり、一歩を進めて其者の由來を取糺したらんには、眞實の不幸者も多からんなれども、中には平生の心掛け宜しからずして、遂に人に哀を乞ふの境界に陷りたる者もあらん、所謂自業自得、尙甚しきは態と難澁を裝ひ自ら盲目聾を眞似し、隣の片輪者を借用して我子と僞る者もあらん不埒至極に似たれども、惠與者の身と爲りては是等の詮索一切無用のことなり、元來この惠與者は深き趣意あるに非ず、唯通り掛りに憐む可き姿の者を見て聊の物を與へ、之を受けたる者が難有しとて苟且にも愁の眉を開き、悅ばしき顏色すれば外に所望はある可らず、之を喩へば枯木の淋しき枝に一寸花を咲かせ曇りし夜半の月をして一寸光を放たしむるが如し、其花と月とを觀るは觀るもの、爲めにして觀らるゝものゝ爲めに非ず、世間或は此旨を誤り些少の物を施すにも動もすれば先方の者の素性を疑ひ、彼の乞食は云々、此

の盲目は箇様々々ならんと慥と理窟を附けて逐ひ拂ひ、叱り倒す者なきにあらず謂はれなき事共なり、假令ひ其者等の本來が不埒にても不屆にても是れは先方の事にして、我れは唯一時の恵與以て同類人間の泣くを止めて笑ふを見るのみ、況んや難澁者必ずしも不埒者のみに非ずして眞實の不幸者も多きに於てをや、況んや我恵與の物とて誠に些細にして嚢中を輕重するにも非ざるに於てをや又こゝに一段を進め乞食の談を外にして、一切の寄附寄進義捐等も都て是れ先方の爲めに非ず、自分の慈善心を滿足せしむるなり、必ずしも人に名を知らるゝの要用はある可からず云々」と申されましたが、元より先生は宗教家として話されたのでありませぬから、私の考へとは多少の相違もあります、「我一時の慈善心を慰むる方便なり」と言はれた所は、宗教家なる私の申分とは少々違ひます佛教徒たる者が施しを致しますには前に引いた華嚴經の御文の如く、果報を望まず、名譽を求めず、一切衆生を救護はんと欲し、乃至諸佛の本行を顯現はさんと欲し、一切をして苦を離れ樂を得せしむるが爲めに、慈善を行ふのですから、慈善心を慰める方便といふばかりではありませぬ、併し先生のこの語は實に能く恵與者の心得を說き明かされたものであります、乞食非人の素性などを取り調べて後に施さないでも、憐れなるさまを見ればたゞ施しさへすればよいのであります、併しまた施しさへすれば、何を施してもよいと申す譯ではない、施してはならぬ物もあるのです、それは●寶積經に「施スベカラザル所復五事アリ、一ニハ非理ニ求メタル財ハ以テ人ニ施サズ、物不淨ナルガ故ニ、二ニハ酒及ビ毒藥ハ以テ人ニ施サズ、衆生ヲ亂スガ故ニ、三ニハ置羅機網ハ以テ人ニ施サズ、衆ヲ害フガ故ニ、五ニハ音樂女色ハ以テ人ニ施サス、淨心ヲ壞ルガ故ニ」とあつて幾等乞ふ者があつても、この五ッの物を與へることは佛制に背きますから注意せなければなりませぬ、これを除くの外は、本心佛性の慈悲心に催うされて布施を行はなければなりませぬ、布施を行ふには自分に餘裕があるまでに貯蓄して、それから後に施す

のではない、其時〳〵に施すのです、貯蓄して後に施すといふのは◎丁度百喩經に出て居る話のやうなものである、昔、或人が多くの客を集めて牛乳を供養しやうと思つて、自ら念ふに今から毎日乳を搾らば、餘りに多くして容れる器もなく、また之を貯ふれば腐敗するであらう、之を牛の腹の中へ貯へ置いて、多勢の客が來た日に一時に搾るに如くはないと、それから牛乳を捕へて、犢牛と處を異にして繫ぎ置き、一ケ月を經て客を迎へ、乳牛を引き出して乳を搾れば、乳は最早乾き切つて一滴も出なかつた、人が大いに富んで後に、大いに施さうとして、更に布施を爲さないで居て、イヨ〳〵施さんとする時に、水火盜賊の爲めに奪はれて一錢だも施すことの出來ないのは、丁度この牛乳の如くてあると百喩經に御示し遊ばされてありますが、御互は大いに富んで然る後になど〵言はないで、時々に布施を行ひたいものではありませぬが、施すのは自分の功德を積むのです●優婆塞戒經には「乞ヲ者ニ語ゲヨ汝今眞ニ是レ我功德ノ因ナリ、我今慳貪ノ心ヲ遠離スルハ、皆汝ガ來リ乞フ

ノ因緣ニ由ルト」と御示し遊ばされてありますから、この觀念を以て施さなければなりませぬ、そしてその施す物に、財施、法施、無畏施の三通りがありますから、順に御話申しませう

布施仁愛（下）

財施は身を潤し、法施は心を潤し、無畏施は身と心とを二つながら潤すといふ道理になるのであります、この三施を順次御話申しませう、

第一に財施、これは形の有る物を施すことて、金銀珠玉、飲食衣服、家屋田畑、香華燈燭、臥具醫藥等、これ等の形の有る物を施すものは皆財施といふのです、總て施しをするのは前にも申した通り、同情慈愛即ちオモヒヤリがなくては出來るものではありませぬ、凡そ文明と野蠻とを區別するには、種種の尺度もありますけれども、中にも最も著しく分るのは、この同情の範圍の廣いと狹いとにあるでせう、語を替へて言へば布施心とも、慈善心とも云

ふべきです野蠻人は慈善同情といふものは、其部落だけに止まつて、部落以外の者は一切皆敵なので、たゞにその家を焚きその家畜を奪ふのみでなく、甚だしきは其人を擒にし、其人を奴隷とし、更に甚だしきは、自分の部落以外の者は之を屠り、之を喰ふといふ始末です、現に臺灣の生蕃などは其實例ではありませぬか、吾々御互人類開發の歴史を繙ねて見ますれば野蠻朦昧から文明開化に進むといふのは、つまりこの同情の範圍が廣くなることです、人類の歴史は人々相敵する處から發程して、世界同胞となる處に到着すると申してもよいでせう、して見れば野蠻と文明との距離は、取りも直さず同情の距離なので、最も慈善心に富んだのが文明人で、慈善心の缺けたのが野蠻人と申して支えはありますまい、始めは人々互に相殺戮して居たものが、漸次に同情の範圍が恢宏くなるに從て孤兒院とか養老院などの設けが出來て、自身の親や子でなくとも、親を失ふた孤兒や、寄邊なき老人までも世話をして呉れるやうになり、赤十字の條約では、現在敵として闘うて居ても、負傷

もして戰鬪力を失つた者があれば、たとひそれが敵であつても、これを病院に收容して治療を施してやる、それが文明國の戰爭と申すものではありませぬかその通り人間は相互に慈悲同情の念を以て日暮しをして居れば、爲ることを作すことが任運と布施の檀度となるのであります、慈善とか施しとか申せば、餘程の財産家でなければ出來ないことのやうに思ふ方もあるでせうが、決して左樣な譯のものではありませぬ、如何に貧乏な一錢の貯へもなき身にも、慈善は出來るのです、祖師の御文言に「その物の輕きを嫌はず、その功の實なるべきなり」とある通り、施しは物の多少に係はるのではなく、名譽も利養も離れて慈善の赤誠より出たものなれば、假令一錢一草の微といへども、無量無邊の大功德となるのです、それは佛樣が◎優婆塞戒經の中にありがたき御示しがあります、財無キ人ノ、自ラ財ナシト說クモノハ實ニアラス、何ト、ナレバ、人トシテ一水一草モ有セズト云フモノ無ケレバナリ、極貧ノ人一食ヲ得タル後、食器ヲ洗ヒソノ潘汁ヲ施スモ、福ヲ得ン、縱令勞塵ヲ以テ蟻ニ

施スモ亦無量ノ福ヲ得ン、天下ノ極貧ト雖誰カ塵許リノ夢ナキモノアランヤ極貧ノ人衣服ナシト雖眞ノ赤露ノモノハアラジ、苟ニモ衣アラバ、一線ヲ拔キテ人ノ瘡ヲ繋キ施ヲ作セ、善男子、天下ノ人貧窮ナリト雖、其身ナキモノハアラジ、若シ施ス物ナキ時ハ、他人ノ施ヲ作スヲ見バ身ヲ以テ往イテ之ヲ資助ケヨ、若シ夫レ施スニ意ナクンバ、國主ト雖必ズ施ス能ハサラン」と仰せられてあります、この御文言は別に講釋するには及ばず御分りになるでせう、極貧にして施す物がなれば、食器を洗つてその滌汁を蟻に施しても福を得るとは、同情の範圍が如何に廣いかといふことが知れるではありませぬか夫れ施すに意なくんば國主と雖も必ず施す能はざらんとは、實に急處を突かれた御文言です、慈善心といふものは、資產家にあつて貧乏人にないといふ譯ではない、如何に貧窮人でも施すに意がありさへすれば慈善は出來るし、如何に金滿家でも施すに意がなければ慈善は出來ませぬ、施すに意がなければ、假令一國の主となつて居ても一錢の施しも出來ないでせう、シテ見

貧人も亦財施を爲し得らるべし

れば施しといふものは、資產の有ると無いとに拘はらず、慈善の誠心があるとないとに由るのです、それゆゑ、佛樣は猶貧乏人の慈善を示して●因果經に「若シ貧窮ノ人アリテ、財ノ布施ス可キモノナケレバ、他ノ施ヲ修スルノ時ニ隨喜ノ心ヲ生ゼヨ、隨喜ノ福報ハ施ト等シクシテ異ナルコトナシ、是レ亦太ダ易行ナリ何人カ能クセザラン」と御說き遊ばされてありますが、他の慈善を行ふのを見て、たゞ口端ばかりでなく眞實に心の奥底から隨喜ぶのは、實際に自分に慈善の心がなくては隨喜べる道理はないから、その福報が施しと等しいとは、ありがたい御文言ではありませぬか、他の慈善を行ふのを隨喜ぶくらゐの人は、自分に幾等でも資產があれば施しをするのは勿論のことです、そしてこの財を施すといふに就いても、救はれる方には種々の別がありまして、一家離散して一身の外に賴るべき者もなく、頸に袋を掛け缺椀を提げながら、行路に倒れ病苦に惱む者の憐れなことは申すまでもないことですが、また、親兄弟妻子を抱へて九尺二間の陋屋に病に苦しむ下等勞働者の

精神上の、苦痛も思ひやられます、かゝる病人は病さへなければ、一定の職業もあり立派に働く腕を持つて居るのであるから、これを救ふのは乞食や行路病者を救ふよりも、世を益するといふ點に至つては、その功德は廣大であるかも知れませぬ、この種の病人を救うて居られる一例を申せば、現に東京淺草區の高原町廿番地に設けてある救療院の如きは、餘り世人は知らぬやうてあるけれども、能く由來を聞けば實に涙がこぼれます、その創設は明治三十一年の三月で、芝區の濱松町に起り、後芝公園に轉じ、卅四年の十一月に下谷區善養寺町に移り、着々事業の効果を收め、患者の增加と共に院務を擴張して、最後に今の高原町廿番地海雲寺の境內に移轉して、世の慈善家の喜捨を仰ぎ、東京市內の各區役所に救療券を配付して貧窮病者の紹介を依囑し毎日平均百名の患者を施療して居るのです、この義俠的の同情深き事業を計畫して成効せしめたのは何人であるかといへば、主幹の高山喜內氏と同夫人ツヂ子の夫妻が、萬艱不撓の獨力に賴みて、今日あらしめたので、夫妻は自

分の衣服から諸道具までを質入れして、藥劑の補充をせられることもあるさうです、毎日の病人は、肺結核が最も多く、それに眼病から脚氣、疥毒黴毒甚しきは癩病までもある、それをツヂ子夫人は看護服を纏うて、不潔も厭はず懇篤に、言葉を丁寧に汚穢い身體を撫て擦り、溢るばかりの同情を以て取扱ひ、不潔なる一室も寶に慈悲の光明が輝いて居るやうに感ぜられます慈善の權化ともいふべき高山氏夫妻の九年間の苦心談を聞けば、如何なる人も涙がこぼれるでせう、これ等は自分の身を東京市內の窮病者に施して居られるので、財施者の好摸範と申すべきものであります、これに限らず御互が、同情慈善の赤誠より形有る物を施すのを財施と申すのであります、それから第二の法施、これは前にも申した心を潤すといふ方て、形の無い物を施すのてす、世界開闢以來法施を最も盛にせられた、法施の開山ともいふべき御方は、申すまでもなく大聖釋迦牟尼佛てして◉法華經に仰せ出だされたる如く「我世ニ出現スルコト猶大雲ノ一切ヲ潤スガ如ク、枯渇ノ衆生ヲシテ皆苦ヲ離レ

シメ、安穩ノ樂ヲ得セシメンガ爲メナリ、衆生ヲ安穩ナラシムルコトハ世能ク我ニ及ブモノナシ、大衆ノ爲メニ甘露ノ淨法ヲ說クニ、其法一味ニシテ唯解脫涅槃ニアリ、我一音ヲ以テ斯義ヲ演暢シ常ニ大衆ノ爲メニ因緣ヲ作ス、我一切ヲ觀ルコト普皆平等ニシテ、彼此愛憎ノ心アルコトナク、貪着ナク、障礙ナシ、恒ニ一切ノ爲メニ平等ニ法ヲ說キ、一人ト他人トノ別ナシ、常ニ法ヲ演說シテ曾テ他事ナシ」といふ御本懷を以て、正覺を成し給ひし曉より、入般涅槃の夕まで四十九年の間、國王、大臣、長者、居士、六道一切の衆生の爲めに、寒暑風雨の御厭ひもなく、緣に赴き感に應じ華嚴、阿含、方等、般若、法華涅槃と御說き遊ばされ、一日片時も獅子座の暖まる御暇もあらせ給はず、八萬四千の大法門を御說き遊ばされたればこそ、三千年の後三千里外に生を受けたる御互までが、その恩德に浴することが出來るのでありませぬか、世界は廣しといへども人類は多しといへども、東洋にも西洋にも世間にも出世間にも、無始の大古より今日に至るまで、大聖釋迦牟尼佛ほどの無量

無邊の大法門を御法施遊ばされた御方はありますまい、これが法施の始まりて、其後歷代の御祖師樣方は悉く法施を遊ばされ、中にもその國中のみでなく、遠く風土の變つた異域の土まで法施傳道せられた御方は數知れぬ程ですが、如來の敎法を支那に傳へられたる摩騰、竺法蘭の如き人もあり、比麻拉亞の氷雪を跨り、流沙の毒熱を涉り、千辛萬苦、異鄕の風雨に洒され、十八年の長き月日をかけて求法せられたる玄奘三藏法師もあり、「コロンブスの渡海より一千年も前に、遠く海路を一葉の孤舟に掉し、山岳よりも高き波濤に身を任せ、亞米利加へまで法を弘められたる齊の惠深法師のやうな方もありと云ふ說さへある、また鑑眞和尙は聖武天皇の詔勅に依り、我國に正法を布くが爲には、數回も日本海の暴風に異域に漂はされ、兩眼は明を失ふても遂に我國に渡來して律を傳へられたこともあり、また我日本國からは、眞如法親王の如きは、法を求めるが爲めに遠く印度まで行かうとして、渺々として際涯なき海波を渡り、峨々たる險阻の山路を越えて、老

檎の國に入り給ひし時、不幸にして虎の爲めに御身を害せられて、果敢なく御薨去なり遊ばされたこともありますが、近來では彼の釋宗演師が菅長の椅子を他に讓つて、一鉢千家飯、孤身雲水情、遠く亞米利加まで行つて、傳道布教につとめられたのも法施です、無論今日では海外へ布教傳道の爲めに渡航して居る布教師は、隨分多人數ありますが、皆是等は法施に相違ないのです、これ等は悉く出家沙門の身の上の法施であつて、皆樣にこの通りの傳道をなされと御勸め申すのではない、皆樣は何れかといへば寧ろこの法施に報いるに財施をなさらなければならぬ方です、併し皆樣も法施が出來ない譯ではありませぬ、否是非共法施はなさらなければならぬのです、けれども皆樣の行ふ法施と申すのは、佛樣や祖師樣方のやうな說法をするのではない、出來る人はやる方がよいけれども、何も說法しないでも自分の知つて居ることまた人の利益になること、思へば、何事でもそれを說き教へてやるのが法施です、都會に出て文明の空氣に觸着た人が田舍へ戻つて何も知らぬ人に向つて

說き聞かすのも法施です、手近く言へば他が途に迷つて、西へ行くのを東へ向いて進んで居るのに、貴君それは方角が違ふよ西へ行き給へと、一口教へてやるのも法施です、然るに皆樣は、最早懺悔も濟み三歸戒も受け、五戒を持ち四恩の道理まで御辨へなされた御方々ばかりであるから、今この六度の行を圓滿に修行ひさへなされればよい身の上でありますゆゑ、佛の正法を廣く多くの人々に知らせやう、力のあらん限り傳道布教して、自他平等にその利益を蒙りたいものではありませぬか、これが法施と申すものです、それから第三の無畏施、これは前にも申した身心共に潤すといふ方で、一切衆生に畏れのなきことを施すのですからその功德は實に廣大無邊なもの、去り乍ら一切衆生に無畏を施すといふことは、凡夫の所作には難行しいことです、が併し決して出來ない譯でありませぬ、醫師は病人に無畏を施し、慈母は赤子に無畏を施して居るでせう、病人が一穗孤燈の底に、悶え苦み氣息も絕え〳〵になつて居る時、親戚故舊の者等が取り卷いて介抱して居ても、如何するこ

とも出來ない、その時醫師が靜かに手を握り胸を撫でて診察して居ると、病人は醫師に手を握られて居る間は、一切の畏れは皆忘れて極めて安心することが出來るものです、併しこれも一分の無畏で、絶對に醫師に信賴して永く大安心は出來ますまい、絶對的の無畏を得るには、是非共悲智圓滿なる御佛の光明に攝取せられて、始めて無畏の大安心を得るのです、赤子の慈母に於けるもその通り、稚子は慈母ほど便りになるものはない慈母の懷は稚子の爲めに　金城鐵壁で、何か物に驚けば直に母の懷に籠城して安心して居る、矢張母は赤子の爲めには無畏を施して居るのですそれが一切衆生といふ多くの佛子の爲めには、誰が無畏を施して呉れるのでせう、取りも直さず御佛である憂喜苦樂定めなき身の御互が、眞箇の大安心を得て、八風吹けども怖ぢ畏れることのなき境界に至るには、絶對無上の御佛に歸依し奉るの外はありませぬ。眞實に歸依し奉つて、御互が御佛の心即ち大慈悲の凝固となつて居れば、一切衆生に無畏を施すことは出來るのです、羅漢樣の側に虎が少しも畏

れずに睡つて居るに不思議はない、自分が慈悲心を以て居れば、鳥でも獸でも畏れるものではありませぬ、皆樣の家に飼つて居る猫や犬は、皆樣の姿を見ても畏れはしないでせう、一切の鳥や獸に對して、皆自分の家に飼つて居るものゝやうに可愛がつて、佛の御心と同じ慈悲同情の心を以て接して御覽なさい、鳥でも獸でも決して畏れないやうになつて、無畏を施すことが出來ます、其境界に到る捷徑は、先づ絶對無上の御佛に歸依して、凡聖同體の尊き身の上となつて普く無畏を施さなければなりませぬ、如上だけの財施、法施、無畏施を行へば、六波羅密の第一布施の檀度を行じたと申すことが出來るのであります、この三つは、法施に報ゆるには財施を以てし、財施に報ゆるには法施を以てし、無畏施に報ゆるには恭敬禮拜至誠眞實を以てするのです、また三輪空寂と申して、能く施す者と、施される者と、施すべき物との三つは同一體にして別々ならず、慈善を行ふ時は、自分の爲でもなく、他の爲めてもなく、名譽の爲めても利養の爲めてもなく、自

他法界平等にして、慈悲同情の脫體露現となつて行けば此世ながらの寂光淨土となるのであります

第十六座

持戒正念（上）

戒の本體は宇宙法爾個々圓成

今席は、六德行の第二持戒正念の箇條について御話申します、持戒正念とは申すまでもなく、戒を持つて念念正しき道に住し、近くは人道を全うし、遠くは佛果菩提を證するに至ることであります、この戒といふ字義は、防非止惡と申すことで、諸の非法を防ぎ一切の惡事を止めるといふことですが、世間普通の語で言へば規律を嚴守することに當るので、元來戒の本體は宇宙間には法爾として顯はれて居ります、天地の間の物柄事柄は悉く秩序整然として、一絲も亂れたるものはありませぬ、惡心邪念を奇麗に離れて、正しく眼を開いて宇宙の間を御覽なさい、萬事萬物戒法の脫體露現です、天は高く地は廣く、山は突兀として聳え、水は漫々として流れ、春來れば百花爛漫秋到れば千山紅葉、鷺は必ず白く、烏は必ず黑く、犬は規律正しくワンと吠え、猫は間違なくニヤンと啼き、何でも彼でも戒に背いた者はありませぬ、私共御互のこの身體でも悉く規律は整然として戒法の露現ではありませぬか◉正行經に「汝ガ目ヲ端クセヨ、汝ガ耳ヲ端クセヨ、汝ガ鼻ヲ端クセヨ、汝ガ口ヲ端クセヨ、汝ガ意ヲ端クセヨ」と御示し遊ばされてある通り、御互の四肢五官を端くして居れば、この身このまゝで儘戒法の現れです、皆樣その身體を能く考へて御覽なさい、肩先きから二本の腕が出て居る、それが即ち手でせう、手のさきに五本の指がある、この手は全體何を司る機械でせうか、如何なる學者が考へても、如何なる數學者が勘定しても、この手は握る爲のものである と答へるの外はありますまい、また、下腹の兩側から二本の棒が出て居るでせう、それは申すまでもなく足である、その足は全體何をする爲めにあるのであらうか、これも如何なる人が答へても步行くが爲にあるのであると言ふ

十善と十惡との別

の外はないてせう、尤も越後獅子は手で歩くこともあるけれども、それは格別のことて、普通は手て握り足て歩くのが當然てせう、眼は何の爲めにあるかといへば、色を見るが爲め、鼻は香を嗅ぐが爲め、耳は聲を聞くが爲めに鼻が幾等調法でも色を見る譯には行かず、口が如何に利發でも聲は聞けない私共御互のこの身體は規律を案した處は少しもなく、全身が戒法の凝固てあると申してもよいてせう、然るにこの戒を犯して、身口意の三業共に種々の罪惡を作り、苦に苦を重ね、冥より冥きに入るのであります、身口意の三業を端しくはたらかして居れば、そのまゝ十善の道に合うて居るものを、端しくはたらかさないて逆に曲げるから、十惡となるのです、十惡とは身三口四意三、身には殺生、偸盜、邪婬、口には惡口、兩舌、綺語、妄語、意には貪欲、瞋恚、邪見、この十惡も身口意三業のはたらきてあるとは申すものゝその根本をいへば意即ち心てす、心さへ端しく治まれば身も口も必ず端しくなるに相違はありませぬ◎忍辱經に「遊心の士ハ後ニ悔イザルコトナシ、心

一人にして四人の妻をあつかふるの譬喩

チ恣ニスルノ禍ハ須彌ヨリモ重シ」とか、罵意經に「百ノ佛寺ヲ作ルハ、一人ヲ活スニ如カズ、十方天下ノ人ヲ活スハ意ヲ守ルコト一日ナルニ如カズ」とか仰せられたのもそのこと、また◎遺教經に「五根ハ心ヲ其主ト爲ス、是故ニ汝等當ニ好ク心ヲ制スベシ、心ノ畏ルベキコト毒蛇惡獸怨賊ヨリモ甚シ」と御示し遊ばされたのも、御互が心を端しくして居れば、四肢五官が悉く端しく働いて、所謂、聲は律たり、身は度たり、準繩を左にし、規矩を右にするといふやうなる境界に至つて、心の欲する所は悉く規を踰えない行爲となることを申されたのであります、然るにこの大切なる心を放つて更に護ることをしないから、遂に宇宙法爾として具つた戒法に背くことになるのです、それゆゑ◎阿含經に譬喩を引いて示されてある、こゝに一人にして四人の妻を持つ者があつて、第一の婦は、夫が非常に寵愛して、臥ても起きても、家内でも外出ても、未だ曾て離れたことなく、飲食も衣服も常に婦の言ふがまゝに與へ、暑さ寒さには、暖を取らせ涼を納れ、たゞの一度も與に爭ふたこと

のないくらゐの交情である、第二の婦は、坐作進退常に左右に在つて、之れに會へば喜び、之れに離るれば憂ひ悲むといふ有樣、第三の婦は、時有つて會合して、喜びの時や悲しみの場合に共に泣きまたは悦ぶくらゐの間柄、第四の婦は、常に夫に給仕して何事にも怠らず働いて居る、然るに夫は更にこの婦を護視寵愛せずして放過つて居る、この四人の婦を持つ夫が老衰に及び病もおひ〳〵重くなり最早此世にのぞみがなくなり、イヨ〳〵死に臨んだ時第一の婦を呼び寄せ、汝は乃公に殉うて死んで呉れよ、三途の河も共に手を取つて行かうてはないかと言へば、婦は妾は卿に隨ふことは出來ませぬと刎ねつけた、すると夫は、乃公は常に汝を寵愛して汝の言ふことは何事にても從はざることはなかつたではないか、今に及んで乃公の意に隨はぬかと責めると、婦は薄情にも、卿が今日まで妾を如何樣に愛して下さつても、一緒に死ぬことなんぞは眞ッ平御免ですと言ひ切つてしまつた、それで夫は止むなく第二の婦を呼んで、今乃公は定命盡きて此世を去るが、汝は乃公に隨て共に

死んで呉るであらうと言ば、婦は素知ぬ顏で、何てすか卿は常に頗る寵愛して居られる第一の婦さへも、卿に隨ないのに何て妾が隨ひませうと亦刎つけたすると夫は猶愚癡をこぼして、乃公は初汝を求める時の苦は一通りではなかつた、寒さに觸れ暑さに逢ひ、飢を忍び渴に耐へ、辛苦艱難して求めたのではないか、それに乃公に隨はないとは、餘りといへば輕薄なといへば、婦は何ですと辛苦艱難も聞いて呆れます、卿は自分が勝手に貪慾を起して、强いて妾を求められたてはありませぬか、妾の方から求めたのてはあるまいし一緒に死んで呉れなんぞとはよくもあつかましく言はれましたと、無人情に拒絶したので、夫は更に第三の婦に殉死を迫ると、婦の申すやう、妾は平生卿の恩施を受けて居ますから、卿の葬式は城下外れまてくらゐは見送つて上げます、けれど餘り遠方までは行く譯にはまゐりませぬ、一緒に死ぬことなんぞは思ひも寄らぬこと、御冗談も休み〳〵に遊ばせよと、ツンと澄まして見向きもしない、それで夫も詮方なく〳〵、日頃一番氣に適らぬ放過つて置

いた第四の婦を呼び、今更汝に言ふも面目ないが、乃公に隨つて死んで呉れるかと問ひかけると、婦は極めて溫順に決心を面に現して答へるやう、妾は元より父母の家を離れて、卿の膝下に御給仕申すからは、卿の樂みは取りも直さず妾の樂み、卿の苦みはまた妾の苦み、何事も之を與に致すべきが婦たるもの丶義務と心得ますゆゑ、この世て安樂を與にしましたからは、卿が死して去り給ふのに、妾が如何して生きながらへて居りませう、必ず御供いたして死出三途も越えますると誓ひましたので、夫は生前最も愛して居た三人の婦を隨へることが出來ないて、自分の意に叶はぬ第四の婦を從へて、遂に黃泉に赴かねばならぬことゝなつた、佛の仰せられますに、この四婦は譬喩を以て示したのてあるぞ、第一の婦とは即ち人の身てある、人は寒さにつけ暑さにつけ、その身を愛することは第一の婦に過ぎる程なれども、命終の時に至れば、身は忽ち地に僵れて肯て隨ひ去るものてはない、第二の婦とは是れ人の財である、之を得た時は喜び、之を失へば憂ひ、辛苦難難して之を集

めても、命終の時になれば、財寶は世間に殘つて悶着の種とはなつても、隨ひ去るものではない、第三の婦は是れ父母、妻子、兄弟、知識、奴婢等てある、命終の時になれば、互に相泣き悲みて、死人を塚間まて見送りして、各自ら家に還り、暫く經てば死人のことは忘れてしまふ、第四の婦とは是れ人の意のことてある、世の中の人は自分の心を愛し、之を守護つて居る者は少い、大抵皆心を放ち、意を恣にして貪欲、瞋恚、邪見の念を起して、正道を信ぜず、ウッカリとして惡事を働いて居るが、命終の時になれば、唯この心ばかりが附き添ひ從うて、苦より苦に入り、未來永劫惡道に墮ちて、浮ぶ瀨のなき苦みを受けねばならぬから、當に自ら心を端しくし、意を正しくせねばならぬぞと、阿含經に御示し遊ばされてあります、身口意の三業に由つて諸の惡事を作り出し、戒法に背くやうなことになるが、その本はこの意を正しくして行きさへすれば、自然に身でも口でも罪を造らないやうになるのです、戒法のことは第六座受持五戒の箇條て委しく御話申して置きましたが、前

申す通り、宇宙法爾として具つて居る所の規律を遵守して、佛の御心なる慈悲の本義に違はぬやうに致して行くのであります

持戒正念（下）

世間出世間の善根は尸羅の大地に依る

◎華嚴經に「諸〳〵衆生及ビ草木ノ一切生長スルハ、咸ク地ニ依ルガ如ク、世及ビ出世ノ諸〳〵ノ善根ハ、皆最勝尸羅ノ地ニ依ル、無戒ニシテ善道ニ生ゼンコトヲ欲シ求ムルハ、鳥ノ翼ナクシテ空ヲ飛バント欲スルガ如ク、人ノ足ナクシテ遊行セント欲スルガ如ク、マタ海ヲ渡ルニ船筏ナキガ如シ」と仰せられてありますが、およそ此世界にありとあらゆる物は、何でも彼でも殘らず大地に撐へられて居らぬ物はない、草一本でも地に依らないで空に生えるものでもなく、蟻一疋でも地に依らないで棲む譯には行かぬ、大地は實に一切萬物の母とも申すべきで、これがなくては何物も生ずべき道理はありませぬ、この大地がすなはち一切物質界の所依となり、母となるのであります、それと同じく世間出世間の諸善萬行、普通道德上の行爲や、宗教的の修養は、皆この最勝尸羅、尸羅とは前に申した戒のことで、この戒法に依るのである、戒法が所依となり、母となるので、諸善萬行は悉く戒法から生ぜぬものはありませぬ、現在世に於て立身出世することの出來るのも未來世に於て善處に生を受けるのも皆この戒法が土臺となるので、名譽も、德義も、健康も、總て戒法に依らないで求めやうとするのは、丁度鳥が翼なくして空に飛ばうとしたり人が足を運ばないで歩かうとしたり、また船筏がなくて海を渡らうとするやうなもので、到底何事も望み通りに得られるものではありませぬ近い處で言へば、皆樣の家庭の內でも、まづ兒童を御育てになる上から申しても最も重きをおかなければならぬのは規律でせう、居は氣を移すといふ語がありますが、家庭の內の規律かなくて幸福を得られる道理はありませぬ、家庭が亂雜になつて居れば、兒童までも自然と行爲が粗暴になつて、生長の後には家名を汚すやうになります、兒童を育つには朝起床の時間から、夜分就眠

る時間までも、規律正しく定めて置き、起きて朝餐までに爲すべきことから學校にても行く小供なれば時間を違へないて登校させ、放課後より夜間までのことまで、整然と規律を正して仕附けねばならぬ、さうするには親の方でも、矢張何から何まで規律を守らなければなりまずまい、自分は朝ても遲くなるまで床臨の裡に潜り込んて居ながら、目は醒めて居ても蒲團を離れないて、煙草を五六十服も續けざまに吹きつゝ、駄味聲を張り揚げて、嫁や召使に向つて憎まれ口をつき、また起きないて新聞までも蒲團の裡て讀み、先づ相場附けに目をつけて、無法の儲け口を算段するぐらゐはまだしものこと、小說や三面記事の而かも殺人强盜不義密通といふやうな、暗黑の方面ばかりを讀み、離床て後も祖先の靈前にさへ禮拜一つもしないといふやうな不始末不紀律ては、兒童を規律正しく養育するとの出來る筈はありませぬ、すべて家庭に兒童があれば、それを中心としてイヤたとひ兒童がなくても、家庭を作る以上は早晩小兒は必あるべき筈のものてあるから是非共兒童を中心として、何

事も紀律を正しく、庭園の作り方から、室内一切の裝飾までも調へねばならぬ小兒が寐ても覺めても見て居る扁額や、床の幅物、置物などが幼稚なる頭腦に及ぼす感化も、決して侮るべからざるものてす、規律を正すには爲ることと作すことばかりてなく、家屋の構造までも考へなければならぬ小兒を愛するにも、教へないてたゞ可愛がるばかりては盲愛て、却つて小兒を惡道に陷れるやうなものてす可愛がる積りて墮落させるとはなさけないてはありませぬか、中にも最も親達の考へ違ひと申すべきは、兒童に買喰ひをさせることてす、五厘とか一錢とか兒童の手て、辻賣りの飴や煎餅を買つて嚙つて居る、あの有樣は何といふ不注意なことてせう衞生上から言つても實に危險千萬てす私は買ひ喰ひをさせる親達の心根が分らない、折り〳〵親達に注意して、當家のお兒さん達に買喰ひをさせるだけは禁止ては如何てすと言へば、ナーニ隣家の小供等も皆やるのてすから、我家の兒だけ禁止せる譯には行きませぬと答へて、トント怪まないのには驚きました、皆樣能く考へて御覽なさい、隣

家隣家と言つても、その隣家の爲めには御自分の家が矢張隣家に當るてせう
先方の家ではこちらを指して隣家の兒が買食ひするから當家にも禁止せるこ
とが出來ぬと言ふてせう、隣家の子が手癖の惡いことをしても、その眞似を
させますか、自分の家の規律を正すに何も隣家の惡い處までも引き合ひに出
すには及びますまい、近處隣家の風義の善くない貧窮人の眞似をしないでも
先づ御自分の家の規律を正して、模範を示した方がよいてせう、さうすれば
その近處近邊の家の者等が、お隣家のお兒さんを御覽、行儀が善くて買喰ひ
などはなさらないではないかと、皆の人々が引き合ひに出して、自然と惡風
が矯めらるであらうと思ひます、兎に角家庭の戒法なる規律を素すのは、幼
少の兒童に買喰ひをさせる程惡いことはありませぬ、論より證據てす、皆樣
も御讀みになつたてせうが、先々月の萬朝報に出て居たてはありませぬか、東
京の感化院に收容せられて居る小供でも、大人でも、惡事を働くやうになつ
た原因は、悉く幼少の時買喰ひをしたが爲めてあるとあつたてはありませぬ

か、些細のことのやうでありますが、能く研究して見れば如何なる罪を造る
かも知れませぬ、私は買喰罪惡論を唱へたいと思ふのてす、何れにしても家
庭の規律を正すには、先づ小兒を中心とせねはならず、小兒の戒法は第一に
買喰ひから禁止して行かなければなりませぬさうして人々個々の戒法を持つ
のてす、戒法を持つと言へば世間の法律を犯さないことは申すまてもなく、道
德上の制裁に背くやうなことがあつてはならないのてすが、元來戒法と言ふ
ものは、前にも申した通り、宇宙間に法爾として具はつて居るので、二百五
十戒とか五百戒とか、三千の威儀八萬の細行と、種々に別れて居るのは、皆
宇宙法爾として露現れたる眞理の節書を、箇條を分けて並べたのてあります
が今この通佛教の信仰箇條ては、前に第六座受持五戒の座て御話申した通り
大別して第一不殺生戒、第二不偷盜戒、第三不貪婬戒、第四不妄語戒、第五
不酤酒戒の五戒だけを擧げてありますが、この五戒を立派に持てば近くは人
道を全うし、遠くは佛果菩提を證することが得られるのてす、處が、この五

飲酒の爲めに五戒を犯す

戒を持つ上に於て、皆樣の家庭の內では、この殺生とか偸盜邪婬妄語などを好んで犯されるやうなこともありますまい、何かの機會で本心を亂した時に犯すのですか、その本心を亂すのは何が動機になるかと言へば、酒ではありますまいか、私は酒を好みませぬから、イヤ好まないといふよりは性質大の嫌ひですけれども、皆樣の內には隨分お好みになる方もあるでせうから、酒の攻撃をするのはお氣の毒ではありますが、併しお好みになる方でも飲めば醉ふ醉へば自然と粗暴になるといふことだけは、知らない方もありますまいそれは昔も今も違はない處で、佛樣の御在世にも酒を飲んだが爲めに、五戒を悉皆犯した例もあります、毗婆娑論に出て居る話に◉昔、一人の優婆塞があつて、優婆塞とは佛の弟子なる善男子といふことてす、この優婆塞は性質が至つて慈悲深く、且つ賢良な人で、五戒を堅く持つて精進辨道の聞え高き人でありましたが、一時甚だしく渴して呼吸も出來ぬ程に喉が乾いたので、何か飲む物はあるまいかと思ひ探して居ると、一個の器に水があつた、これ天

の賜と急いでしたゝか飲んだのが、實は水ではなくて酒てあつた、過ちと申すものゝ酒を飲み込んだから早や五戒の中の不飲酒を犯してしまひました飲んだからには醉ふのは當然で、暫くする間にヘゞレケに醉つばらつて本心本性が狂ひ亂れ、醉顏朦朧として事あれかしと待ち構へて居る處へ、恰好隣家の鷄が物に驚いて駈け込んで來た、すると心性の亂れたるこの優婆塞は、よき獲物ござんなれと、直に鷄を盜んで殺し舌打ち鳴らして食つてしまつた、不偸盜戒と、不殺生戒を犯したことになる、その鷄を喫ひ盡した時、隣家の娘が鷄の行衞を探ねてその家に來ると、鷄は此處に居るからと欺いて引き込み強ゐて逼り寄つてその娘に通じた、それて不貪婬戒を犯しました、それから隣家よりその邪行を官に訴へて、訊問を受けた時、自分にはさる邪行を爲したる覺えなしと陳べたのが、取りも直さず不妄語戒を犯したのてす、この通り酒を飲んだが爲めに、正戒を殘らず犯したので、如來が諸の比丘衆に告げて、今より以後、茅葉の端を沾す許の酒滴をも飲むことを得ざれと御誡め遊

ばされたことがありますが實際に於て戒法を犯し、規律を紊すのは酒ではあるまいかと思ひますが皆樣如何でせう、涅槃經に「酒ハ不善諸惡ノ根本ナリ若シ能ク是ヲ斷除スレバ、則チ衆ノ罪ヲ遠ク」とありますが、規律を正しく守り宇宙法爾として亂れざる戒法を持つには差し當り飮酒を縱恣にしないで節約謹愼するのは、持戒正念の上には最も大切なる心得と申すべきであります戒法を犯すのは、事によると惡いことゝも思はないで、犯して居ることもあるものです

◎昔、晉の陶侃といふ有名な賢者がありましたが、この人は早く生みの母を喪うて、繼母の手に養育せられたのですが、不幸な者で父にも早く離れ、全く繼母一人の世話で生長したのです、處が、この繼母は世にも稀なる賢婦人て、陶侃が孤兒となりますと、假令我が胎から出なくとも夫の胤なれば己れの子に相違ない、那の樣にしても我が手に養育して、父の名蹟を相續させねばならぬと決心し、元より家は貧うして其日〳〵の糊口にも困る程てある

から、絲の紡ぎをして細き煙を立て、粉米の粥も我腹にはひもじけれども、帶引き締めて陶侃には飽くまで食はせ、綴れの着物已が肌には寒むけれども、陶侃には暖かに着せ、讀み書きの道より行儀作法までも、善き師匠につけて學ばせ、平生朋友と交るにも、學問修養のことなれは、日は暮れ夜は更けても馳走をして陶侃と共に饗應し、惡き友達が來て浮世の噂や、善からぬ無益の雜談などすれば、耳に蓋して物も碌々言はずして顏に憂ひの色を顯はし、その惡友が歸去れば後で種々に教訓して、生みの子よりも大切に養育するものであるから陶侃も自然と溫良に實の母よりも敬ひなつき、學問は隆々と上達して、經濟歷史の道にも暗からぬ天晴の學者となりました、或時、鄱陽の范逵といふ人がその家を過り、繼母は賢夫人その子は學者であることを知り陶侃を鄱陽へ連れ歸り官錄にありつかせました、陶侃は初め川奉行となり、魚を捕る筌の支配をして居りましたが、その節に鮎の酢を作り壺に容れて故鄕の母の許へ贈り、新鮮な鮎でありますから味ひの美い間に召し上れと申して

やりました、すると母は其酢の封をも解かないで、文を書き添へて陶侃の許へ突き戻した、その文の意味は、この酢を贈つて呉れたのは、定めしこの母に悦べよとて下されたのであらうが、其許の勤めらるゝ川奉行は、設ひ一尾の魚といへども外へ洩してはならぬと、公儀より仰せ付けられたる役目である にも拘はらず、斯様に公儀の目を盗み、竊にこの母に送つて呉れられても、母は少しも心に嬉しいとは思ひませぬぞ、其許はかゝる心底にては立身出世は思ひも寄らぬこと、却つて官錄も失つてしまひ、永々この母が苦辛して養育てた甲斐もなく、穢れたる名を萬代の末までも、殘すやうなことを仕出來すかと思へば、胸も張り裂けるばかりに悲しいぞ、この酢が如何して喉に通らうか、封のまゝに御戻し申すと、細々と書き添へて送られると、陶侃はその文を繰り返し巻き返し幾度となく、推し戴いて讀み下し、良久しく涙に咽び母の慈愛が骨身に徹してその文を懐中に入れ、我が爲めには孔子孟子の教へよりも難有しと、時々これを讀みては自ら心を誡め、役目を大事に勤めて、段

々と立身して後には大尉の位にまでも昇り、親子共に幸福なる生活を送つたとありますが、皆様この繼母の子を誡めたる教は、實に佛様の戒法に背かず毎々申す所の宇宙の眞理に合當して居るてはありませぬか、御互が日用光中この心得さへあれば、戒法を堅固に持つて念々正しき道を蹈み行うて行くことが出來るのであります

第十七座

忍辱宏量（上）

今席は、六德行の第三忍辱宏量の箇條を御話申します、この忍辱といふ言葉は、語便が少しく變に聞えて、臭い野菜物か何かのやうてすけれども、決してさうてはない、忍辱波羅密と申して實に難有い修行の法門てありますから其心して能くお聞き下さい、忍とはシノビコラヘルこと、辱とはハヅカシメ悩ますこと、他人が如何様に侮辱を加へても、それをジット忍びこらへて怒

忍の字義

逆情の境に對して怒る

りを起さないことです、忍といふ文字の形は、心の上に刃を置いてある、常に心を縦にしないやうに、刃を加へて制裁するのがシノブのであると、物知りの方は能く言はれるやうですが、それも一應の理はあるでせう、怒り腹立ちの我儘な心がムラ〳〵と起つた時は、しのびこらへる刃を上に加へて制せなければなりませぬ、全体人の怒つて居るのを、道理や理屈で説き伏せて、その怒りを止めやうとしても、それは到底無駄なことです、自分の度量を寛大にして胸を押へて堪忍するの外はありませぬそれを忍辱と申すのです、處がこの忍辱の反對が瞋恚即ちイカリ腹立つことですが、この瞋恚の煩惱を解脱しなければ眞實に忍辱の徳を全うすることは出來ませぬから、先づ瞋恚の方から説き始めませう、總て瞋るといふものは、違情の境と申して自分の思ひ通りにならぬ時、氣に入らないことのある時に瞋るものですが、瞋るのを善いことであると思うて瞋る者もないでせうけれども、皆様まあ能く考へて御覽なさい、御互が怒つた時に、人の本心を持つて居るでせうか居ないでせう

か、カッと取り逆上せて怒れば、眞ッ赤になつた時はそのまゝ赤鬼で、眞ッ青になつた時はそのまゝ青鬼でせう、その時によもや人の本心はありますまい、自分が怒つて居て、血走つた眼を以て世の中を見れば、烏の啼くのも雀の噪ぐのも癪に障り、花の咲くのも水の流れるのも腹が立ち、有情も非情も悉く怒つて居るやうに見え、天地は宛然一場の修羅道と爲つてしまひます、世の中に何が悪いと言つても、怒るくらゐ罪を造ることはありますまい佛様が戒法の第一に御誡め遊ばされた不殺生戒を犯すのも怒りの心から起るのです世にも怖ろしい人殺しは、迚も怒らないで出來るものではありますまい、五逆罪を犯して無間地獄に墮ちるのも皆瞋恚の煩惱から起るのです◎遺教經に「瞋恚ノ害は諸ノ善法ヲ破リ、好名聞ヲ壞ル、今世後世ノ人見ル コトヲ樂ハズ」と仰せられてありますが、瞋つたが爲めに諸の善法を破ることも、また名譽を落すことも、他人から嫌はれることも、これ等は皆様方の能く御承知のことです、十年二十年の間、骨肉の及ばない程の交際をして居ても、たゞ一朝

の憤怒の爲めに直に仇敵同士となることもあり、夫婦の間で極々内證に水も漏さぬ閨物語りをした相談でも、若し夫婦喧嘩でもしたならばそれこそ大變内證どころではない、近處へも隣處へも態と聞えるやうに、素敵波法な大聲を張り揚げて怒鳴り出し、漸く纏つて居た相談も直に毀れることとてせう、大抵事を破壞るのは瞋るからです、兎も角瞋れば損になることも大變にある、第一心に非常な苦痛を感じることは言ふまでもありますまい、平和な溫順しい心を持つて居れば、誠に安らかに氣樂で、何事でも公平に判斷が出來るけれども、一朝ムラ〳〵と瞋つて御覽なさい、痛いとも〳〵何を見ても聞いても面白いどころか癪の種で、たゞに心に苦しみを覺えるばかりてなく、身體を傷めることは非常なものです、かッと怒つて眞ッ赤になるのは、それだけ血が狂つて來たのでせう、皆樣も御實驗があるでせうが、何か氣に適らないて瞋つて居る時は、見たり聞たりすることが面白くないばかりてはない、食慾が進まない、進まないのみならず、喫べても消化しないてせう、

胃も腸も腦も心臟も、自然と害を及し、精神の非常に昂奮した結果は神經衰弱を起すのは必然の道理であるさうてす、御婦人方が産後に血が狂ふやうなことのあるのは、大抵何かのとて激怒るからぢやと聞いて居りますが、何れにしても瞋るが爲めに身體を害することは事實てせう、また瞋るのは經濟の上にも損失を來たすものです、赫と怒つて大事な品物を打ち毀すことは珍らしくないこと、腹を立てると酒てても自暴に飲み出し、杯が舞ひ德利が躍り、井鉢が毀れる、それだけ酒や品物に損のあるのみてはない、その翌日までも頭は重く、智慧は昏んで判斷力を失ひ、仕事は手に着かないて半病人の爲體、お金を儲けないばかりか、取り戻しのつかない時間を空しく過し、それくらゐて止せばよいが癖の惡い方は、破れかぶれに花柳界にでも遊び込み、家内にも明されないやうな費用を算段せなければならぬこともあるさうてす、瞋るのが不經濟てあることはこの通り分り切つたこと、また自分が瞋れば他人までも怒らせることがある、ことがあるどころてはない、賣り言葉に買ひ言葉

屹度怒るに極つて居る、が併しこゝで能く考へて見なければなりませぬ、佛樣が四十二章經に、他に向つて罵詈惡言を吐くのは、恰似口に穢い物を含んで、他に吹きかけやうとすると同じこと、他を汚すより前に先づ自分の口を汚すものであると御示し遊ばされましたが、他人を罵詈讒謗する時は、必ず自分の慈悲忍辱の佛心を取り失うて居るのです、これは理屈には合はないもので、瞋る時は最早自分の本心が迷つて居るから、自分に判斷が出來ないのです、百喩經に御示になつてある◎或時大勢の人が圍棋座になつて、其座に居ない一人の評判して、那の男は品行も方正で道德も堅固であるが、惜いことには二つの缺點がある、一つは餘りに瞋りつぽい惡癖があるのと他には何をしても輕躁ッかしい所作がある、この二つの惡癖さへなければ善い男であるが惜しいことではあると座中の一人が缺點を擧げて評語をして居た、處がその時、その男は側の座敷に襖を一隔てゝ自分を評語して居るのを聞きつけ急遽に瞋つて多勢の座敷に飛び込み、評語をした人の頭をポカ〳〵と撲りつけた、すると傍の人が、オイ〳〵君は何故そのやうな荒いことをするかと言へば、その男の答へに、己れが何時容易く瞋つたことがあるか、何時輕躁ッかしい所作をしたか、己れに二つの缺點があるとは不當な言ひ懸けてある、無根の惡口をしたから頭を擲つたが如何したかと、傍の人にまで怒鳴りつけたので、多勢の者が皆その男の瞋つぽいのと、輕忽つかしいのとを了知たといふことが出てをりますが、瞋るのは理屈にも何も合ふものではない●大莊嚴經論に「身ハ乾ケル薪ノ如ク、瞋恚ハ火ノ如シ、未ダ他ヲ燒クコト能ハズシテ先ヅ自ラ身ヲ焦ス」と御示し遊ばされたやうに、瞋り腹立つた時は、他よりは先きに自分の身を燒き焦し常識を失うて居るのですから、外から何と言ひ聞かしても駄目です、「己れが何時瞋つたことがあるか」といふその言葉さへも怒つて居るやうでは、理屈にも道理にも適つたものではありませぬ、前にも申した通り一切の功德善法は皆瞋恚の煩惱で破壞れてしまひます、私共が罪業を造るのは悉く瞋りから起ると申してもよいのです、それゆゑ佛陀は

最も詳かに、瞋りを對治することを御示し遊ばされて、瞋りの恐るべきことを說かせられました◉大日經には「一念ノ瞋恚ハ、能ク無量劫ノ善根ヲ焚燒ス」とも、また◉華嚴經には「一念心ノ瞋恚ノ火ニ因テ無量億劫ノ功德法財ヲ燒失ス」とも、或は「若シ人功德ヲ造リ、積ムコト須彌山ノ如クナルモ、一タビ瞋恚ヲ起セバ皆消滅ス」とも仰せられましたが、如何に功德善根を山の如くに積んで居ても、一朝の怒りて跡方もなく消え失せてしまふことは、元享釋書の中にもありがたい事蹟が出て居りますが、皆樣もお聞きになつたこともあるでせう◎昔、叡山の西塔寶幢院の正算大德の弟子に、釋の道乘法師といふ出家がありましたが、後に同山の法性寺に移つて閉居せられました、この方は少年の時から晝夜に怠らず法華經を讀誦して功德を積んで居られたが何分瞋恚の煩惱の强い性で、何か氣に適はないことのある時は、ムッと怒り出して朋友にでも兒童にでも、罵詈讒謗して勝手次第の暴言を吐き散らし、忿りの煩惱が息んで心が治ると、また直に佛前に向つて頭を叩きつけ、一心專

念に懺悔するといふやうな出家でありました、或時平常の如く法華經を讀誦し終つて、眠るともなく睡つて居る間に、法性寺を出て叡山の頂を指して登りますと實に不思議であるのは、今まで一度も見たこともないのに、麓から山頂まで一態に甍甎たる紫雲かたなびき渡り、その中には金銀珠玉以て莊嚴り上げたる寺塔があつて、その中には黃卷赤軸、紺紙金泥の御經が百千無量に積み重ねてある、道乘法師はこれを見て希有の思ひをなし合掌恭敬して居ると、その側に一人の老僧が立つて居られるから、道乘はその老僧に向つて、この廣大なる經藏は誰れが建立せられましたかと尋ねると、老僧は答へて、これは貴僧が年頃日頃讀誦して功德を積まれた經卷である、この大善根力に因つて、貴僧は必ず淨土に往生するは疑ひはないと言はれたので、道乘は世にもありがたく打ち歡ひ、つくづくと眺めて居る間に、何處から起つたともなく忽ちに一面の火となつて、焰煙天に漲り見る〳〵嚴麗殊妙の堂塔を燒き盡し、さしもの黃卷赤軸もたゞ一片の灰となつてしまひました、道乘は驚いて

その譯を老僧に尋ねると、老僧は、これは餘の儀でもない、貴僧は天性至つて瞋恚の煩惱が強いから、日頃法華經を讀んで大功德を積んで置きながら、一朝の怒り腹立つ惡念の火に因つて、如何なる功德でも燒き盡すことは、今現前に貴僧が見られた通りである、それゆゑ貴僧が今より非を改めて、斷然瞋恚の煩惱を對治し、ひたすら經文讀誦に志されたならば、必定して淨土往生の出來るは疑ひもなきことであると誡められた、それを聞き終ると午睡の夢の覺めて、痛く前非を悔い、それよりは怒りの煩惱をキッパリと止めて、至心正念に善根功德を積まれたと申すことでありますが、實にありがたい御敎てはありませぬか、十年二十年の間、交りを重ねた親みても、一朝の忿りて絕交し、水も漏さぬ間柄の夫婦に、楔といふべき子供までも出來て居ながらチョット一度の怒りの爲めに、悲慘なる夫婦別れまでもせなければならぬやうなこともありますが、この道乘法師の話は遺憾なく私共に瞋恚の煩惱を對治するに、善き敎訓をお示し下されたのであります、この瞋恚を奧事に解脫

することさへ出來るならば、忍辱の德を全うせられるのてす、瞋恚の害は大抵お分りになつたでありませうから、これから忍辱の御話をいたしませう

忍辱宏量（下）

この世のことを娑婆の世の中とは、能く人の云ふことて、皆樣も御承知のことてせうが、その娑婆とは天竺の語てあつて、その意味は堪忍といふ義になるのです、そのことは寶積經の中に娑羅起王佛が相莊嚴星宿聚王といふ菩薩の爲に御說き遊ばされてありますが、この世の中に生き永らへて居る以上は、何事でも堪忍して行かなければ治まるものてはありませぬ、生きとし生ける者に心のない者はない、心があれば隨つて貪瞋癡の三毒を備へて居る、この三毒の煩惱が衝突り逢へば、喧嘩、口論、それが甚しくなれば戰爭となるのてす、御互が自由意志を持つて居るからと言つて、何事も自分の想ひ通りにしたくても、世の中に棲息して居るのは自分獨りてないから、到底想ひ通りに